
暁紅を待て～青潟大学附属シリーズ中学編

舞夜じょんぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁紅を待て～青潟大学附属シリーズ中学編

【NNコード】

N6767E

【作者名】

舞夜じょんぬ

【あらすじ】

中学一年、晚秋。新井林健吾は愛するはるみを守るために天敵の杉本梨南、頭の悪い先輩の立村上総と戦っている。正々堂々いじめをせずに勝利を得るために健吾がぶつかり、知つたものとは？青潟大学附属シリーズ。

その1 いじめない理由

健吾が知っていたはるみはこんな泣き虫じゃなかつた。

ちょっと靴に変な虫入れられただけで足をばたつかせて泣きじやくり、悲鳴をあげるような女じやなかつた。

顔をこわばらせて足をばたつかせるはるみがいる。白いストッキングから這い上がつてくるのは灰色つぼい虫だ。よく便所にいる。そばで黒いびるびるのドレスを来たあの女がその足をひつぱたきながら何か命令口調で罵つてゐる。

「はるみ、黙りなさい。今脱がせるから」

「怖い、いや、怖い、気持ち悪い、梨南ちゃん、助けて」

地べたにぺたんと座り、うす桃色のスカートがべつとり泥で汚れていた。足をくねらせながら何度も叫ぶはるみ。

あの女の指だ。

離れる、佐賀から離れる。

健吾がこらえられなくなつたのは、小学校卒業式数日前の、あの瞬間だ。

「佐賀、俺の背中におぶされ」

「できない、できない、怖い、いや」

打ち所が悪かつたのか、スカートをまくつた状態で横たわつてゐるあの女を見据え、健吾ははるみに命令した。あの女と同じくらい強い口調で、決して逆らえないように。

「それに、梨南ちゃんが」

「お前まだこの女にくつついていたいのか。ばかやろつー。」

倒れている女に一発、一発蹴りを入れたがびくとも動かない。白いレースのついた下着が丸見えだつた。何度も動こうとしているらしいが頭が痛くてならないらしくうめいでいる。

「ほら、落ち着け。今から靴脱がせるからな」

黒いつやつやした靴。お姫様靴だと女子たちが騒いでいる靴だ。ぱちんと留める部分を外した。指先でも感じる滑らかさだった。はるみの足で踏み潰された白っぽい虫が注ぎ込まれていたらしい。あの女のせいだ。

この女が、佐賀にしたことすべてだ。

健吾はゆっくつと、手でその虫たちを靴の中からすくつた。指に「じよする感覺、まだ生きてこる。たぶん」につけられた虫だ。

「健吾、何するの」

指で数匹生きている奴を、田の前でだらしなく横たわっている女に振りかけた。ちらつと顔を見上げたが瞳はにくにくしままだつた。長い髪の毛をそのまま背中と肩に流している、墨で塗りつぶしてやりたい顔。

ざまあみろ。

もう一匹生きていた。ゆっくつと、艶やかな髪の毛の上に落とした。

「佐賀、行くぞ」

はるみが鼻をすすり上げながらも、黙つて健吾の肩に両手をかけた。ちょっとだけ膨らんだ足と尻に手がかかつたけれども、あえて感じない振りをした。重たい。

「いいか、もう泣くなよ。俺はお前のことを守るからな」

自分で恥ずかしい台詞だった。

正気で言えない言葉だと人は言つ。

けれど、この言葉なしで、健吾ははるみを守れなかつた。杉本梨南からはるみを取り戻すためには。

あれから半年以上経つ。だいぶはるみもある頃のようでおびえなくなつた。何かの拍子で健吾の田に見え隠れする時、いつも怒鳴つてしまつ。

「佐賀、いいかげん俺の前でびびるのはやめろよな

教室から連れ出し廊下で人がいないのを確かめる。

「お前、俺のことを信じてねえのか」

「信じるって、健吾のことを？」

「俺はお前にことを守るって言つただろ」

「ああ、くさい。白々しい言葉だ。相手がはるみでなかつたら健吾は死んだって口にしない言葉だろう。」

「だつて、健吾」

はるみはそれ以上の言葉を口にしなかつた。健吾の腕にもたれて顔をうずめるだけだつた。先生たちにばれたら大変なことになる。しかも野郎側は青大附中一年B組評議委員ときていて。クラスの野郎ども、同じ学年の連中ども、健吾はあえてよけいなことを言わせないようさまざまな取引をしている。決してはるみに手を出させず、うつかり誰かが悪口を言おうものなら半殺してするよりおどしをかけていた。

「いいか、あの女のやり方にまだおびえてるんだつたら、安心しろよ。佐賀、俺は正々堂々とあの女をつぶしてやる。佐賀が堂々との学校を歩いていくようにしてやる」

「健吾、そんなことしなくなつて」

表向きはるみはまだ、あの女のことを好きなふりをしていく。六年間さんざんこき使われた後遺症だ。

「お前が気付いてねえだけだ。いいか、佐賀」

俺はあの女たちと違う。汚い手を使いはしねえよ。

耳の上に大きく編み上げたお団子をくつづけているような髪型。いつか解いてしまいたくなる。本能がつづめき、たまらなくなつて健吾は窓に向こうを見た。

「どうしたの健吾」

「はるみの声が響く。」

「なんでもねえよ」

一年B組の教室に入ると空気は一転して息苦しいものとなる。健吾もそうだがはるみもたぶん、息がつまりそうだろう。前から一番目の廊下側の席に座り、真ん中らへんのはるみをちらりと眺めた。見張る、と言つた方が正しいだろう。なにせ後ろの悪魔に乗り移られそうな席なのだから。

はるみの後ろで、泥のような髪の毛を一本に結んだ女がじつと一点を見つめている。今年の三月、数匹の蛆虫を振りかけてやつた相手だ。健吾に復讐するだけでは物足りないとかで、今度ははるみにターゲットを絞っているらしい。

朝の会が始まり、健吾が号令をかけた。

「元気いいな、新井林。よおし、おはよう！　まずはな、溝口先生の容態からだ。先生は来月の手術に向けて……」

一学期に入つてから担任の溝口先生が体調を崩して入院していた。一部情報筋によると不治の病ではないかとの噂もある。もともと一学期から顔色の悪いこけた頬をしていた。クラスもごたごたしていたし心身ともに追い詰められていだらう、きっと。

代行の担任として、若い男性教師の桧山先生が入ってきた。教師になつて二年目、初めてクラスを持つのだそうだ。見た目はほとんど大学生と変わらない。髪の毛も前髪を軽く持ち上げた感じで、よくいる売れぬ役者さん風だった。校内女子の人気も相当なものと聞く。顔のいい野郎というのは、大抵性格がよくない限りやつかみの対象になるものなのだが、桧山先生だけは違つた。

まあな、この先生は、明らかに「男子」だからな。

大人としてまともな考え方をもつ教師は、この人だけだった。

なぜ一年B組の男子たちが桧山先生になつきまくつているのかを健吾は知つている。

「先生、いいですか」

「あの、今週の部活報告をやりたいんだけど、いいですか」
わざと、教室中央に響くよう、どすの利いた声で答えた。

「お、そつか。そうだなあ。先週のバスケ部、交流試合どうだった」

あまり答えたくない結果だが、健吾は振った以上答えるしかない。

「すいません。負けました」

「だらしないなあ、まあ力いつぱいやつた結果だからまあいいか。

今度の試合はいつだ?」

「来週もまたあります」

もちろん、悪びれずに答えた。

「そつか、お前もよくやつてるもんないな。来年は新井林がエースだもんないな」

にやにやしながら桧山先生は頷いた。次に別の男子を指名した。

「次はテニス部、お前はどうだった?」

「すみません、ぼろ負けでした」

野球部、卓球部、陸上部、バレー部、男子連中に尋ねていくのが、誰一人として勝利の報告を持つてくることがなかつた。なんてこつたないと健吾は思う。でも仕方ない。青大附中の運動部というのは、青潟市でも有名な超弱小部と呼ばれているのだ。四年前から委員会最優先主義に犯されてしまい、文化系・体育系の有能な選手がみな、委員会に走つてしまつていて、問題があると言われている。

「まあまあ、良く頑張つた。お前らはまだ先があるんだから、次回も燃えろよな」

ぼろ負け報告を受け取つた後、桧山先生は連絡事項を読み上げようとした。

「先生、よろしいですか」

虫睡の走る声が割り込んだ。せつかく朝さわやかな空気が流れているといつたのに、じつてしまつたじやないか。健吾は無視を決め込んだ。自分だけではない、周りの男子たちも、そして桧山先生も同じ表情をしている。

「なんだ、杉本」

泥髪の女・蛆虫を這わせた女。あの杉本梨南が立ち上がつた。ね

めつけるようなまなざし。周りの人間を誰も目に入れていないような、少しついちゃつたような視線だった。わざとらしい笑みを浮かべ、投げやりに答える桧山先生を健吾は、男として正しいと思つ。「弱弱しい部活の報告よりも評議委員会および他の委員会報告を最初に聞くべきだと思います」

「それは失礼じゃないかな。杉本、人にお願いする時の口の利き方はそれでいいのかな」

わざと優しい言い方をする桧山先生。

「桧山先生こそ、教師としての常識を覚えないで教師になられたようです。それはともかく、これから評議委員会の報告をさせていただきます。許可を求めてもすぐに切られるのでこのまま話します。今回の評議委員会は学校祭の反省および一年の合唱コンクールの結果についてでした」

いきなり許可も得ないでしゃべり始める杉本。

頭がおかしいぜ、あの女。

杉本の言つことも間違いではない。一学期に入つてからというものの、桧山先生が最初に決めたことは「朝の会において最初に確認するのは委員会報告ではなく部活の結果報告である」という点だつた。当然、評議委員の杉本が激怒しないわけがない。毎朝、委員会報告を行う時間になると桧山先生とバトルを繰り広げることになる。桧山先生も最初は馬鹿にした態度で無視していたのだが、杉本がしつこくしゃべりつづけるので仕方なく、話を聞く振りをしていた。学校祭、一年のクラス参加企画が一切なかつたのは、ちょうど中体連の時期だつたから。杉本はずつと一年の評議委員連中とくつついて何か手伝いをしていたらしいが、健吾を含めたの男子は無視していた。もちろん、桧山先生も。

うんざりした顔を隠さず、桧山先生は杉本の並べる御託を聞いていた。男子たちのつぶやき「また始まつたぜあの女」「頭おかしいんでねえの」「ばあか、ここでなんか言つたらセ」が聞こえる。あえて健吾は一切口を利かなかつた。

「よくわかつたよ。杉本。お前が言つことはよくわかつた。一応、言いたいこと言つたら満足しただろ?」

「ちゃんと先生が理解されたかどうかは定かではありませんが、真つ正面からじつと見つめて答える杉本を、徹底して鼻で笑う態度に健吾は満足していた。

「君は、頭がいいね。とにかくこれで終り。座りなさい」「命令される筋合はりありません。礼儀を守つてください」「そうだな、礼儀を守るだけのことをしてくれればな」いきなり後ろの野郎連中から拍手が沸いた。

「よく言った!」

健吾が振り返ると、普段は何も口にしないおとなしい野郎たちがぱやぱやと拍手を送っていた。

目が合い頷かれた。健吾は無視することにした。

本当は、じつやつてあの女を馬鹿にできれば楽なんだがな。そうだよな、あの女と同類のことができればな。

杉本梨南は真つ正面を見据えたまま席についた。周りの女子たちがひそひそと悪口らしきものをつぶやいているのを無視していた。もしくは気付かないのだろう。哀れな女だ。

あの女と同じことを、するもんか。

心に誓つたことだつた。

放課後、健吾がバスケ部の練習に向かおうと、バスケシューズを背負い体育館に足を向けた時。

「よお、新井林、先日はすこかつたらしいなあ。ショートチャンスが鬼のようだつたつて聞いたぞ」

声をかけてくれたの本条里希評議委員長だった。

これでも一応は、一年B組の男子評議委員なのだ。自分でも評議委員会というのを一次的役割だと考えていたが、でも本条先輩の前ではきちんと答えるたい気持ちもある。

「けど一本しか決まらなかつたんで」

「すげえじゃねえかよ。やつぱり新井林、お前は男だな」

たぶんこれから評議委員会だし、一応は出るようと言われるだろう。部活の練習が最優先だ。学校祭も終わつたし、しばらくは無理に参加しなくてもよさそうだ。

本条委員長は田鼻くつきりした顔立ちを、気持ちよく笑顔に代えて答えた。

「まあな、しうがないな。部活をいいかげん復活させりつてのが教師連中のお言葉だもんな」

「青大附中の体育部が弱すぎるつてことつすよ。だから俺たち一年が」

「まあまあ、原因は委員会連中にあるとも嫌味言われるもんなあ「本条先輩だつてこんな委員会に入つてなかつたら、運動部の大スターだつたでしょうなあ」

多少おふざけを混ぜても、本条先輩には何も文句を言われない。そういう人だつた。かなりわがままを言つたところで許してもらえる。現在一年B組の評議委員同士が反目していることも、委員会活動は杉本に、クラス活動は健吾に一分割されていいるのもすでにOKが出てている。

本条先輩は单なる「大好きな先輩」であり、委員長ではない。

「じゃあ今日は、杉本に委員会任すつて形になるがいいのか?」「

「あの女に委員会はやるつて約束、一学期にしたからしかたない」

「まだ考え方あるからな、忘れるなよ」

頭を軽く叩かれた。本条先輩は楽しそうに鼻歌を歌いながら三階に向かう階段を上がつていつた。たぶん三年A組で行われるのだろう。

う。

一年の一学期。杉本梨南と激しく争い罵りあい一時的に敗北した。全校集会というイベントにおいて、健吾はてつきり二年生女子たちが企画したものだと思い込み、脳天気に参加してしまつた。ファンションショーミたいなクイズ大会だった。すっかり舞い上がつて

しまつた自分がなされなかつた。なにせはるみを相手に、手のひらへキスまでしてしまつたくらいだ。

しかしあの企画そのものが、天敵・杉本梨南の手によって仕切られたことを知り、健吾は理性がぶつとんだ。許せるだろうか。憎たらしい相手の手のひらで踊られたことを許せるだろうか。しかも後ろ盾には一年女子だけではなく、軽蔑すべき先輩らしき奴の影までちらついていた。

あの男だけはゆるさねえ。

もし、あれが本条先輩だつたらしかたないだろうと思える。あのには叶わない。成績が学年トップであること、評議委員会を始め他の委員会、クラスをすべて統治しているのだから。さらに彼女を二人持つていて、その手の経験も豊富。男としてもつらやましい。けど、あいつなんかに。

本条先輩が全身全靈で可愛がつてている一年の後輩がいる。次期評議委員長を指名されたあいつだ。

ろくに九九も言えず、女みたいな顔をしてなよついていて、やたら人の顔色ばかりうかがつて、裏で汚い手を使ってのし上がり、女をしつこく追いかけづけクラスの人気者たちとわざと付き合いをして自分の保身にきゅうきゅうとしている奴。

決して俺はあいつが泣き虫だつたとか、頭が悪いとか、いじめられて当然の奴だつたとか言つ氣はしねえよ。けどな、あいつが何をしてきたか聞いてれば、当然じゃねえか。尊敬なんてしねえよ。健吾は真上を見上げつばをかけてやりたかった。二階は二年の教室が並んでいる。天に向かつてつばを吐きかけても顔に当たるだけ。むなしいのでやめた。

しょせん、最低女は最低野郎にしか認められねえもん。俺はあんな人間と同類になんてなるもんか。

とつぐの昔にネクタイなんて外している。規律委員の連中も文句を言わない。先生たちも最近は健吾に対して鷹揚だ。一学期に起こ

した評議委員会関係の「ごたごた」で顔も名前も覚えられ、本来だつたら健吾の方が叩かれてしかるべきだったのにだ。運が良かつたとは思わない。その百倍、吊るし上げられて当然の女がいたからだろう。封建的といわれるかもしれないが青大附属の教師たちは男性が圧倒的に多い。かなりいい方向に働いたのだ。

「健吾、悪いがちょっと来てくれないか」

真面目そうな顔をした奴らからたまに呼び出しがかかる。目立つ一派とはすでに一学期の段階で話がついているが、問題は優等生面した中途半端な連中だ。今日もその類だ。

健吾は体育館前の通路で立ち止まつた。

「なんだ、これから練習なんだ」

「一言一言で終わる。悪い」

何度も、「悪い」を繰り返すのは、A組の奴だつた。

顔見知りで何度も話をしたことがあるのだが、それほど仲がいいわけではない。優等生面をしてるので健吾とは繋がりをもてそうにないタイプだつた。ネクタイを緩めている所見ると、崩したい気分なのだろう。

「B組のあの女についてなんだが、お前どうして締めないんだ？」

单刀直入に話をするのが優等生連中の単純なところだ。健吾はあきれつとも鼻をつんと上にあげた。少しつんつんにした前髪をかきあげた。スポーツ刈りだが前髪に主張を残している。

「あの女、か。人間と思ってねえからな。人間にだつたら腹も立つけどな、虫けらなんかに腹立てたつて時間の無駄だ」

「よくそこまでおまえ、割り切れるなあ。健吾、お前あの女をつぶそうという意見を切つて捨てていいつて話聞いたけど、いったいなんだだ？」

何度もぶつけられた質問だつた。一学期、杉本梨南との対決で一応の負けを認めて以来、健吾は一切の手出しを禁じた。いや、もつと早い段階でだつたろうか。自分なりの意志で、一年B組の奴らに命令した。

「杉本梨南に手出しを一切してはならない。紳士としての義務として」と。

他の一年連中にとっては理解しがたいことだつたらしい。実際何度もか

「お前が立場上手出しできないのだつたら、俺たちがつるそつか」とこゝう申し出を少なくとも十人以上の連中から受けているが、あえて健吾は理由を丁寧につけてやめさせている。

「けどなあ、健吾。この前もうちのクラスの連中に向かつて、『自分の価値を判断できない馬鹿な人間は、頭のいい人たちに迷惑をかけないとこりでやつてください』とかなんとか言い放たれてさ。クラスの野郎どもは爆発寸前。幸いっていうかなんというか、あとで桧山先生が教室に来て、『君たちは本当に紳士だな』とか言つてくれたからさあ。おさまつたけどな。でも、これはいいかげん何かせねばつてこ組、D組でも意見がまとまつてるらしいんだ」

「ああ、俺のところにも大量にオファーが来るぜ」

健吾がOKを出せば、あの女はもう一度と学校に来れないだろう。裏でいろいろ手を回すことも可能だ。自分の手を汚さないように杉本を吊るし上げるなんてお茶の子歳々だ。青大附属以外での女を嫌悪している集団を健吾は知っている。公立の連中を使えば足もつかない。

しない理由を健吾は何度も繰り返す。

「あんな、俺がなんあの女を汚い手でつぶさないかといつとだ

「佐賀のことが好きだからか」

「もう一度言つたら殺すからな」

ひとつめの理由は向こうが言つてくれたからはしょれる。健吾はポケットの手をつつこんだまま、壁にもたれた。目の前の壁に大きな影が映つた。

「あの女を仮に、つるすなりますみられねえ顔にしたとする。となるとまず、疑われるのは敵方である俺たちだよな。俺たちが呼び出

しきらつてそれなりの説教を食らう。どんなに俺たちの側に、あの女をぶつぶすだけの理由があつたとしてもだ。暴力をふるつた人間が悪いというのが、おきてになつちまつている。残念ながら俺もそれには逆らえない

「ひ弱な奴だぜ。健吾、お前そんな」

「ちょっと待つた。話の続きを聞け」

健吾は落ち着いて一呼吸置いた。みな、説明するといつこいつ反応を示すのだ。タコの吸盤みたいな口をしている。キスしたいんだろう。変な奴。

「悪いが俺としては、あの女のために説教とか停学とか食らうようなことをしたくねえよ。自分が汚れるぜ」

「けどさ、あの女がしていることはなんだ？ 俺たちをさんざん馬鹿にするわ、汚い手を使って大人連中を動かしたりしているんだぜ。この前も聞いたぞ、死んだ猫を家に投げ込まれたくらいで、やつた奴の親の仕事を取り上げて町から追い出したとかなんとかって」

「だったらこちらが正々堂々とした態度で、どこも文句のつけようのないやり方でつぶしてやればいいことじゅねえか。俺はあの女とおんなじことをしたくないってわけだ。俺はきれいなやり方でもつて、あの女関係を制裁してやりたいんだ。そのために」

「はあ？」

全く理解できぬいらしい。しようがない。みなそうなのだ。

「一年野郎連中に俺が命令したのはそういうことだ。あの女につっこまれないよう、俺たちは大人連中に文句のつけられない態度を取つづけてやるんだ。徹底してな。あの女のやり方がいかに汚いかは、最近桧山先生の様子を見ても分かるが、大人も分かっているらしい

「ははあ、そうだな。桧山先生あの女を嫌つてるもんな」

「嫌つてるなんてもんじゅねえよ！ やつぱり分かる奴にはわかるんだ。男だつたら誰でもな」

最後の一言には別の意味がこもつてゐるが、目の前の奴にはわかる

らなかつただれり。健吾はあきらめの舌打ちをして続けた。

「一学期で俺もつづくと思つたんだ。異常な奴に会わせて自分らが異常になるんでなくて、徹底して常識を突きつけてやれば、周りがつて変わつてことだ。俺だつて弱い奴をいじめるとか、蹴りを入れるとか、そんなことはしたくねえよ。俺のモットーは『正義の味方』だ。あの女のしていることが許せねえから六年間、正義を貫いてきたつてわけだ。ただやり方がガキだつたから、つっこまれて俺が悪いことになつていただけだ。けどな、今は立場が違う。あの女は教師連中にもわかるくらい堂々といじめをやらかしてゐるんだぜ。うちのクラスでな。どっちが悪いかよくわかるよな」

「しんどそうだぜ、健吾の言つことわかるようでわからねえよ」

「かか。健吾はあきらめた。要するにすることだけを教えればいいのだと割り切つた。

「A組の野郎どもは紳士だと桧山先生も言つてたんだる。だつたら徹底して紳士になつちまえ。そうすればあの女がいかに狂つているかがよおくわかるつて奴だ。手も出さない、何もしない。ただ無視すること。そうすりやああの女のしていることは浮き上がる。まあ安心しる。俺も今、別の方法を考えているといつだ、このままあの女をのさばらせておくつもりはない」

田の前にいるA組野郎は、納得した顔で頷いた。そしてつぶやいた。

「紳士、かあ。健吾の言つことだから信じるけどなあ。本当に別の方法考へていてるつて信じるぞ」

奴が去り、自分の影だけが壁に映つていた。「リラめいていた。バスケシューズをぐるんと、紐のついたまま回してみた。なあんだ。結局はこれだけ言えばよかつたのかよ。

健吾が部活で遅くなる日は、ひとりではゐみは家に帰る。
たぶん杉本梨南はあの軟弱次期評議委員長のところに出かけてい

るのだから、手出しされる心配はない。一時期は部活を休んでまでついていったが、最近ははるみにたしなめられて部活最優先主義に戻っている。尻に敷かれているとも言われる。青大附属の女狂いともささやかれる。学校行事中に手の甲へキスした度胸のある奴とも。

両親にも

「まさかあの健吾が十三にして女の子に狂うなんて。はるみちゃんでよかつたけど」

とため息をつかれている。していることを見られれば何も言い返せない。言い返す気もない。

あいつ、大丈夫かな。ちゃんと家に帰ったかな。

先輩も教師もあてになんてしていない。六年間、はるみが杉本にさんざんなぶられていたのを、誰も助けようとはしなかった。かつて健吾もそのひとりだった。杉本とのいがみ合いを続けていたもののはるみのことをかばうことことができなかつたのだから。同罪だ。

健吾、健吾、一緒に遊ぼうよ。一緒にヒーローハーフヒーロー。
よ。私がお姫様ね。

自信もって笑顔で振舞つはるみを取り戻したかつただけだ。

あんたなに恥知らずなことしているの。男は馬鹿ばかりなのはいいかげんはるみも恥を知りなさい。私の言うことを聞きなさい。

ふたりで話をしている時に、田の前で罵つてはるみを連れ去つたあの女の前。はるみはおびえて頷くだけだった。杉本梨南の隣りにいたはるみはいつも、泣きそうな顔をしていた。健吾を見つめて震えていた。

俺の知つてゐる佐賀はあんな顔をする奴じやなかつた。だからだ。

小学校卒業式前、健吾が初めて杉本を突き飛ばし、蛆虫を振りか

けた時に誓つたことはひとつだった。

俺は、佐賀を守る。六年間たかっていいた蛆虫から、あいつを守る。

佐賀はるみに杉本梨南がしたことを思い起こせば、何百回刺しても悔いはない。

その2 軽蔑する理由

評議委員会には出ないが、本条委員長仕切るじきじきの集まりには参加することもある。部活の練習が休みの日など健吾はだるい気分で三年A組の教室へ向かった。大抵男子評議委員のみの集まりである。一年男女評議の仲の悪さに手を焼いた本条委員長が、独断で決めたことらしい。一部の女子たちは「男女差別よ」と問題視されたらしいが、その辺はお上手な本条委員長。夏休みの段階で氷解させたとか。

「ということでひさびさに野郎会が開けるってわけだ。やつぱりなあ、新井林、お前がいないと締まらんぜ」

嬉しいこと言つてくれるじゃないか。やつぱり本条委員長に男子連中がほれ込むのはわからなくもない。健吾は無表情ながらも黙つてノートを広げた。別にメモするつもりもない。ただ、他の先生たちが通り過ぎた時に「一応、評議委員会の延長」という顔ができるよう、カモフラージュするためだ。

「といつても、大きい行事は一通りすんだと。学校祭も合唱コンクールもなんだかんだ言つて無事終わつたしな。立村、お前もよくやつた」

「ありがとうございます」

二年D組の評議委員、かつ次期評議委員長を任命されている立村上総が頭を下げていた。みな当然のように頷いているのが解せない。いつたいこの男のどこが怖くて、周りを黙らせているのだろうか。健吾にとつて青大附属七不思議の一つである。

第一、こいつの本性および過去をみな、知つてやつてるのか？すべての元凶はこいつだつてこと、気付けよお前ら。

健吾も本当だつたら、立村のやつてきた過去の悪行をさらけ出して窮地に追い詰めたいと思う。それだけのことを以前はされてきた自覚もあるし、何よりも第三者からの情報をたんまり仕入れている。

年上らしいが、たいしたことはない。立村を一度だつて先輩だと思ったことはない。

「ということで、十一月に入ると三年連中は最後の進学試験の時期になりほとんど使いものにならなくなると。俺もしばらくは受験生の顔をせねばならない。ただそれでも一年たちは忙しくて、冬休みに向けてのビデオ演劇創作をやらねばならないと。裏での仕事はたんまりあるわけだな。一年もまあいろいろ部活とかなんとかで忙しいと思うが、少しずつでも手伝つてもらえないかな。な、新井林」

「すいません。十一月はまだ試合があるんで」

「本當だ。一、三年が使い物にならない現在のバスケ部、健吾がエース状態なのだ。小学校時代はそれなりにいいポジションを取つていたけれども、青大附属ではよきによきと力の差を見せ付けられるようになつてきた。たつぱもあるし、シューートの確率も高いとあつて、顧問の先生からは、

「青大附中のバスケ部を復権させる切り札だな、お前は」とまで言われている。ありがたい。

「そうか、新井林はなあ、バスケ部のエースだもんなあ

「一年が本當は主力のはずなんんですけど」

嫌味を言つが氣付かないらしい。それもよし。他の先生たちから聞くことによると、運動系で力のある連中がみな、委員会活動を優先させてしまい、運動部ではほとんど幽霊状態だという。本条委員長も、本来ならば陸上・バスケ・男子バレーなどなど大抵の体育部での活躍が予想できたのに、あつさりと評議委員会に没頭されてしまつたという。何度か運動部に入るよつ説得されたらしいが、あつさり断つてしまつたとか。

さらに信じがたいことなのだが、かの立村ですらも卓球センスにおいては非凡なるものを持つていると聞く。悔しいが健吾も生で見た。一学期に行われた球技大会で、健吾すらす「こい」と思った一年卓球決勝の試合。あの馬鹿づらでも、卓球のラケットを握つている時

だけは真剣な顔でもつて球を跳ね返していた。結局審判の誤審で負けたものの、健吾の視点から見ても立村の方が有利だったと判断する。対戦相手は一年卓球部のエースだ。当然、立村にもそれなりの話があつて当然だつ。

運動部がこんなになつちまつたのは、みな委員会のせいだつての。

ひとり、バスケ部を背負つて立つ健吾としては、頭にくることこの上なし。

顧問の愚痴を聞かされるのもうんざりだ。

「とにかくだ、お前ら。しばらくは一年を中心とした活動に切り替わると思うんで、みな仲良くやれよ。それとだもうひとつ」

本条委員長は横目で扉の方を観た。ほんのわずか、開いている。立村が気付いたらしく、すぐにぴたりと閉めに立ち上がつた。田と目で語り合つのが一人は得意だ。噂に聞く「本条・立村ホモ説」が本当ではないかと思うのはこのあたりだ。

「すでにみんなの衆ご存知かと思うんだが、青大附属では今年に入つてから、委員会活動に対する風当たりが非常に厳しくなつているんだ。一年の連中は知らないだらうけどな。部活に入ることを最優先にして、委員会活動を後回しにしろといつご沙汰が出ているようなんだ。まあ、一年あたりまではそんなことなくてな、委員を決めたあとで初めて部活を選ぶ形式だつたんだが。そうだろ、立村」

にやにやしながら本条委員長は指を軽く突きつけた。立村もこめかみをつつくようなしぐさをしながら頷いていた。

「そうですね、僕たちの頃は、一年の宿泊研修が終わつてからまず委員会を決めて、それからでしたから。ただ、D組の担任は部活に力を入れろとうるさかつたですが」

「菱本さんじやあなあ、そうだわな。ま、お前のクラスには次期規律委員長もいることだし、特に問題はないと思えるが」

「一年に関してはまず問題ないと思われます。ただ」

「ただ、なんだ？」

「一年以降の問題です。現在僕の知る限り、まずは部活を活性化させてそのあとで、委員会を行おうという指導が行われているようです。僕もよくその辺はわかりませんが」

なに口走ってるんだ。こいつ。つまらん委員会やつてるよりも、身体動かして勝負かける時の方が燃えるに決まってるだろつが。

落ち着いた口調で、一言一言きちんと並べていく立村。髪型は襟足まできちんと整えている。いかにもいとこのお坊ちゃんだ。前髪もさらさらした感じだが少しだけふくらませているのが笑える。顔立ちがどことなく男か女かわからないところとか、異様なくらい肌が白い。病人じゃねえかと最初見た時ぞつとした。「こいつ女じやねえか」と一時期真剣に疑つた。

「青大附属の部活動が低迷していることは認めます。運動部を始め文化部の人たちがかなり厳しい立場だとも聞いてます。ただ、それと委員会活動の上下を決めるのはおかしいと僕は思つてます。現実問題、委員会活動があつたからこそ、これまでの学校行事が盛り上がりってきたこともありますし、体制をこしらえた結城先輩の力でもあると思います」

「そうだな、結城さんは自分が遊びたいというただそれだけの理由で、部活動よりも委員会活動を守り立てるべく評議委員会最優先主義を唱えちまつたもんなあ」

この辺は噂でしか聞いていないので聞き流した。部活に入ることを家で禁じられた結城さんという先輩がいて、抜け穴のひとつとして「委員会活動を部活化」という案をこしらえたのだそうだ。それが続いて現在にいたるというわけだ。まあ、部活は練習時間も取られるし、親たちが嫌がるのもわからなくもない。その時間があれば勉強しろ、と言いたかったのだろう。結城先輩にとつてはそれでベストだったのだろうが、四年前と今とでは事情も違う。健吾は教室でうだうだ下らんこと討論している時よりも、体育館でめいっぱいドリブルしてボールを奪いシューートする方に情熱を感じる。

「別に、委員会よりも部活動を優先とするのならばそれはそれでかまいません。ただ、委員会を大切にしている人たちの邪魔をするのだけはやめていただきたいし、その反対もしかるべきではないでしょうか。僕は、委員会側の人間としてそう思います」

拍手。一年の男子評議たちは妙に団結力がある。どうしてかわからん。共通しているのは、みな文化系の顔をしていることくらいだろ？。少なくともこいつらが球技大会で活躍しているところを健吾は一度も見たことがない。

「よくわかった。立村、そうだな。ただ現実問題として、評議委員会が存亡の危機に瀕することもわかつてゐるよな」「冬になつたらひとつ考えていることがあります」

「なんだよそれは」

「教えられません。今は」

ささやかに笑みを浮かべながら立村が答えた。このしぐさといい、表情といい、どうみても女である。健吾は決して女子を軽蔑してはいない。女はむしろ好きな方だ。はるみ以上の女はないと思つてゐるだけのことだ。ただ、中途半端なおとこおんなというのには虫唾が走る。堂々と男は男、女は女、ついてるもののがついてるのか、さわるとこりがあるのかないのか、見せ付けてくれるならば落ち着くのだが、どうも立村にはそれがない。一言でいうと、軟弱だ。

やだやだ、この言い方が女々しいつていうかなあ。

もうつつかからないことに決めているのも、こぢらにとばっちりがくるのがいやなのと、これから計画することを邪魔されるのがいやだから。

「まあいいか。わかつた。その代わりあとでこつそり、教えるよ」

さすが「ホモ説」のお相手といわれる本条先輩。そこらへんの抑えも完璧だ。

やつぱし本条先輩はかつこいいよなあ。

「とにかく、今の状況は部活最優先主義にどんどん傾いてくるつてことで、委員会一筋で生きてきた俺としては非常に淋しいもんが

ある。ま、新井林、お前をバスケ部のホープとして大切にしたい気持ちもわかるんだ。わかるんだがなあ」

「俺は大丈夫ですよ。ひとつのことしか出来ねえ程ばかじやねえから

「ら

あえて、もうひとりの一年に聞こえるように健吾は返事をしてやつた。

「俺は一足のわらじがはけねえほど軟弱でもばかでないですから。成績もなんとかなると思いますが、それを認めない奴だつて世の中いるわけで、それはしかたないです」

「さあどうした立村、お前すっかり元気ないなあ

からかう本条委員長の声。一年側の席を横目でうががうと、立村の表情が少々こわばつていよいよ見受けられた。次期評議委員長に指名されているとはい、一足のわらじがはけそうにない代表格だと見て取つたのかもしれない。やっぱり切れる奴は切れる奴の気持ちがわかる。そして切れない奴の精神状態も手に取つたように分かる。

だから、なんで本条先輩は、俺を次期評議委員長に指名しねかつたんだよ。あれだけ切れる人がなあ。俺だつていくらでも一足のわらじはいてやつたんだぞ。あの馬鹿女をつぶすことだってできるし、何よりもあの非常識な一年の馬鹿男を。

臨時評議委員会は終わった。相変わらず本条委員長は立村を呼び寄せて、ひそひそ話をしている。こうじう集まりが終わった後には必ず、一人仲良く教室を出るのが常だつた。「本条・立村ホモ説」健在と言われるはこういう時だ。一年の他先輩たちもその辺はいつものことと思つてゐるらしい。一年と一年は、一学期に杉本を通じて起きた事件をきっかけに、犬猿の仲になつてゐるが、健吾以外の連中をすでに立村が懐柔してゐるとも聞いた。健吾にとつては信じがたい事実だが。実質的に、「新井林健吾vs一年男子評議」の図式が出来上がつてゐる。しかも裏で仲良くさせようと手を回して

いるのが立村ときたら、そりゃあむかつかないわけがない。本當なら健吾も一年の野郎連中に

「なんで立村なんかに頭を下げるのかよ、お前らこそ軟弱者…」と問い詰めたい。問い合わせたいのだが、それをしてしまつと「正々堂々」としたやり方ではなくなつてしまつ。夏休み悩みに悩んでだした結論が、

「評議関係の連中は当てにするな」

だつた。奴らが立村に頭を下げる理由のひとつに、「英語の勉強を教えてくれる」

とか

「他の困つたことに手を差し伸べてくれる」

とか、健吾にも話せないいろいろな事情があると聞いた。実際立村は他のネットワークを利用して、かなり面倒を見てやつているらしい。恋愛関係とか教師とのトラブルとか、想像つかないネタをかなり解決しているらしい。いつたいどこでそういうことができるもんなのか。健吾は聞くのもむかつくので仔細を聞いていないのだが。とにかくあの軟弱野郎とは、いつか勝負をつけておかねえとな。

健吾は本条委員長のみに頭を下げ教室を出た。視線がかち合つた分、立村にも頭を下げたことになるのが不本意だつた。無表情で、猫のようなまなざしで射られた。

今日は練習がないのでまっすぐ、職員室に向かつた。

まだ四時半だ。もしかしたら桧山先生がいるかもしけない。一度、空いている時間に来てほしいといわれていた。たぶん話の内容はクラスの男女の仲悪いといつ問題だらう。いくらでも話してやる。

「どうした、新井林」

三年の女子が質問に来ていたらしく、明るい声が飛び交つていた。桧山先生の専門は英語だつた。なんでも子どもの頃から教師になることが夢だつたそつだ。なんで自分は小学校の頃から年代的に若い

先生に当たることが多いんだろうと、最近になつて健吾は思つ。六年の時の担任も新任だつた。健吾との相性はなぜか合つたが、杉本とはみな嫌悪しあうところが共通していた。

「この前暇だつたら来いつて言われたから

「ああそうだな。今暇だぞ。ゆつくり話すか」

「個人面談でもいいですよ」

思惑ありげに健吾がつぶやくと、にやつと笑つて桧山先生も頷いた。

「人に聞かれたらまずいか。やはり」

煉瓦色のジャケットに袖を通し、桧山先生はカーテンで仕切られた椅子とテーブルを眺めた。

「あそこに行くか」

手には何ももたなかつた。健吾を先に入れると、カーテンをぴしやりとしめた。立つたままでいる健吾を頭のてっぺんから足下まで眺め、

「本当にお前、典型的なバスケ部だよなあ」とため息をついた。

「先生、中学の時にか部活入つてたのかよ」

「剣道やつてたんだが、ものにはならなかつたなあ」

照れくさそうに笑つた。言われてみれば背が高くてがつちりした体格は剣道向きと言えなくもない。

「ま、座れ。僕も新井林にはいろいろと聞いておきたいと思つていたんだ。一学期のこととか、それとか」

「あの、女のこととかだろ」

さつそく健吾は突つ込んでみた。

「女という言い方はやめる。杉本のことだな。いろいろ、お前も大変だつたらしいなあ」

「無視してればいいけど、佐賀のことが問題だと俺は思う」

「そうか、佐賀か。なんだ、お前赤くなつてるぞ」

図星だ。どうしてもこついう時、健吾は自分が恥を捨てていると

感じる。見え見えの態度である。

桧山先生はにやっと笑うと、口元をほじほじさせてカーテンをむりいちぢびっちりと閉めた。

「溝口先生からも聞いていたんだが、確かにあ。そうひとつなんだな。今の一Bは。新井林、前から杉本はああいう風に佐賀をなぶつていたのか？」

やっぱり桧山先生にもそう見えているのだ。嬉しい。健吾だけの思い込みではないと分かったのが嬉しい。両腕をかわるがわるさすりながら健吾は短く答えた。

「小学校一年の時からずっとああだつた」

「一年、つて」

「あの女と佐賀と、俺とは六年間おんなじクラスだつたんで、ずっと見えたし」

「六年間。じゃあ何か。ずっと新井林は佐賀を守つてきたのか？」
守つてきた？ 言葉にぞくつと寒気が走つた。素直に「そうだよ」と答えたかったのに、できなかつた。

「どうした、お前、あれだけ佐賀を」

「出来なかつた、かもしけない」

唇をかみ締めてしまう。健吾の六年間は攻撃を仕掛けてくる杉本と、その周辺の女子たちを追い払い痛めつけることに費やされていたけれど、その間はるみを引き離したことは一度もなかつた。本当だつたらすぐにでもはるみを杉本から引き離して縁を切らせてやればよかつたのに。そこまで頭が働かなかつた。

「今はその分を」

「これだけつぶやき、こめかみが熱くなるのをじらえた。

「そうか。でもなあ、なんで佐賀を杉本があれだけいじめるんだろうなあ。女子たちもあれがおかしいと誰も思わないのかな。溝口先生が最後まで心配していたのは、クラスの女子たちがみな杉本の言い分を飲み込んでいて、自分たちのしていることに気付いていない

つて事実なんだ。みな、杉本の言い方を受け入れていいのは、いじめに加担してると一緒に。新井林、男子がわから見てどう思う」「このクラスの女子、頭が狂ってるからどうしようもねえ」

吐き捨てるようにつぶやいた。本当だつたらクラスの女子連中にみな蛆虫を振りかけてやりたかった。はるみと一緒に「ぶりっこ女」だとか「男にくつついている女」だとか「杉本さんに悪口言つている女」だとか言つている姿を見るとなおさらだつた。でも最近になり、女子たちの様子も変わつてきている印象がなきにしもあらずだつた。少なくとも健吾の経験だと。

「新井林、狂つていいという言い方はやめた方がいい。狂つているということは免罪符を『え』ているようなものだからな。みなまともなま、こういうことをしているのが問題なんだ。要は、杉本がクラスの女子たちをまとめて、佐賀いじめをさせていると、そういうわけだな」

「俺はそう思つ。けど、人によつてはそうでないみたいだ」「人によつて?」

「だからうちのクラスの女子ども。あの女がいい奴だとみな思い込んでる。佐賀が苦しい思いしても全然平気つて顔してやがるから」「長いものには巻かれる、か」

言い当てた言葉だ。健吾は頷いた。

「でもな、新井林。たぶん女子たちは、杉本に同じことをされたくないからああしているんじゃないのか? いつ自分がいじめの犠牲者になるとも限らないんだからなあ。正しいことを正しい、間違つていることを間違つてていると言えるクラスでないと、佐賀も、いや杉本も救われないだろ?」「あんな女を救つていいと思つてるとかよ、先生」

「そうにらむな、新井林。つまりだなあ」

膝を広げ、桧山先生は声を潜めた。顔と顔を突き合わせた。たばこくさい。

「世の中には、自分がいじめをしているとか、悪いことをしている

とか、自覚できないかわいそうな奴がたくさんいるんだ。新井林ならわかるだろ。佐賀が苦しんでいるから、守つてやろうって思うだろ。佐賀が毎日どんな思いで学校に通っているか、想像つくからだろ。そういう想像力を持つているんだ」

「想像じゃねえよ。目の前でやつてるんだから誰だってわかる」意味がわからず健吾は言い返した。違うとばかりに軽くテーブルを叩く桧山先生。視線が物言いたげだった。

「ところが、同じことをしていても相手がどういう感じをもつか、想像つかない人もたくさんいる。相手のことを思いやれないで、みな同じことを考えていると決め付ける、かわいそうな人がな。そういう人たちには、どうすればいいと思う、新井林」

「俺は何度もあの女に、教え込もうとしたぜ、けどできなかつたんだ」

「小学校の時か？」

「ずっとだぜ。あの女が佐賀にああしろいひじろと命令している時、何度もやめさせようとしたさ。けど、あの女全然気付かないでやんの。佐賀が嫌がっているのを全然、無視してやるの。頭来るだろ、それに下手なやり方しようもんならあの女、親に告げ口するんだぜ。あのうちの親、裏で手を回してさ、相手の親にひでえことするんだ。仕事首にして青潟から追い出したりさ。だからあの女のうち、近所ではきらわれもんなんだぜ。青大附屬くらいだ。あの女を普通に扱つてるのは。あんなやり方する奴を、いいかげんのさばらしておきたくねえから俺は何度も」

急に胸が熱く、むかむかしてきた。驚いた顔をしているのは桧山先生。どうした、と覗き込む。

「なんでもねえよ。ただ、俺、もういやなんだ。友だちがあの女のせいでの青潟を追い出されたりしたことがあるから、なおさらなんだ。もう、佐賀まで取られるのはたくさんなんだ。あのままだつたら佐賀が青大附属をやめると言い出すんでないかって、まさか、と思うけどさ、けど」

なんたる醜態か。健吾は自分の涙腺がめちゃくちゃぬくなっているのが情けなかった。いつもそうだった。杉本の告げ口により親の仕事を奪われ町を出て行つた友達ふたりのことを思い出すたび、一晩中泣きつづけた自分が戻つてしまつ。親にくつてかかった自分が、真剣に署名運動をしようとして親に止められ三田間ハンガーストライキをした自分が、思い出されてしまつ。

「そんなことがあつたのか」

テーブルに突つ伏した。ガラスのテーブルにはレースの敷物が乗つかつっていた。鼻水がじゅるじゅるいうのを押し付けて。

もう、佐賀までいなくなるのはいやだ。

「よくわかつた。新井林、よく話してくれたな。僕もこれから一年B組の問題が片付くようにしていくから、一緒に頑張ろうな」頭をぽんぽんと叩かれた。顔を上げると、桧山先生がにこやかな表情で見下ろしてくれていた。

「それに、お前は偉いよ。この前男子のひとりから聞いたよ。新井林、杉本に非合法な手を使うのではなく、正々堂々とした態度で対決しようと、クラス男子に命令してるそうだな」

「どこでもれたんだか。健吾も鼻をすすり上げながら頷いた。

「俺は、あの女と同じ汚い奴になんてなりたくない。ただそれだけだ」

その後は、過去の杉本梨南に関する悪行の数々を洗いざらい述べ立て、ところどころ佐賀はるみへの熱い思いについて語り、結局五時半まで残つてしまつた。どうして桧山先生はここまで話をすべて聞いてくれるのだろうか。やはり「男子」だからだろうか。杉本に手を焼いていた溝口先生ですらここまで杉本をあしがまにいうことはなかつた。杉本も悪いがいじめる男子たちも、と言つ態度を取つていた。

なのに、なぜ桧山先生は。

健吾は疑問を覚えつつもまずは満足することにした。今まではなかなか頼りになる大人がいなかつた。いつも自分が悪いと言われてつづけていた。でも、今日の会見で確かに桧山先生が味方であることを確認した。

まあいいさ。次だ次。クラスは桧山先生の連合軍で勝負するとして、次は。

正々堂々、正しいものが受け入れられる、「ごくごく普通のことを求めているだけなのに、なんでこんなに苦労しなくちゃいけないのだろう。

杉本のような弱いものいじめをしている女を追い出すのに健吾がこれだけ涙を流さねばならないのだろうか。納得いかなかつた。

不条理だ。けど、俺はやる。

その3 戦う理由

いつも思つたのだが、一年D組の羽飛貴史先輩はどうしてバスケット部に入らなかつたのだろう。顧問が何度も説得したとかしなかつたとか噂は聞いている。もし、羽飛先輩が入つていればもう少しバスケット部のレベルも上がつていたのではないかと健吾は常々思つている。

委員会にも入つてないのに。もつたいねえよなあ。

はるみを側において健吾は、自転車置き場の方でふたり語らつている羽飛先輩ともうひとりの女子を眺めていた。職員室前廊下の窓。まだ部活に出かけるまで十分くらい余裕がある。

「健吾、まだ行かなくていいの」

「お前が学校出るまではいる」

一言つづりやき健吾はさらりと観察を続けた。片手をはるみの指先に触れさせて。温もりを感じると自然に気持ちが落ち着くものだつた。他の連中からすると、「女を見ているとむらむらして押し倒したくなる」とか「夜眠れなくてどうのこうの」とか、いろいろあるらしきけれど、健吾に限つてそういうのはなかつた。

すべて、起きてる間に済ませてるので、
はるみとはだいぶ、進んだ。

一学期悪夢の全校集会クイズ大会もどきのファッショントリニティで、はじめてはるみの手の甲にくちづけした時からもう、半年近く経つのだから。夏休み前、冗談めかしてはるみが、

「健吾、何がしたいの？」

と尋ねた時、思わずふらふらつと、

「言葉なんかじゃねえよ」

と、胸に手を伸ばしてしまつたこともある。あれつて俗にいうBつて奴だろうか。でも意識はしなかつた。まだはるみに触れた時の柔らかさはそれほどでもなかつた。はるみも黙つて健吾のしたいままにさせてくれた。抱きしめる時にはもつとやわらかくしなくては

ならないんだ、やう思つたのもあの時だつたろ。

さつき梨南ちゃんが、私たちのこと、見てた。

思つ存分触らせてもらつた後、はるみがはにかみつづぶやいたのを聞いた。あの女のことだ、告げ口するんではないかと焦つたけれども、

「ひやましそうな顔してたわ。きっと一年の先輩のところに行つたのよ。

もし告げ口されではるみと引き離されるようなことがあれば、健吾は切り札を使おうと決めた。健吾がなぜはるみとくつついているのかその理由と、あの女がしてきた悪行の数々をすべて。

そのためには、隠しておきたい気持ちをさらけ出すしかない。ずっと秘めておきたかった想いを。

「健吾、何を見ているの」

「羽飛先輩が帰るとこ」

気のないふりして健吾は答えた。指ははるみの手から離さず。

やがてひとり、やたらと分厚いコートを羽織つた男が現われた。顔をじつくり見なくとも分かつてゐる。シャーロック・ホームズがきているようなコート。青大附属で着てゐる奴は健吾の知る限りひとつしかいない。

目障りな奴だぜ。

羽飛先輩の側にいる女子と話をした後、自分の自転車らしきもの側にしゃがみこみ鍵を外してゐる。かばんを後ろにくぐりつけ、羽飛先輩と顎きあつて自転車を引き出し、校門の方へ向かつていつた。

あんな奴がなんで。しかも羽飛先輩とだ。何か裏があるに違いねえよな。

「見たくもないものつて誰」

「あの、軟弱野郎に決まつてるだろ」

吐き捨てるよう健吾はつぶやいた。はるみも覗き込み、自転車

の姿を見送った後、

「梨南ちゃんが片想いしてふられた人なのね」

「ういう話をしている時、はるみの表情は崩れない。軽蔑するでなく、物笑いにするでもない。ただたんたんと、つぶやくのみだ。幼稚園の頃「お姫様役」をあてがわれ健吾の側で甘えていた頃と同じ顔をしていた。

この顔を取り戻すのに、六年もかかったんだ。
人通りが多いからこれ以上健吾も、恥ずかしいことをしないですんだ。

「じゃあ、玄関まで行くぞ。急いで帰れ。俺も家に帰つたら電話するからな」

「大丈夫。私、ひとりでも大丈夫」

健吾は聞いてない振りをしていつしょに玄関に向かった。二人隣り合えば、まだ指先が触れていても怪しまれないですんだ。

対抗試合の練習に向けて六時まで走りまわった後、健吾は大急ぎで着替えを済ませた。昨日手書きでしたためた手紙五通を配るため、まずは男子更衣室に向かった。上級生にばれないように、一年の運動部在籍者に。

六通で間に合つてことが根本的な間違いだよな。

テニス部、卓球部、陸上部、剣道部、サッカー部、そしてバスケ部。いかに少ないか。情けなさ。健吾はそれぞの部室の様子をうかがいつつ、顔見知りの一年男子を見つけてはひっぱりだした。

「なんだよ、健吾」

「これをとりあえず読んでくれ。それから話だ」

それぞれの部室で同じ言葉を五回繰り返し、最後にバスケ部の連中7人を呼び出した。ちょうど着替えがすんで帰るところだった。まだいるがほとんど幽霊化しているのも否めない。委員会のせいだ。「俺の書いたもんをみんな、回し読みしてくれ。これから三十分後にグラウンドに集合だ」

「ひええ、これからかよ。腹減つたつてのに」「
「ばかやうう。部活なくなるかもしけねつて時によく言えるよな」
一喝し、健吾は集合場所のグラウンド奥を指示した。

文面は以下の通りである。

青大附属中学運動部所属の一年男子へ

これから青大附属中学の運動部（バスケ部・テニス部・陸上部・サッカー部・卓球部・剣道部）の価値を高めていきたいと思う人は、ぜひ今日の夜六時、体育館裏のグラウンド裏にて集合してほしい。真剣にこれから青大附属運動部のことを考えたい。

青大附属の運動部は、現在どの部も一年の部員が少なく、存亡の危機に立たされていいるところが多いと聞いている。理由は委員会活動が最優先されているからだそうだ。そのため部活の練習がおなざりになりがちで、試合ではいつもぼろ負け。この繰り返しだ。

でも、それはまずいと僕、新井林健吾は考える。

これから青大附属運動部のレベルを上げ、今の委員会最優先主義を変えていきたいと思う人は、ぜひ集まつてほしい。

文責 新井林健吾（1-B）

どうせ俺は作文嫌いだつての。

自分でも下手な文章だということは自覚している。意味さえ通じればそれでよい。汗が冷えてきて風邪を引きそうだった。少し走つて体を温めたかった。グラウンドにはサッカー部の練習も終わつたようで人がいない。真つ暗い闇の中を健吾は一周、ウォーミングアップ気分で走つた。

健吾が前から温めてきた案をここで発表する時がきた。

夏休みから、この状況をどう変えていくか、評議委員会最優先主義から部活動最優先主義へどうシフトしていくべきか、健吾はまずと考え方づけてきた。

もちろんきっかけは、一学期六月の、評議委員会での「た」ただつた。

自分が器の小さい奴だと思い知らされた。

てっきり健吾は自分が次期評議委員長に指名されるもんだと信じ込んでいたのだが、ふたをあけてみれば本条委員長は次期委員長に立村を指名した。立ち直れないくらいの衝撃を受けた。

次期委員長が杉本でなかつただけまだい。あとで自分を慰めた

立村は最初から異様なほど杉本を可愛がっていた。ちゃんと彼女がいるというのに、ふたりつきりで喫茶店に連れて行くとかしたりしていた。かばいたてする行動は、健吾以外の連中からも、「立村先輩はきっと杉本さんのことが好きなんだ」という的を射た意見が出たりするくらいだった。

なんで、清坂先輩を選んだんだか。きっとあれだな。あいつは自分の身を守るため、人気のある清坂先輩にくつづいて周りを懐柔しようとたくらんだつてわけだ。はは、肝つ玉の小さい奴だぜ。まあな、あの女とくつついたら、俺たち一年男子連中からは総すかん食うと、あの軟弱野郎も想像ついていたんだろう。

現在立村の恋人とされる清坂美里先輩。あの人はもし同級生ではるみがいなかつたとしたら、健吾もふらつとしていたかもしれない「女子」のイメージそのものだ。杉本にひつづいているうざい連中とは違う、さわやかに気持ちよくしてくれる女子だ。ああいうのがなぜ、一年にはるみしかいないのか、健吾には謎過ぎるくらい謎だ。もちろん男子からも人気が高く、ショッちゅう他の男子たちからつきあいをかけられているという噂もある。

なのになぜだろう。

なんで清坂先輩がだ、あの男でがまんしてるかだ。

ちゃんと羽飛先輩がいるつてのにだ。

なにか、まずいことでもあったのかもしれねえな。

「一年の恋愛事情なんて知つたことじゃない。健吾が知りたいのは、なんで立村は自分の保身のために命を賭けるのか」

「一點にすぎない。

気に入っているなら堂々と杉本を彼女にするなりして、いつしょに嫌われる覚悟を決めればいいのだ。そうすれば、健吾も奴を見直すだろう。最初の印象を覆すだけのものをもつていれば素直に頭を下げる。自分を折つて反省するだけの度量を持ちたい。

しかし、立村の過去を聞くにどう考えても納得いかないところが多いすぎる。

まず、清坂先輩を口説く前にあの男、別の女子にしつこく言い寄つたらしいじゃねえか。この前先輩たちから聞いたぞ。確か杉浦さんだつたが、そういう女子に一回くらい告白かまして、振られたらしつこく追いかけていたらしこうてな。可愛い感じの子だつて聞いたけれども、あまりにもしつこすぎて相手の子がノイローゼになつて、結局先生たちに怒鳴られて一件落着だつたらしこうてな。別に好きなら好きでいいけど、振られたらふつう、きるだろ。しつこく追われたらいやだつてのが、想像つかねえのかよ。まるであの女と一緒にだな。

あの女。

一周し終わると息が黒い幕の中で白く浮かんでいた。急いでグラウンド奥の陰に向かうと、すでにいらいらしながらハ人ほどの連中がうごめいていた。ジャージ姿が三人、あとはブレザーにスタジヤンを着た連中だつた。汗くさい。

「健吾、わるいがなんか食うもんだけ買って来ていいか」

突然切り出されて健吾は顔を眺めた。サッカー部の男だ。

「どうせ長くなるだろ? つてことださ。コロッケ九つ、一個五十円。どうだ」

みんなやる気らしい。健吾はすぐにポケットから財布を出し、千

円札を取り出した。

「わかつた。今日は俺が呼び出したから俺のお「りだ。もうひりひつり銭、返せよ」

健吾が来る前に奴らも考えてくれたのかもしぬなかつた。あと三人が後で加わり、六時半開始予定の集まりは十分ほど早まつた。揚げたてのコロッケをみなでくわえながら地べたに座り込み、健吾はまず、大体の説明を行つた。

「俺が一応、B組の評議委員であることが今のところネックになつてゐつてわけだ。本当だつたら毎日俺もバスケ部の練習に打ち込みたいし、もつと他の学校の練習試合に出たいんだ。けどなあ、評議があるだろ。十月はほとんど使い物にならない状態だつたしな」

「ああ、健吾の立場は複雑だもんなあ」

みなが頷いた。

「けど、委員会活動しないと怒られるだろ。先輩たち」「元

「先輩にはな。けど先生にはなんも言わねえよ」

「はあ？」

意外だ。健吾はつつきりみな、青大附属の委員会活動優先主義がゆらいできていることに気付いていると思ったのだが。みな、あきらめの境地に達していたのかもしぬない。これはまずい。健吾は慌てて続けることにした。

「いいか、良く聞け。今日俺が集まりかけたのはな。今、学校側がだんだん代わつてきてるつてことを伝えたかったんだ。俺たちが入学した時、先に部活を決めて、それから委員会を決める、そういうやり方だつたら?」

みなが頷く。

「どうも今的一年は先に委員会を決めて、それから部活に入れるかどうかチェックしたつてやり方だつたらしいぜ。冗談じゃねえよ。まさか俺だつて、評議委員がこんな怪しいファッションショーやつたり演劇やらされたりするとは思わなかつたもんな。俺は絶対止め

てたぜ。わかつてればな」

みな同情めいた笑いを漏らす。みな知つてゐるのだ。六月の全校集会での、はるみへの手の甲キス事件を。恥ずかしいと思つのはもうあきらめた。

「だから今的一年たちは委員会ばかり最優先して、部活のことなんて全然考えようとしてないんだ。まあしゃあねえよ。忙しいことはしゃあねえよ。けどな、それで対抗試合が減つちまうとか、練習を休まれるとか、そういうことが続くと俺だつてたまつたもんじゃねえよ」

「じゃあどうしたい、健吾」

闇の中から声が聞こえる。たぶん剣道部の奴だ。

「一年に逆らおうってのか。それは悪いが御免こいつむりたいぜ」「ほほう、なんでだ」

反発。感じて健吾は尋ねた。

「剣道部の先輩たちはみんないい人ばかりだからなあ。俺はあまり波風立てたくねえ」

噂に聞くところによるとそういうらしい。剣道部もかなり先輩後輩の面倒見がよく、弱小ながらも頑張つてゐるらしい。

「どうか、他に先輩がたと喧嘩したくなえつて奴はいるか」

「俺も」

今度声があがつた。サッカー部だった。

他の部からも似たように手が上がつた。

「なんでだよ」

「なんかわからんけど、一年の先輩たちつてみな親切だと思つぜ。俺も公立に行つた奴の話聞くけどさ、先輩達つて結構怖いらしいだろ。やきいれたり、殴つたりするつて。俺のところもそうだけど大抵の部活、そういうのないらしいってな」

要は、一年に骨抜きにされてるんかよ。評議委員会と同じだ

ぜ。

健吾はため息を氣付かれないようになついた。

「よくわかった。けど俺は決して、一年に喧嘩を売りたいとかそう思ってるわけじゃねえ。今回あえて一年連中に集まつてもうつたのはだな」

脂臭い匂いが漂つた。みなコロッケを食つた後の口臭だ。

「俺たちにとつて運動部つてのがどれだけ大切なもののかを、他の連中に知つてもらう必要があるってことだ。委員会よりも運動部の練習を優先してどこが悪いって、俺は思う。もちろん学校祭とかそういう行事がある時は別だけど、それ以外のどうでもいい行事についてくつついていく必要があるのかどうかってことだ。どうせ弱小部、試合に出てもすぐにぼろ負け、もしくは「ホールド負け。情けねえ連中と思われるかもしねえ」

「だつて本当だもんなあ」

「脳天氣だというかこいつらは。健吾は一発ぶんなんぐりたいのをこらえてさらに話を続けた。

「だが、試合に出ている時の俺たちは、委員会で居眠りこいでいる時の自分とは違う。本気で戦つてる。それをまずは、大人である先生たちに見せ付けてやるつと俺は思つてるんだ」

「は、先生？」

まだわかつていない。意味が不明といわんばかりのざわめきが口ロツケ臭い息とともにもれる。

「お前ら知つてる奴も多いと思うけど、今の先生たちは、青大附属の委員会最優先主義をあまり良く思つてないらしい。もちろん勉強しろしろつてうるせえけど、それ以上に部活のレベルが下がつてることを嘆いてるみたいだ。だから、俺たちが結果を出せばそれなりに納得してくれると思う。そして、委員会に現抜かして遊び呆けている連中よりも、俺たち運動部の方を大切にしてくれるんじゃないかつて思うんだ」

「そつかあ、問題は結果が出ないと」

「気弱な奴らだ。だからこいつらはいつもなめられるのだ。健吾は

怒鳴りたいのをからうじてこらえた。

「先生たちが変われば、あとは影響されて他の生徒連中も変わる。俺もできる限りバスケ部と評議を両立させたいが、できれば比重を八対二の割合でやりたいんだ。そのためにはもつと、実力のある存在であることを見せたいんだ。わかるだろ？」

みな黙りこくつた。空気のコロッケが消えていく。寒さで指がかじかみ、なんとかさすつた。手の皮が少し破けていて、健吾は何度かそこをなめた。はるみが一人つきりの時に同じことをしてくれた。

「健吾、わかつた。要するに俺たちは何をすればいいんだ？」

「青大附属の運動部はがんばってるんだってことを、結果で見せることだ。とりあえず俺は来週の対抗試合でショートを最低五つは決める。相手は水鳥中学で結構強敵だが、やるつきやねえだろ」

健吾はもうひとり、陸上部の奴に話を振った。

「お前も来週、長距離走るんだろ？」

「ああ。けど見込みねえよ」

「最初っから氣弱なこと言つんじやねえよ。いいかお前。そりゃあ負けるかもしれない。それは俺も正直なところ勝つ自信なんてねえよ。先月の試合ぼろ負けでさんざん物笑いになつたからな。けど俺としては絶対、手抜きしたところは見せたくないと思ってやつた。いくらやつてもショートは決まらねえし、足は重くなる。けど、汚い手は一度も使わなかつたぜ。正々堂々と勝負しつづければいいから通じるもんがかなづあるはずだつて、俺は絶対思うんだ」

「そうかなあ」

みな、わかっているのかいないのかわからない反応を返すだけだった。

「じゃあ言い方替えるぜ。負けたつていい。負けるなら負けたで、堂々と言い返せるだけの勝負をした証明をしようぜ。手抜きはない。堂々とした勝負でもつて、玉碎してるのでな。俺はそれぞれの運動部の結果を集めて、毎週朝の会で評議の特権を使って報告す

る。俺の文字は汚いから、誰かに書かせて学級新聞みたく張り出してもいい。とにかく運動部はこれだけ頑張っているんだってことを、学校の連中に知らしめることが最初なんだ」

健吾の剣幕にだんだん飲まれたのだろう。円陣がだんだん狭まってきたような気がする。ふたたび肉の匂いや油のかすかな息が漂い始めた。

「健吾、そうだな。精一杯やつたことをまずは」「わかつたか、お前ら」

片手を差し出し、健吾は冷たい手がだんだん重なつてくるのを待つた。「ファイトー！ オー！」と試合前に気合を入れる儀式に似ている。重なることにだんだん暖かくなる指先。

「よし、じゃあ氣合一発いくか！ 青大附中運動部復権に向けて、ファイトー！」

「オー！」

空気が口口ッケの息そのもので一杯だ。満足だ。健吾はその息を胸いっぱい吸い込み直した。

宣言はしたものの試合はやつぱりぼろ負けだつた。中体連常勝チームの水鳥中学から勝ちを期待する方が無謀だといわれていたが、それなりに健吾もシユートチャンスをつかんだ。もつともその倍、相手側にボールを奪われてしまつたら立場がない。なにせ一年が主流の水鳥中学チームに比べ、青大附中は一年が全く使えない。本當だつたら健吾が司令塔になりたかったのだが、一応は先輩を敬わなくてはならないのでそこんところもうまくいかない。

そなんだよな、先輩たちがいい奴過ぎるからなおさらつまく切り捨てられないってんだよな。

運動部の一年たちが集まり、「結局は先輩に反抗できない理由」としてあげられるのが、現一年生たちの穏やかな性格だつた。本当に運動部に入りたかったのか？と尋ねたくなるような、競争心の薄い連中ばかりで、非常にやさしい。女子の方が勝氣と言われている。

非常に面倒見がいい。食い物の奢りは先生たちに見つからないよう、毎回行われている。もちろんしげきいじめなんてあるわけがない。みなにこやかに「お前ら、早く帰れよ、風邪引くなよ」と、暖かい気遣いのあるお言葉を賜る。そりやあ性格の不一致は多少あるかもしれないが、とにかく親切な奴らばかりだ。

実はそれがネックになつてゐるんだな、うちの学校の運動部は、闘争心溢れるプレイがモットーの健吾としては、頭の痛いところでもある。むしろ一年同士の間でぶつかり合つことが多いような気がする。大抵は一年に割つて入られて、結局なあなあで終わる。やるときは鉄拳の一発一発食らわせてもいいと思うのだが、過剰に暴力を避ける人々だ。

なんだかなあ、いい奴が多いとやり方も難しいぜ。

月曜の朝、健吾はまず学校に到着後、それぞれの一年運動部連中から、部活の最新情報および試合の結果について全部聞き取り調査をした。明るい情報は一切ない。みなぼろ負け情報ばかり。気がめいるが言い出しつぺの健吾だしかたない。ひとつひとつメモをしつつも、どういう試合だつたか、どういう見せ場があつたのか、相手チームはどのくらい強かつたのか、を克明に記した。スポーツ関係の記事を書く記者になつた気分だつた。

「健吾、お前のところはどうだつたんだよ。バスケ部は」

「シユートは決めたぜ。しつかりとな」

「それ以上の突つ込みを求めるのはどういうわけだ?」

お互い様だ。ということで教室に戻り、はるみを呼び寄せてまづは模造紙を広げた。

「お前、このまま俺の書いたとおりに書け。色はなんでもいい

「え? 私が?」

「佐賀の文字の方が読みやすいだる。上に『青大附中運動部最新情報速報』って書け。あとはお前の好きな書き方で全部写していくばいい」

「いいけど、私で本当にいいの」

「だからそう、びくびくした言い方するな！ 怒るぞ！」

健吾が怒鳴りそうになるのではあるみもおとなしく赤マジックと橙色マジック、そして黒マジックを使い分け丁寧に文字を埋め始めた。紙から下に映らない様に一枚模造紙を重ねている。健吾の机とはるみの机をくつつけるのは当然だった。健吾が紙を押さえてずれないとにしてやった。

からかう奴がいたら殴られるのをみな知っているのだろう。ちらちら女子たちが見つつく、無言で席に着く。一度はるみの髪型について「媚びてるよね」という悪口を言つた女子がいたので、きちんと筋を通した話をしてやつた。素直に納得してその場は収まったのだが、後で杉本梨南がロングホームルーム時に持ち出して大騒ぎになつた。当時はまだ溝口先生だったから手におえなかつた。今なら桧山先生にあつさり、「失礼なことを言われたら抗議するのが君の主義じやなかつたのかな。杉本さん」といやみをこめた一発を食らつておしまいだらうが。たぶん溝口先生が身体を壊した原因のひとつは杉本にあると、健吾は思う。

くだんの杉本梨南も、クラスの不良女・花森なつめ嬢と一緒に教室に入つてきた。けげんなまなざしを投げたけれども、そ知らぬ顔を決め込んだ。会話を成立させない、クラスのことについては健吾が仕切り、委員会関係は杉本が担当するという約束を交わしているので、こいつにについてはよけいな口をはさまれないですんだ。ポーテールにして長い髪の毛を束ねていた。一学期の頃は女子たちから「うらやましがられていた長髪だったが、最近は特別そういう話題もない。はるみが中華風娘の髪型、二つ分けした髪を丸めて耳の上で留めるという器用なことをしてきてから、そちらに目がいくようになつたらしい。

「健吾、これでいい？」

「上出来だ。よし、俺と來い」

すばやく健吾は廊下にはるみと共に飛び出した。画鋲と椅子を一

脚抱えた。

「いいか、押さえとるよ」

廊下前の掲示板に手を伸ばして貼り付けた。どうも斜めつているような気がするが、その辺は「愛嬌だ。とにかく健吾の目的はひとつ。

一年の連中に、運動部がきつちりと活動していることを知らしめる。

それも一年たちが、負けているとはいえ努力していることを伝えることだ。

「ね、健吾」

「なんだ。うるさいな」

「もし、また作るんだつたらもうときれいなの作りたい」「はあ?」

「なんとか画鋲で貼り付けた後、健吾は聞き返した。「だつて、文字だけでつまらないもの」

「じゃあ作ってみるよ。どうせ俺は。

むつときたのをはるみはやわらかな笑顔で遮つた。

「健吾怒らないで。私、うちでもつときれいに作りたかったの」椅子を抱え直し画鋲の箱を渡し、健吾ははるみの耳に息を吹きかけた。

桧山先生が入ってきて開口一番。

「いやあ、す」「いなあ。どうした新井林。朝の会始まる前に青大附中スポーツニュース最新情報が入るのは嬉しいぞ。おい、バスケ部どうだつた?」

起立・礼・着席の前にいきなり話を振られてしまった。鼻水をすりつつ健吾は答える。

「はあ、やつぱり朝の会だけだとB組の連中しか知らないことになるだろうからつてことで、やってみました」

「新井林の意見か」

「書いたのは佐賀です」

真ん中にでうつむいているはるみに視線をやり、健吾は靴の紐を結び直した。上靴をスニーカーにしているのはクラスだと健吾くらいいなものだ。

「ほお、きれいな文字書くんだなあとは思っていたが。そつかそつか。新井林の手伝いか」

「いや、来週からは佐賀に一通り任せの予定です。俺が情報を集めて、夜のうちに佐賀に作らせて、朝貼るつて形にします」

壁新聞。

小学校の頃にやらされたことがある。大抵、近所の火事情報とか、お祭りとか、ニユースめいたものとかを載せて、各クラスにポスターとして貼り付けるのがメインだった。あの頃はいやいやだったがあらためて思うのは経験のありがたみだった。

青大附中スポーツ新聞を壁新聞形式でつくりやあいいじゃねえか。

行き当たりばったりとはいえ、形は整つた。

はるみまで、いきなり手伝いを申し出てくれたではないか。

もつときれいなを作ってくれる、と言つてくれたではないか。健吾は後ろに張り出してある、四角張った文字の、面白みのない文字の羅列、評議委員会関係の張り紙を眺めてみた。全部、一学期のうちに杉本がひとりで定規を使ってこしらえたものだった。見た目きちんとしてはいるが、遊びがない。すべてが四角い枠の中に押し込められて、やたらとかちかちしている。はるみの柔らかい文字に比べて息苦しい。

「そうだな、佐賀、そろそろ時間割とかも汚くなってきたしな、佐賀がそういうデザイン関係が得意つてことだったら、時間ある時に書き直してもらいたいなあ」

こづきたか。

ひんときたのは健吾だけではない。はるみの真後ろにいる女の顔も、すつと上がり、真つ正面の桧山先生を見つめていた。さすが

につつかかりはしない。

そういう動物的本能は鋭いよな。

全く揺らがない桧山先生の表情が心地よい。せつやく健吾は起立・礼の号令をかけた。

特別、桧山先生が何をしたわけでもない。はるみについては健吾が毎朝つききりだ。女子だけの授業ではかなり、他の女子から嫌がらせをされているらしいが決して愚痴をこぼさないはるみ。杉本が操っているらしいのだが、本人が手を下さないので周りからも誤解されているようだ。「杉本さんと仲良しだったのに、いきなり男を選んだ佐賀さん」という誤解だ。その「男」である健吾としてはなんともいえない部分がある。

しかし、クラスの女子たちは知らないのだ。

はるみに杉本が何をしてきたのかを。

あんな男と一緒にいると馬鹿になるから離れなさい。はるみ。あんたにプライドつてもんはないの？

男はみな馬鹿ばかり。死ねばいいのよ。

こんなピンク色のノートを使うのはやめなさい。はるみ。こんなのは使うのは頭のレベルが低い印なのよ。そういうのではなく、全く何もついていない上品な便箋を使つべきなのよ。私のようだ。

小学生の言葉じゃない。どつかのおばさんたちが「おほほ」と言つていいのではないかと思う。しかし、口にしていたのは小学校一年から六年にかけての杉本梨南だった。ノートの色くらいでレベルが低いということに、何か勘違いしたものを思つ。そういうお前は今、「上品」なノートを使って、ねどつとした顔つきで背を伸ばし、一点を見つめている。ひそかに他の連中、最近は女子たちからも、

「ひとつのものしか見てないみたいで、怖い。靈能者みたい」とささやかれていることに気付いてもいよいよだ。

たぶん、杉本の見ているものはひとつなのだろう。

健吾や桧山先生、はるみには理解できない生命体を見つけているのだろう。怖い怖い。

桧山先生はいつ勝負をかけるつもりなんだろうな。

健吾が涙ながらに訴えた一者対談。あれから桧山先生の行動をかなり観察していたのだが、特段変わったことはなかつたようすだつた。早くつぶすならつぶしてほしいし、ロングホームルームでもたはるみにに対する女子のいじめ問題についてやるのならば早くしてほしい。それなりの資料を集めのべく、健吾は毎日はるみの側に目を光らせていた。

「佐賀、今日は体育の時間、女どもになにかされなかつたのか」

「大丈夫、私、ひとりで大丈夫だから」

「いいか、あの女なんかにくつつくんじやねえぞ。いいか」

「梨南ちゃんは私を嫌つてしまつたみたいだもの」

「あの女が土下座してあやまつてきても、決して許すんじやねえぞ。佐賀。お前があの女にされてきたことは、とにかく躊躇を入れてもかまわないことばかりなんだからな」

健吾が繰り返しはるみに言い聞かせてきたこと。

はるみは素直に受け入れてくれているのだろうか。

「どうもそこが不安だつた。いくら杉本のあぐじさを説明しても、」

「でも、梨南ちゃんがかわいそだだから」

とくる。かわいそうという言葉はまだ、杉本に対しい感情を残していることなのかもしれない。六年間洗脳されつづけてきたのだが、元に戻すのに時間がかかるのは覚悟の上だけど、健吾は口々いらいらする。むかむかした拳句、帰り道にいつも肩へ手を伸ばす。両手を合わせ、はるみのひたい一点に唇を近づける。本能だ。黙つたままうつむくはるみを見て、また衝動が走り同じことを繰り返す。幸い、まだ第三者に見られたことはない。

あまり学内でくつつきすぎていると、上級生たちに冷たい視線を

注がれる恐れがあるので、はるみと仲のいい他クラスの連中のところに連れて行つた。杉本から離れてだいぶたち、はるみもそれなりの友だちを外で作つてゐるようだつた。

それがいい。それができるだけの力を持つ女だ。佐賀はるみは。

健吾は給食後の腹ごなしに体育館へ向かつた。

空いていればバレー・ボールかドッヂボールかのうちどちらかをできるのだが、大抵は一、二年が占領している。さすがに上級生を敬うしかないのですごすこと帰る。今日も同じ状況だつた。ブレザー、ネクタイともに脱ぎ捨てボールにかじりついているのは、一年D組の羽飛貴史先輩だつた。幻のバスケ部エースになるべき人だつたはずだ。なんで帰宅部なのか、健吾には理解できない。

一年D組というと、あの軟弱次期評議委員長も混じつてゐる。仲間内で遊んでゐるのだろう。三対三に分かれてショートを決めるべく飛び回つてゐる。

「羽飛、よーし、その調子！」

上から女子の嬌声が聞こえるのも毎度のこと。やはり一年D組の清坂美里先輩と他の女子たちが一階から見下ろしていろいろ批評している。

「ほおら、立村、ほらちゃんとボール狙えつてば、全くあんたつてガキなんだから」

目立たなかつたので氣付かなかつたのだが、ちゃんと次の次期評議委員長様もボールの奪い合いをしてゐるらしい。目を凝らすと確かに、羽飛先輩と反対側の組で、ボールを奪つてはドリブルで進んでいる。しかしショートチャンスを生かそうとせず、他の奴に回してしまつ。結局は羽飛先輩がすぐに奪い返してロングショートを決めるパターンだ。まさに、委員会時と同じ。ヒーローは羽飛先輩で十分つて奴だ。

やっぱ、バスケの試合は人間関係を写す鏡だつていうけどほんとだな。

今後の委員会研究に参考になる事例だと思いつつ、健吾は体育館

から出た。

立村が小学校時代、死ぬほど泣き虫だったから嫌いになつたわけではない。

意味不明の女子おつかけ事件を起こして騒ぎになつたという女狂い伝説を聞かされて軽蔑したわけでもない。

自分に關係なれば勝手にしろつてことだ。その噂を事細かに教えてくれた先輩も、さほど立村に対しては嫌悪意識を持つていなかった。

「ま、あいつも悪い奴じゃないんだけどな」と大抵前置きがついていた。

最初の他中学交流試合についていった時だつたろうか。

本品山中学に遠征で出かけた時、たまたま青大附属中学の話となり、「そういえばなあ、品山で三年ぶりに合格した奴がいたんだけど、あいつ元気かなあ」という脳天気な話題に進み、

「そういえば立村ついていたけど、あいつ相変わらず授業中しくしく泣いてるのかなあ」

「ちょっと肩を叩いて、驚かせただけで泣き出すしなあ」

「人が近づくだけでもだめみたいだつたぞ、あいつは」

「まあでも、ああいつのつて切れると怖かつたよなあ。何されるかわからねえしなあ」

しかじか。しかじか。健吾が盗み聞きした範囲によると、品山小学校三年ぶりの合格者たる立村上総は、信じられないささいことで大泣きしてしまつ困つたガキだつたということだった。もともと軟弱な男は無視するつもりでいたが、さらに理由が深まつた程度に過ぎない。

しかし何でだろう。

もつといいかげんで馬鹿であつても、いい奴、尊敬できる奴、そ
う思えればためらうことなく健吾は頭を下げるだろ。そのくらい
の礼儀は持つてゐる。九九はいえなくとも知らない国の言葉をあつ
とこう間にマスターしてしまうという能力は、すごい。曲がりなり
にもあそこまで男子連中の信頼を集める手段は相当なものだろ。
あれさえなれば健吾は素直に立村を先輩として呼んでやれるの
だ。

あの女なんかをひいきしなければな。

入学当時から、どうも立村は杉本梨南をすっかりお気に入りにし
ているらしかつた。あの全校集会ファッショントシヨーでも杉本のこ
とを絶賛し、やたらと呼び寄せ近所の喫茶店に連れ込んだりする始
末だ。ちゃんと立村には清坂先輩といつもつたいたい彼女がいると
いうのにだ。

まがりなりにも彼女がいるなら一筋に生きようと健吾は叫びたい。
それともなにか。杉本の気持ち悪いくらいぶらさがつた胸が好み
なのか。

単なる巨乳好きなのか。

なにかあると「杉本は頭がいいよ。本当にすばらしくやつた」と繰り返している。そのくせ杉本には「あの不細工な顔」と謗られ
ているのを知つてか知らずか。自分を可愛がってくれる先輩にすら、
あの女は平氣で失礼極まりない言葉を投げるのだ。お天氣な奴だ。
きっと杉本にのぼせ上がつてゐるから、何も回りが見えないのだろ
う。

健吾はどうしても許せない。

最低女に狂つてゐる馬鹿男。

どつちもどつちだ。

その4 嘲笑する理由

健吾は口笛を吹きながら教室に戻った。すれ違いざまに職員室にて受話器を握り締めている桧山先生を見かけた。真面目な顔をしてだ。珍しい。ふだんはおちやらけてるつていうのに。借金の申し込みだろうか。人間、生きているといろいろ後ろめたいこともあるんだろう。二十四歳か。

「 同い年だ。 」

吉久菊乃先生。

ふわふわパーマをかけたままの、お人形さんのような感じだった先生。

六年時の担任だった。結婚退職して赤ん坊が腹から出てくるのを待っている。膨らんでいく腹の大きさを見せ付けられてかなり退いた。小学校の頃はよく泣かしたけれども、いつも笑顔で返してくれた。卒業の頃にはみな……ひとりを除いて……中学に行きたくないと泣いてしまう奴らが育っていた。

そう、あの女を除いて。

そうだ。佐賀を連れて会いに行こうか。ひさびさに。

健吾は職員室前の赤電話を取った。珍しく人がいない。適当にメモしたところに書いてあつたものだった。三回コールしたらすぐには繋がった。

「 はい、吉久です 」

結婚していても吉久姓のまま。混乱しない。

「 先生、お久しぶりっす。新井林だけど 」

「 あら、健吾くん。どこからかけてるの？ 今、学校じゃないの？ 甘い声だった。 」

「 学校です。あの、今日、放課後、佐賀連れて遊びに行つていいですか 」

「え？ こきなりねえ。びっくり。でもいこよ。せぬみちやんと一緒に？」

「ちょっと先生の知恵を借りたいんだけどさあ。いいか？」

「わかった。学校終わるのは三時半以降ね。青大附中から来るの？」

「うん。今日は部活がないから」

一年実力試験三日前から部活が休みになる。一応、青大附属はエリート校らしくその辺はきっちりしていた。どこがといいたいが利用できるものは利用する。

「じゃあ今から、部屋の掃除しなくっちゃね。じゃあ待ってるからね」

めずらしいことではない。他の女子連中も、公立に行つた連中も悩みを抱えた時はみなしたことだつた。杉本梨南以外、菊乃先生はみんなから慕われていたのだから。あの女とその親がつるんで、菊乃先生をつぶしにかかつたことを知つてゐる健吾としては、はるみ同様悪から守らねばならない「女子」のひとりだつた。いや、今度はおなかの赤ん坊入れてふたり分か。

夏休み前、まだまだ青かつた自分をなだめてくれたのが菊乃先生だつた。

はるみも一緒に座つていた。季節はずれのみかんをほおばりながら、『ホールディングウイーク』の一冊、ずっと健吾の話を聞いてくれた。

健吾くん、なんで杉本さんがあんなにはるみちゃんをいじめるか知つてる？

佐賀のことを嫌つてるからだ。

ううん、違うのよ。健吾くんのことを杉本さんが好きだからなのよ。でも健吾くんはるみちゃんのことが好きでしょ。だから、悔しくてならないの。

健吾も他の連中からつぶさに話を聞かされていたし、見え見えだつた。

健吾くん、どうする？

「冗談じゃねえ。俺には佐賀がいる。

「おお、断言しちゃったねえ。そうよね。迷惑よね。でもはるみちゃんは悩んでいると思うのよ。健吾くん。男としてできる」とをきりんとするのよ。お姉さんとしてのアドバイス。

男としてできることってなんだよ。

はるみちゃんを守つてあげることよ。女の子の嫉妬は怖いんだから。女の子の友だちなんて軽い軽い。健吾くんがしつかりしていれば、はるみちゃんはめげないですむの。

菊乃先生もやっぱり、杉本が嫌いなのか？

少し考え込んだ顔をしていたが、

「ううん、とってもかわいそうな子だと思うの。誰にも好きになつてもられないで、ばかにされてることに気付かなくて、自分が偉いと思ってるなんてね。だから健吾くん、はやく大人になつちゃいなさい。杉本さんを見下してやりなさい。赤ちゃんと見えるようになりなさい。おんなんじ年だと思うから腹が立つのよ。

大人になるつて大変だ。

どうすれば菊乃先生やはるみと同じように、

「杉本梨南はしょせん赤ちゃんなのよ。かわいそう」

と思えるのだろうか。健吾にはまだ、激しい嫌悪の対象でしかない。どんなに正々堂々きれいなやり方で戦おうと決意しても、泥を浴びせるような言葉をぶつけられ、自分が崩されそうになる。

どうすれば、俺は大人になれるんだろう。

やたらとピンク色のじゅうたんとカーテンが目立つ部屋だった。非常に居心地悪いものがある。女の部屋っていうのは誰もそうなのだろうか。まだはるみの部屋には入れてもらつていないのでその辺は想像なのだが。アパートは六畳一部屋だった。赤ん坊が生まれたら別の部屋に寝かせなくてはならないからだそうだ。

「健吾くん、はるみちゃん、さあ、食べてね」

おなかはぱんぱん、動くたびにだぼつとしたエプロンみたいなスカートが揺れた。あと一ヶ月くらいで生まれるらしい。菊乃先生もこんなに身体を動かしていいのだろうか。寝てなくてはいけないんじゃないだろうか。気になつたので聞いてみたところ、

「大丈夫なのよ。あとは赤ちゃんがでてくるのを待つだけだからね。栄養つけておかなくちゃ」

全く問題ないらしかつた。よくわからない。

田乃さんはいつも夜九時くらいにならないと帰つてこない。とりあえず健吾たちは夜七時くらいまで遊んでいてもいとお許しが出た。髪をふんわり広げた感じのまま、吉久先生は両足を開いてぺたりと座つた。こたつの上にはシュークリームとハート型のクッキー。たぶん菊乃先生の手作りだ。

「先生食つていいか」

「いいよ。どんどん食べなくつちや」

菊乃先生の側でお運びさんをしていたはるみの側にくつつき、健吾はまずシュークリームを先に取つた。口にほおばるのを見届けてからはるみが自分の分をつまんだ。ちょっと砂糖が入りすぎている感じで甘すぎた。

「健吾くん、甘いの嫌いなの？」

「嫌いじゃねえよ。けどさあ」

「だめなら、はるみちゃんにあげれば？」

いたずらっぽく菊乃先生がはるみに田乃で金団をしていた。
「いや、食つ。冗談じゃねえ」

完全に菊乃先生は、健吾とはるみに対して「教師」の顔を捨てている。十一歳年上のお姉さんという身軽な身体。うつかり変なことを言つて、

「健吾くん、だめでしょ。学校でそんなことしちゃ」と怒られることもない。だからいつも、クラス会は盛り上がる。杉本梨南が混じらないようにするのも健吾の計画どおりだ。文句を言

わから……たぶんそんなことはないと思うが……「クラス会ではなくて、有志の集まりにすぎないのになぜ、顔を出したがるのか」と冷たく言い返してやればいい。

「でもねえ、健吾くんも、よりによつてなんであの子と同じクラスになつちゃつたんだうね」

すでに菊乃先生は杉本のことを「あの子」と冷たく呼び習わしている。第一回春のクラス会からそうだった。杉本梨南をこの先生は、女子なのにめずらしく嫌つていた。

まあな、あんなひでえことされたら当然だな。

「絶対、あれは青大附中の陰謀だ」

「そうよね。なに考へてるんだうね。でも健吾くんもはるみちゃんも偉いね。しつかり恋人になつちゃつたんだもんね。きっとあの子、悔し涙流してるよ」

「先生、あのそれは」

はるみがクツキーに手を伸ばしている。でも健吾の手に気がついてまず、皿にひとかけらおいてくれた。いつもやつだ。はるみは何を置いても先に健吾を優先してくれた。

「いいのよここでは言いたいこと、言つちゃいなさい。ああ、私だつて先生じゃなくなつたからもつすつきりしたわよ。ほんつとあいう子、大人になつたらいやつてほどしつペ返しされるんだから。あ、でもはるみちゃんにとつてはそれどころじゃないか。あと二年も一緒なんだよね。どうにかしないと、ね」

「俺がなんとかする」

健吾はもうひとつシュークリームをほおぼつた。

菊乃先生が六年の秋、杉本梨南の親につるされるような形で校長に叱られたことを、健吾は母から聞いていた。有名な事件だつた授業が脱線しすぎて進度が遅すぎるという、杉本梨南本人の訴えを真面目に受け取つた両親の直訴らしい。もともと杉本の家は気位が高すぎて付き合いづらいといわれていた。クラス父母の団結力が猛烈

に高まつたのは言つまでもない。

菊乃先生をやめさせるな運動起こつたもんな。

タイミングも悪かった。その前後、杉本の青大附属受験に際して、「もう少し人との付き合い方を勉強しなくては」という一コアンスのことを菊乃先生は話したらしい。決して、怒鳴つたわけでもなく、冷静沈着に、先生の顔して話しただけだつたという。

しかしながら「うちの梨南ちゃんに失礼な」と激怒した杉本の両親は、まず校長へ、次に教育委員会へ話を持つていつたという。授業が低レベルだつたとか、いつも授業をほつたらかして遊んでいたとか、多少はめを外しすぎたきらいはあるクラスだつた。みんなで一緒におしゃべりしたいと、授業中いつのまにか雑談になつたりとかがしそうだつた。しかしそれが気にいらなかつたらしい。杉本の成績が群を抜いていたのは自分で勉強したからであつて、学校は役に立たないところだ。他の児童はかわいそうだ。などなど並べ立てたという。

教育委員会が動いたにもかかわらず、父母が一生懸命に菊乃先生を守るよう運動し、何事もなくおさまつた。これにより杉本一家は学区内で嫌われ度が高まつた。杉本梨南本人は全く無視状態だつたが、一応担任らしい顔をして菊乃先生は話し掛けていたはずだつた。「杉本さん、みんなと仲良くしましょうね」と。

でも、すげえよな。本音だよな。これつて。

蛆虫を詰め込んだシュークリームを口に突つ込んでも文句は言えないことを、あの女、あの女の両親はしてきてる。健吾としては当然だ。

「でもね、健吾くん。他の人も言つているけど、ああいう子はほつといた方がいいのよ。どうせ大人になつたらいやつてほど、嫌われるんだから。本当に好きになつてほしい人に振り向いてもらえないで泣いちゃうのは、ああいう子なのよ」

「はあ?」

よくわからず、健吾は紅茶を入れてくれた菊乃先生にカップを差し出した。

「もひふたりとも、おとな、だから教えてあげるけどね」

はるみが顔を赤らめる。どうやら健吾に内緒で、ふたりの付き合いについて報告しているらしい。これはまずい。あとで問い合わせよう。もしそうだったら罰としてあれを。健吾はにらみつけた。またはるみが膝に手を置いてつむじた。

「あとで、何話したか言えよ。でなかつたら、お仕置きだ」

「あれのこと?」

田で会話ができる。はるみの髪がちょっとだけ崩れていた。

「なあにふたりでいちゃこちやしてるのよ。もう、ほんとおぬけちやう」

足を広げたまま、菊乃先生は背をぴんとのばした。

「どうして健吾くんにあんなにあの子がつつかかってきたのかっていつとね。小さい頃から健吾くんははるみちゃんのことを守つてたでしょ。それが気に入らなかつたのよ。他の先生たちも言つてたわよ。健吾くんとはるみちゃんが一緒にいるときに入らなくて、いきなり物を落としたり、ノートを破つたり、いろいろしてたつて。はるみちゃんを無理やり引き離したりしてたつて。でも、大人はねなかなか、いえないのよ」

てつくり誰も気付かないでいると思つていた。なんで手伝つてくれなかつたんだろう。かなり健吾としては怒りを覚えた。守つてやれといいたかった。

「だからあれば全部、妬きもちな。どんなに健吾くんの気を惹こうとしていろいろしても、全然相手にしてもられないどころか、とことん嫌われてくでしょ。ね、はるみちゃんだつたらきっと、友だちになつても、うつために一生懸命、『機嫌とつて』いたでしょ?」

「うん、梨南ちゃんと仲良くしたかつたからそうしてきつもり」小さい声でつぶやくはるみ。だからやうこつ言い方はやめり、と怒鳴りたかった。

「でしょ。はるみちゃんは偉いなあといつも思つてたの。杉本さんがさんざんわがまま一杯に振舞つてゐる間、はるみちゃんは友だちがいい気持ちになるようなことをしてはいたのよ。あの子は赤ちゃんだつたから、こっちを向いて好きになつてもらう方法は、おしめしたままわんわん泣くかものをぶつけるかして、ガラガラを振り回してもらうしかないとつて思つてたわけよ」

「赤ちゃんだと、思えばよかつたんですね」

あの女のしていることが、そんな簡単に許せることかよ。

ふたりがくすりと笑つてゐる間、健吾は煮え繰り返りそつた気持ちを甘いクッキーをかみ締め押さえていた。

「健吾くんが杉本さんのタイプだつたからな。私だけの意見じゃないのよ。他の子たちも、他の先生たちも同じ」と言つてたんだから

「う

菊乃先生はもう「先生」じゃない。

だから言いたいことがいえるのだ。

言いてえだらうなあ、桧山先生も。

何かをたくらんでいる桧山先生の顔を思い出した。同年代だ。

「けどなあ、あの女、いまだに佐賀に手出そつとしてるんだぜ。むかつくだらそりやあ

紅茶のおかわり三杯目。口に物をほおばりつぶやいた。

「女の嫉妬つてやつね。しかも気付いてないから厄介なのよね。こいつおばさん、世の中にはたくさんいるからねえ。赤ちゃんから今度はいきなり、おばさんになつちゃつたのかしらねえ。杉本さん

「おばさん、なんて」

くすくす笑い始めるふたり。こちらの意見の方が健吾には納得がいく。

「健吾くんが色男だから、もつ離れられないのよ。なんとしてもこっちを見てほしい、もしかしたら自分のことを好きになつてもらえるかもしれないから、と思つてつつかかつてくるのよ。でも、健吾

くん。はつきり言って、全然、でしょ」

「当たり前だ。あんな奴、男でもむかつくな

「女だからなおさらむかつくなでしょ。本音は

鋭い。健吾は答える代わりにカーテンを眺めた。まだ外の太陽が薄く揺らいでいる。薄暗くなっている。立ち上がって灯りをつけた。「カーテン閉める」

ついでにピンクのカーテンも閉めた。中途半端な明るさだが、はるみも菊乃先生も、顔がずっと艶やかに見えた。

「ねえ、健吾くん。杉本さんにまさかと思うけど、彼氏なんていいないよね」

難しい質問だ。

「いるわけねえだろ。ただなあ」

はるみが続けた。

「振られた人はいるのよ。一年の先輩に」

あ、あの馬鹿男だ。

「ういう話題ははるみの方が詳しいだろ？」

「佐賀、それはお前が話せ」

「うん」

健吾にもうひとかけら、クッキーをつまんで皿に置き、はるみは頷いた。

「一年に立村さんっていう、評議委員の先輩がいるんだけど梨南ちゃんのことをすごく大切にしていたの。梨南ちゃんもいつも側にくつづいていたんだけど、その人が別の先輩とお付きあいしてしまったの。だから、梨南ちゃんはショックでまた健吾にハツ当たりみたいなことをしたみたい」

「あれは別問題だ。けどそれも当たってるかもしれないえ」

吐き出すように答えた。単に評議委員長ポスト争いでむかついて喧嘩を売ったのかと思っていたが、立村のことが絡んでいるとなると納得だ。

まさか、清坂先輩とあの馬鹿立村がくつづいているとはな。

あの女も読めなかつたんだな。

「ふうん。ちなみにその一年の男の子つてどんな顔?」

「小柄だけど、王子さまつて感じ」

「お~あいつのどこがだ。あの馬鹿面でろくもの食つてねえような顔のどこが!」

はるみを怒鳴りつけたが、本人は全然どこ吹く風だ。

「だつて、他の人が『公子様みたい』つて。ほら、セドリックが大きくなつたような感じだつて話してたわ。梨南ちゃんは健吾のような顔が本当は好きなので、いつも『不細工で馬鹿で頭が悪い』とか言つてたけど」

「その通りだ、奴についてはそのとおりだ」

はるみの口から立村のいいところを讃められるとむかついてくる。ようによつて、健吾と正反対の男を讃められるつていうのは気持ちよくない。

「うわあ、そなんだ。王子様みたいな感じなのね。顔でぼおつとした感じじゃなくて」

菊乃先生の言葉を遮つた。

「ばかやう。あの男が今まで何してきたか、知らないだろ。俺は知つてるんだ、いいかよつく聞け」

以下、次期評議委員長・立村上総にまつわる事實を、約十分の間しゃべらせていたいた。はるみと菊乃先生はときおり顔を見合わせて、特に何も言わずに聞いていた。健吾のことをやつぱりわかつていらつしやる。

「小学校六年の時だつたらしい。やたらと人の顔色ばかり見ておどおどしていたらしげ、そういうのはしようがないわな。性格だ。まわりの連中もそういうあいつの性格に手を焼いて、いろいろ誘つたり仲間に入れようとかしていたらしげ。やり方が荒っぽすぎたつていうけど、そのくらいふつうは耐えられるよな。人間なんだから。ところが卒業式数日前、あいつが青大附属に合格した直後。いきな

りクラスの浜野さんっていうサッカー部の同級生に決闘を申し込んだそうなんだ。それもわかる。むかつく奴がいたら正々堂々と勝負をかける、これもいいことだ

はるみを見つめて、肩をぽんぽんと叩く菊乃先生。わかつていらつしゃる。

「浜野さんって人はすぐ出来た人らしくって、ある程度負けをあの馬鹿男に譲るうと思つたらしいんだ。話によると、あえてわざと負けてやつて、気持ちよく青大附属に送り出してやるうと、覚悟を決めたらしい。からかいすぎたし、かわいそうだしといつたかい心からきたもんらしい。浜野さんから聞いたわけじゃねえよ。一学期に俺が本品山中学の練習試合に行つた時、聞かされた話だ」

「ふうん、その浜野さんって子は、男の子つて感じでかつこいいわ。なんか健吾くんに似てる」

「知らねえよ。ふつうだつたらここで気付くだろ？ 奴の得意とする自転車のぶつけ合いに決闘内容を選んでやつたくらいだから。ところがだ。あの男は全くそういうところに気付かないで、馬鹿正直に土手から突き飛ばして、浜野さんにひでえ怪我をさせたらしい。信じられねえよな。しかも本人はそれが終わつたことだと思つてさつさと帰つていつたらしい。ここで勝負がついたなら、俺ならためらうことなく握手するぜ。勝つたことは認める。けどな。相手をたたえろよフェアプレーを誓めろよつて俺は言いたい。そんなこともしないでおびえて逃げて、あとは親同士で話し合いさせて、本人は出てこねえ。最低だよな」

「ふつう、学校側の問題にならないのかしら。その、立村先輩つて子、青大附属に入学したんでしょ。あの学校、そういうところで合格取り消しにしたりしないのかしら」

「するよなするよな。その辺があの女ともおんなじなんだ。たぶん何かしたんだろうな。とにかく浜野さんは相手に情けをかけたがために、一学期サッカー部を棒に振つたというわけだ。これがまず第一段」

複数の本品山中学バスケ部の一年生から聞き出したことだつた。

ただ健吾の言葉には脚色が入つてることも否定できない。

なんとなくだが、本品山一年の人たちが話す口調には、カバーがかかつてゐる感じがしたし、立村に対する恨みのようなものもさほど感じられなかつたからだ。もう過去なんだろう。浜野さんという対決相手もかなり出来た人で、多少つぱつてはいるものの兄貴分みたいな存在らしい。浜野さんと対に話せる奴だつたら、健吾も立村を多少は尊敬できたかもしれない。立村は結局ヒステリックにつかつておびえて逃げ出した大馬鹿野郎なのだ。尊敬する先輩ランキングから思いつきり下げるは言つまでもない。

健吾は第一段を続けた。

「まあ、小学校のことは」「破算にしたつていい。奴が青大附属に入学して先にしたことというのが、クラスの人気あるふたりに近づいたつてことだ。まあ、氣があうならそれでもいいわな。そのふたりつていうのが、佐賀、知つてるだろ」

「羽飛先輩と、清坂先輩ね」

頷いた。その辺ははるみもよく見ている。

「菊乃先生知らねえかもしれないけどな、今言つたふたりつてのが、めちゃくちゃ人気ある先輩たちなんだ。あの、おどおどした馬鹿男なんかには鼻もかけないようなタイプなんだ。ところがあいつは自分を守るためにそのふたりにさつさと近づき、お友達になろうと計画したらしい。ひとりは親友に、ひとりは自分の彼女にしちまつた」「ただ仲良しになつただけじゃないの?」

菊乃先生がきょとんとして首をかしげた。

「考えてみるよ菊乃先生。もしだ、俺のところに、ほら、三組にいだろ。少し頭がぼーっとした感じの、やたらとあの女にくつついて嫌がられてた奴」

妙に納得するふたりの顔。

「ああいう奴がいきなり、俺のところに来て、友だちになろうとべたべたしてきたところ想像してみるよ。俺ならぞつとするぜ。保護してほしいのかどうかわからねえけど、俺は俺と相性の合つ奴と付き合いたいと思うよな。いじめはしねえけどな。あいつは何を考えたか、化けの皮をかぶつて羽飛先輩と清坂先輩に近づき、完全なお友だちの顔をしていつたってわけだ。自分の同じレベルの連中とするものがいやだつたんだろうな」「

これはほとんど、一年の女子たちから聞かされたことだった。

一年D組関係ではなかつた。たまたま、女子バスケ部の連中が噂していた時のことを見出したこと、職員室に行つた時に偶然、他の先生たちが立村についてぐちついていたことを耳にした程度である。

「彼もかわいそうな子なんですが」という前置き付で、現在二年D組担任の菱本先生が誰かに話していたのを耳にした。地獄耳である。

いつたいどこがかわいそなのかはよくわからない。父子家庭で、家族の愛に飢えているとでもいうんだろうか。数学能力が欠加していく将来苦労するのが目に見えているからつていうんだろうか……ならなぜ青大附属に合格したのかが健吾としては謎である……とにかく、嫌われるよりは「哀れまれている」といつた方が近い。あの女と同じ扱いをされているのに気付いていない。つてわけだ。

「まあそれだつてどうだつていいぜ。俺には関係ねえ。さて第三幕。あの野郎は清坂先輩に手を出しながら、何を考えたか別の女子にちよつかいだしやがつたつてわけだ」

「杉浦先輩のこと?」

「そうだ。杉浦先輩がなんと、本品山中学に進んだ浜野さんの彼女だといふことも気付かずちよつかい出したりさらには、しつこく追い掛け回したりしたらしい。その辺は俺も見ていねえからどうでもいいんだ。だが、あまりのうるささに根を上げた杉浦先輩は、先

生に助けを求めたというわけだ。ふつう、するか？ そこまで？
相手に嫌がられていると感じたら、俺ならすっぱりあきらめる

はるみを見て、向こうが首を振るのを確かめた。

「最終的に絞られて手を引いたらしいが、その時なんと、清坂先輩と羽飛先輩を利用してクラスを黙らせたそうじやねえか。ここまでやるかよ。最低だな」

こちらのニュースソースは別ルートからだ。やはり一年の女子たちが流してくれたことなのだが、今までの連中がわりと立村びいきの発言中心だったのとは全く違う。仮想敵として立村の存在を受け止めている。手を出されたという杉浦先輩は、何度か見かけたことがあるがかなり可愛い部類に入った。はるみに似ていると思う。彼女と仲良しの女子たちが取り巻いて、いろいろ噂を蒔いているようすだった。顔がどうとか性格がどうとか、そういう問題ではなく、「立村くんがしつこくて、杉浦さんが苦しんでいる。なんとかして」と声を大にして訴えたかったようだ。

もちろん好きな子がいて付き合いたいと思うのは自然だろう。健吾が人のことをとやかく言つことは絶対にできない。証拠ははるみ、そこにある。

健吾が許せないのは、立村が振られたにも関わらず最後の最後まで追い掛け回したことにある。もしさるみを取られたら健吾はどんなことがあっても取り返すだろう。でも、はるみ本人が健吾をほしくないというのだったらあきらめるしかない。いや、あきらめはないがゆっくりとチャンスをうかがつていいくだろう。

しかし立村の場合は周りの眼を気にせずにしつこく寄つて言つたという。

相手が自分の天敵・浜野の彼女であることも知つててか。

勝ち目のねえ戦いをよくもまあしたもんだよな。

第一、周りの取り巻きが担任に通報するといつこと事態が尋常な
うざることではないか。

一応、評議のくせしてそんなこともわからないのか。

ここまで健吾は言いたいところだつたが、あえて伏せたのは自分の墓穴を掘る恐れがあるから。あきらめて第四段に続いた。

「まあそれだつていいさ、さて次の年。杉浦さんから手をひいたあいつは、とうとう大本命単勝一・〇倍の清坂先輩にアプローチしたそうだ。勝ち目ねえよとは思つていただろうな。その一方で抑えに杉本まで手を出すという始末。まあこっちの方で決まつてくれれば一番話は丸く収まつたろうな。惚れている相手だつたらたとえ蛆虫であろうとも、あばたもえくぼつて奴でな。ところが何かの間違いで清坂先輩を口説き落としてしまつた。まぐれだぜあれは。そりやあな、美人で人気者の清坂先輩を落とせば奴の立場も安泰だ。本条先輩にもおべつか使つているわけだしな。自分の保身にはどんな手でも使つてことだ。そして、奴はためらつことなくあの女を切り捨てた」

健吾がぶち切れたのはこの点だつた。

他人の恋路なんてどうでもいい。その一、その二、その三における出来事は健吾にとって入学前のことだし、「尊敬できない頭の軽い先輩」として無視すればいいことだ。しかし、いくら女狂いとはいえあの杉本梨南に手を出そうとしたり、運良く清坂先輩に〇Ｋをもらつやいなやべたべたとくつついて自分の身を守ろうとするところ。要は、節操がなき過ぎるのだ。もし杉本梨南を覚悟の上で選んで、毎日一年B組の教室に杉本を迎えて来るなり、健吾のような態度の相手にけんかを買つて出たりでもしたら、自分の立村觀はかなり変わつたような気がする。あの馬鹿女を選んだ馬鹿野郎と思いつつも、「ずいぶん根性ある奴じやねえか」と一目置いて、評議委員長としても受け入れられたような気がする。趣味が悪い女狂いの点はさておいて。

しかし、立村は結局、自分の保身のために杉本を切り捨てた。

自分がふつうだと思つてゐるのなら、男としては当然のやり方だらう。

しかし立村は本音で杉本梨南のことを氣に入つていたはずだ。

好きな女はひとりで十分だらう。

たまたま高級品の女子が振り向いてくれたからといって、自分の惚れた女を見捨てるなんてことができるだらうか。健吾だつたら絶対にできない。はるみが仮に嫌われつづけていていじめられていたとしても。たとえはるみを選んで全校からシカトされたとしても。

そのくらいのことをしないで、なあにが。

「俺だつたら、たとえ嫌われ者に惚れたつてかまわしねえ。絶対に守つてやる」

はるみの瞳をまっすぐとらえ、つぶやいた。そばでぱちぱちと小さな拍手。菊乃先生がにこにこしながらおなかの上で手を叩いていた。

「よつくわかつたわ。しょせん、杉本さんの好きになる男の子つて感じなのね」

「健吾の言つことは大げさです。だつて、そんな人かどうかわからぬいし」

「俺の言つことが間違つてるというのかよ」

「つうん、違うの。健吾。だつて立村先輩は梨南ちゃんを振つたんだもの」

「だから言つただろ、自分の立場を危うくしたくないからだつて」「梨南ちゃんはそれに気付かないでまだ思つてゐるのよ」

知るか、そんなこと。あの女が誰に惚れていようが健吾には関係ない。立村に熱を上げてもらつている方が好都合だ。

「馬鹿は馬鹿どうしじつといつてもらつてればいいんだ」

菊乃先生はふんふんと頷きながら考え込んでいた。シュークリームをもうひとつまみ、

「健吾くんは大変だつたもんね。私もわかる。大嫌いな相手に好かれるつてストレスたまるもんね。よく言つじやない? 相手を好き

になると大抵好きになり返してくれるって。大嘘よね。どんなに好いてくれても、絶対にいやなものはいやよね。しつこくされたらもつといやよね」

「どこかひつかかるものがあつて、健吾は答えずに紅茶をすすつた。音を立てて一気に飲んだのでむせた。背中に暖かいものが乗つたのを感じた。上下に温もりが動いた。

「あらあらはるみちゃん、いきなりさすつちゃだめよ。健吾くん、息の根止まつちゃう」

「そんなことねえよ」

心臓がどくどくしたのを、どうやら菊乃先生に聞き取られてしまつたようだつた。

夕方ではなく夜に近い時刻、ふたりは菊乃先生の部屋を出た。

「またふたりで来てね。もう私は、先生じゃないんだから。お姉さん、つて呼んでね」

「お姉さんじゃねえだろ、おばさんだろ」

「こら、失礼なつ！」

「じつそつと答えたはるみを無理やり先に外へ出し、健吾はもういちど菊乃先生に向い尋ねた。

「菊乃先生」

「ん？ なあに？」

「さつとき言つてたことだけさあ」

口籠もつた。咽の小骨をとりたかつた。

「嫌いな相手に好かれても、絶対にいやなものはいやだつて、さつとき言つてただる。そう思つても絶対変じやねえよな、俺」

「杉本さんをどうしても好きになれないつてこと？」

菊乃先生はそつと健吾の耳にさわやいた。

「嫌いなものは嫌いでいいのよ。当然。でもね、健吾くんやはるみちゃんがあんな子のことで、叱られるなんて損よ。大丈夫、私も協力するから」

「協力？」

「おなかを撫でながら、もういちど菊乃先生は微笑んだ。
「私、もう先生じゃないのよ」

その5 鬼になる理由

いきなり桧山先生から電話がかかってきた時は焦った。なにかまずいことやらかしたかと冷や汗ものだった。ちなみに英語の試験問題を横流してくれたわけではない。

「新井林、試験が終わってから悪いが生徒指導室に来てもらえないか」

軽い挨拶の後、雰囲気を壊さぬままに頼まれた。

「へえ、なんか俺、悪いことしたっすか」

実力試験終了後すぐバスケット部の練習が再開だというのに面倒なことだ。

思いつきついやそうに答えてやつた。

「本当にお前もいやだらうなあとは思うんだが、どうしてもやってもらわないと先に進めないんだ。唯一頼りになる評議なんだからな、お前」

言ひ方に何かどろりとしたものがある。ぴんときた。学校で話さずに、わざわざ家に電話をかけてきたところでは、クラスの連中にばれたらまずいことなんだろう

「あの女がらみかよ」

「あの、女か。鋭いな」

否定しないということは、きっとそうだ。風呂に入つたばかりなのに一気に湯冷めしそうだつた。健吾はタオルで髪をこすりながら受話器にため息をついてやつた。

「で、何やれっていうんだよ、先生」

「お前が杉本に対してもうつて、佐賀に対して彼女がしてきたことを、思う存分彼女を目の前にして言い放つてもいいたいんだ。しんどいだろうが」

やつぱりな。

やるべきことをすぐに悟つた。

「いくらでもやってやるぜ。手加減した方がいいのか？」

「いや、思う存分遠慮なく。その辺はお前に任せる。かなりきつい言い方しないと理解できないらしいからな。彼女はふつうの人とは違う理解力の持ち主だからな」

鼻で笑う声。仮にもあんた教師だと突っ込みを入れたい。いくら健吾あの女……杉本梨南……をゴキブリ扱いしているとはい、ちょっとまずいんではないだろうか。もっとも杉本に言いたい放題ぶつけて土下座させられればそれにこしたことはない。ざまあみろと思うだけだ。ただし一切許す気はない。正々堂々、桧山先生とはるみの目の前できちんとした制裁を与えて三年間、地獄を見させてやるのが健吾の願いだ。いじめなしでも、クラス全員からの堂々とした冷笑と軽蔑、濃縮して浴びせることは決して間違つていない。佐賀の傷ついた六年間は戻つてきやしねえんだ。

「俺、一度、評議の席での女とタイマン張つたんだけどなあ。またやるのかよ」

「頼む、新井林」

おかげで試験勉強よりも対決計画を立てる方に力が入つてしまつた。

しぐじつた。次の日の試験はぼろぼろだぜ。

桧山先生の電話が終わつてからすぐバスケ部のキャプテンへ「諸般の事情で練習遅れる」連絡を入れた。一年の先輩たちは温厚な方々だから、いやみひとつ言われることなく受理してもらえた。「青大附属スポーツ速報」の効果もあるのだろう。いつもぼろ負けの運動部だけれども、健吾とはるみがこしらえた壁新聞の力で、少しずつ生徒たちの関心が高まつていいようだ。一年B組前廊下で指差しながらじつくり読んでいる女子たちを、最近良く見かける。でもまずはゴキブリを退治か。

健吾は小学時代のアルバムを取り出した。

小学校時代の「写真はみな青い表紙のやたら重たいアルバムに挟み込んでいる。中からはるみがアップになつて写つているものを十枚はがした。左隣をおどおどしながら見つめている「写真ばかりだつた。選んだわけではなかつた。なぜか同じ感じのものばかりだつた。」

次に手元の簡易アルバムブックを取り出した。現像しに行くとくれる安っぽいものだつた。ペラペラした表紙を開くと、そこには健吾の映したはるみの笑顔が続いていた。ふたりで出かけた時、学校でふたりつきりになつた時のものばかりだつた。笑えと命令したわけではない。いつも、健吾を見つめる時の顔がそれだつた。

一枚、髪が乱れていたものがある。

帰り道、街路樹の陰で髪の毛をほどかせた時、思わずシャッターを切つたものだつた。

違いが分かるよな、ふつうはな。

小学校時代の陰気なはるみ写真を、もう一冊の簡易アルバムブックにしまいこみ、健吾はかばんに入れた。戦いの前の緊張か、ぶるると震えが走つた。

ひとつ賭けだ。

健吾は今まで、たくさんの女子たちと接してきた。むかつく女、いやなタイプ、苦手な女子、たくさんいた。一応男である以上何度かは、「好きです」の言葉を聞かされてきた。もちろんはるみのことがあつたから一度も頷いたりはしなかつた。でも、どんなにむかつくタイプの女子であつても、その気持ちを踏みにじつてやろうと思つたことはなかつた。

そう、あの女以外は。

俺のことを気に入ってくれるのがどうしてだかわからねえよ。でも、他の女子にだつたら、どうもありがとくらいいは言つ。言つてから断る。それが男の礼儀だ。あとは普通に話すだけだ。それだけだ。

菊乃先生もはるみも、口々に言つ。

「杉本さんは健吾くんのことが好きだったのよ

「梨南ちゃんは健吾のことがきっと好きだったの

だから佐賀や菊乃先生を踏んづけて許してもらえたと勘違いしてゐるのか。あの女は。

徹底して憎んでもらえればそれにこしたことではない。叩くのめすのに遠慮はいらない。

でも、健吾のアンテナでも、杉本梨南の隠れた電波をキャッチすることがないとは言えなかつた。吐き氣がするほど認めたくない事実だつたし、杉本の行動はまず、好きな男子にするようなことではなかつた。怒涛の「ごとく罵るあの態度に「好意」を認めることはできなかつた。ただはつきりしていなのは、はるみや菊乃先生を大切にしたい健吾の気持ちを、杉本は蛇蠍の「ごとく嫌つていた、そこのことこりだつた。

もし、周りの人人がいつよう、杉本の本心が健吾への想いにあるとしたならば。

健吾はためらひなく、はるみのため、菊乃先生のために、鬼になる。

正義の戦いでなかつたとしても、血みどろになつて杉本梨南を殺す。息の根を止める。

泥水をたっぷり被つてやる。

次の日の試験は瞬く間に終わつた。もともと健吾は学年十番以内をキープしている。一度も杉本以上の点を稼いだことがないのがむかつくが、こればかりは眞田の調子なのでしかたない。学年一番を続いている杉本のことを一切誉めない担任たちつていうのも妙な話だが、きっと天狗の鼻をへし折るうとする眞田的なのだろう。いつも健吾の時だけ頭をぐりぐりされ褒めちぎつてくれた。しぐじりはなかつたが、それなりにいつもの順位は稼げるだろう。

まああつてとこか。

女子側を見ると、はるみがおとなしく帰りの準備をしていた。薄めの茶色い「コード」を羽織、耳に手を当ててお団子髪を整えている。例に寄つてクラスの女子たちははるみに一言も声をかけない。杉本の指示か、それとも個人的不快感か。その辺は追求しない。

「なにぶりつ子してゐるのよ」

と聞こえがしにしつぶやく女もいる。健吾としてはあとで締めてやりたいところだが、はるみに止められてるので今日のところはがまんした。

はるみを手まねきした。

はるみの近くに寄るといやおひなしに、ポーネーテールの女と顔を合わせる羽田となる。やるならタイムン勝負の時だけで十分だ。

「健吾、これからバスケ部?」

「いや、もう一発勝負がある。帰つたら電話するからな。変なところこくなよ」

はるみはこくつと頷いた。耳もとの後れ毛をいじりながら、桃色の唇を薄く開けた。

「それと土曜日、練習終わつたらお前のつまひに迎えに行くからな、その時に、この前菊乃先生にまづいた落とし前、つけるから覚悟してけよ」

菊乃先生に「いやあねえ、妬けちやつ」とこわしめた、あれのことだ。

わかつているのかほのかにはにかむはるみ。知らん顔して健吾はつぶやいた。

「じゃあ、行け。あの女に絡まれる前に」

「私、何も怖くないのに」

今度は健吾が全身硬直する番だつた。

「怖いのは、健吾のおじおわよ」

お仕置きをひそかな楽しみに取つておいて、健吾は三階の生徒指導室へ向かつた。ここはかなり奥まつたところにあるのだが、あま

りいいことを使われたことがない。成績の悪い奴が呼び出しを食らうとか、自殺寸前の追い詰められた奴が先生に相談するとか、健吾には全く縁のないことばかりだった。完全に防音されているそのうので、多少ぶつちやけた話をしてもばれないらしい。

今回はハエたたきとしての入室だ。

「新井林です。入ります」

「よし、入れ」

まだハエもゴキブリもいなかつた。扉を開けてまっすぐの窓からは、裸の木々がやせ細つていて見えた。外は曇りでへたしたら夕方雪が降るかもしないとは天気予報より。細長いガラスのテーブルが低い位置なので、腹の部分まで丸見えだ。足をおっぴろげて悠々とひとりがけのソファーに腰かけている。桧山先生はまだくつろぎ態勢だつた。テーブルの上には、黒い綴じ紐で硬い表紙のついた、出席簿のようなファイルが載つていた。表書きに英語の筆記体でなにやら書いてあつたが気にしなかつた。英語はどうせ嫌いだ。

「俺、どこに座ればいいですか」

「隣りに来いよ。やはり味方が側にいないとな」

含み笑いをした後、桧山先生は両腕を組んで背中をのけぞらせた。健吾が長いソファーの端、桧山先生の向かつて左隣りに身を沈めると、いきなり膝を叩かれた。敏感な部分でくすぐつたかつた。

「今日は思う存分本音を言つてしまえ。担任として、俺が許す。傷つくかどうかなんて考えるな。お前の考えていることをすべて言い尽くせばいいんだ。暴れられたらその時俺がなんとかする。まあこれでもし杉本が反省しないようだつたら」

「あの女が反省するわけねえよ。六年間俺がどれだけ

「ふつうの女子ならともかく、あの杉本だからなあ」

「あの杉本」という部分をゆつくりと、余韻残すようつぶやいた。

「仮に彼女が土下座して謝つたらどうする?」

「するわけねえだろ。しても俺は許せねえよ。俺よりも佐賀の立場

が問題だ

「そうだな。簡単にはいかないよな」

健吾は時計を覗き込んだ。一応一年のキャプテンには連絡しているとはいうものの、早く体育館に行きたいのもまた事実。三日からだを動かしていないと足がなまりそうだ。数回足を踏み鳴らし、健吾はひょこっと尋ねてみた。

「先生、あのな」

「どうした新井林」

「先生、どうしてあの女を嫌うんだ？ 俺と同じ理由かよ」

「俺は担任だぞ、そんなことするか」

「だつてさ、田がそう言つてるぜ。『キブリを叩き潰したいって物言わず、肯定の意。桧山先生の脣が一瞬への字を描き、すぐに戻つた。うまい。』

「『キブリは、苦手だな、確かに』

『』アルバムを取り出した。健吾だけが知っているはるみ表情が満載だつた。自慢したい気持ちと、よその誰かに取られるんじゃないかというおののきも感じていたりする。自分でもそれが女々しくてうざつた。

だから明日、おしおきを敢行するつてわけである。はるみの、無意識にかもし出すふわふわした空気が、よその馬鹿なハエを近づけてしまいそつだから。

ノックが響いた。

「入りました」

健吾への言葉とは全く違つていた。『キブリ相手専用の言葉遣いで桧山先生が答える。

ねじまき人形のよつに四十五度、ぴくと頭を下げた制服姿の女子がひとり、姿を見せた。直角に振り返り扉を閉めた。音は立てない。ポニーテールのぶつとい髪の毛がむかむかしそうだつた。隣りの桧山先生は、まさにゴキブリを叩き潰す寸前の気迫でもつて、杉本梨南を迎えていた。

「戸口の椅子に座りたまえ」

野郎ふたりの視線にむかつきを隠せない様子だったが、おとなしく杉本は腰掛けた。桧山先生の向かいで、一対一。健吾の方を見下すようににらみ、すぐに逸らした。田と田が合ひうだけでも気持ち悪いので一切無視していた。桧山先生も一瞥後、わざとなのか健吾の方のみに顔を向けて言葉を続けていた。両手を膝に置いたままの杉本は、相変わらず感情のない瞳を向けていた。

「今日来てもらつたのは、杉本、君がどこまで今のクラスについて理解できているかを知りたかったんだ」

ちらりと見てはすぐそらし、話す時は仕方なく顔を見る。いかにもゴキブリ用のまなざしだ。大人としてはまずいんではないかと健吾は心配になつたくらいだった。

「決して君を責めたいと思つてはいるわけではない。理解できているかどうか、それだけだよ」

理解、できる?

よくわけがわからない。杉本も言葉の意味が理解できないようすで黙つたまま座つていた。

「俺の言つていることが、わかるかな。わからないなら素直に言つていいんだよ」

馬鹿丁寧だつた。近所の幼稚園児を捕まえて、「あのね、わかるかな?」と赤ちゃん言葉を使つてはいるのと似た空気が漂つた。正直、こつちも気持ち悪い。

「わかるんだよね、どうかな」

針金の声で杉本は答えた。一切視線を逸らさない。これも怖い。

「わからないのでしたらとつぐに口にしています」

「そうか。それならまず、新井林からすべての説明をしてもらおうか。新井林はよく一年B組の実情を知つてはいるから、君にもわかりやすく話してもらえると思うんだが」

「なんで新井林なんかとまた話をしなくてはならないのですか。六

月に三年の本条先輩を仲介役にしてけりをつけました。委員会を私が、クラスを新井林が担当するということですべて終わつたはずです

「

鼻でせせら笑う桧山先生。隠そつともしない。これは露骨だ。おおおいどつするんだよ、先生。この女何するかわからねえぞ。

「いや、状況を理解できれば、君も考え直してくれるのではないかと期待しているのだが」

「いまさらくだらない」とで時間をつぶされるのは迷惑です

「いや、ちょっと待て。もうひとり、話を一緒に聞いてもらわなくてはならない人がいる。新井林だけでは君も落ち着かないだろう? 一番君が、信頼している人だよ」

以上ここまで、保父さん感覺の語りかけは終わつたらしい。ほつと一息つき健吾も椅子にのけぞつた。誰が来るんだかわからないが、杉本の信頼している相手とならあまり健吾とも相性が合わないだろう。

桧山先生は時計を見た。

「先生誰だよ、それ」

好奇心には勝てず、桧山先生のブレザー袖口を引っ張りながら尋ねてみた。

「もうじき来るよ」

二十四歳の大人声で桧山先生は答えた。

返事をしかけた時に杉本が割り込み、一気に言葉が変わる。

「私は何も悪いことをしていませんし、ここで新井林を相手に話をする必要はありません」

「君が理解できなくても、一年B組のためには君が理解してもらわなくては困るんだよ。わかつたかな、杉本さん」

「命令される筋合いはありません」

頑なに言葉を返す杉本をあしらつて、全く桧山先生は動じなかつた。最初から覚悟を決めて「杉本幼児扱い作戦」を実行してい

るのだろうか。健吾が桧山先生を認めている理由は、健吾とその他まともな男子連中の持つ「正義」を正面から評価してくれるところ。正々堂々と対決すること。汚い手を使わないこと。クラスのいじめを打破すること。そのために杉本梨南と戦つてること。桧山先生はそれを「正義」として受け取つてくれている。ミーハー受けする一面を持ちながら、女子の陰湿なやり口を許しがたいとばかりにぶち壊している。決して杉本のやつってきたことを許さない。反省するまで徹底して拷問しようと覚悟を決めている。いろいろ悪口を言わわれているのかもしれないが、健吾としてはその姿勢が潔く思えた。

言い合いがエスカレートする前に、再び扉を叩く音が聞こえた。

「先生、誰か来てるぜ」

ちょうどいいところで合ひの手だ。健吾は杉本の顔を見ないようにして扉が開くのを待つた。

「よし、入りました」

見たくねえ奴だぜ。なんであの男が来るんだよ。

片腕に焦げ茶の「コード」を抱えるようにして、恐る恐る部屋の中を見渡し、桧山先生、健吾、最後に杉本の顔を見つめて、

「桧山先生、この前お話で伺つたものをいただきに参りました」

気持ち悪いくらい敬語を使いやがつた。立村上総の登場だ。次期評議委員長で、杉本梨南の全面的味方。もっとも信頼されている相手、ときたらこいつしかいないとどうして気付かなかつたのだろう。自分があんぽんたんぶりに腹がたつた。もちろん視線を投げただけであとは無視した。

「ああ、ちょうどいいところに来ててくれたね、立村くん。悪いんだけどな、ちょうど君の後輩ふたりの意見を聞いてもらう時間があるかな。俺の卒論はここにあるよ。時間あるだろ？ 君は部活に入つていなかつたはずだよな」

畳み掛けられ、困つたように立村は首をかしげていた。ガラスの

テーブルに載つていた出席簿みたいなものは、どうやら立村に渡すべきものだつたらしい。次に杉本の顔をまじまじと見つめた後、扉側のソファーに腰を下ろした。健吾と同じソファーだが、端と端。埋まつたという感じだつた。膝にコートを畳んだまま抱えていた。「僕がいていいんですか。真面目な話し合いをされているんじゃ」

「杉本、立村くんがいた方がいいだろ?」

答えず黙つて桧山先生をにらんでいる杉本の顔。少しだけ険しくなつたようだつた。健吾としては素直に本音を言うに限る。

「俺はやだね」

「新井林、日本語がわかる人がある程度いないとまずいだろ」

落ち着いた風に立村は杉本とささやきあつていて。いかにも女の機嫌を取る太鼓持ちといつた風情だ。気持ち悪い男だ。そんなに杉本のことを気に入つていたらなんで清坂先輩と付き合つているんだか。こういう優柔不断さがうざつた。だからこつこのことが大嫌いなのだ。

健吾の言ひ分についてはいまさら繰り返す気もなかつた。あの女だつて過去の戦いで使つた言葉には免疫もあるだろ。

桧山先生は過去の悪行三昧についてとことん追及せよと言つけれど、なんの意味があるというのだろう。根本的に言葉が杉本には通じないのだ。日本語の通じない外国人と同じだ。どんなに

「佐賀はるみをいじめるのをやめる。無視するのを止める」

と訴えたところで杉本はどこ吹く風といつた顔で無視したのだから。今、杉本がはるみに無視以上のことをしないのは、健吾がにらみを聞かせているからに他ならない。

あまり俺も汚いやり方をしたくはねえよ。ただな、俺は佐賀を守りたいだけだ。

ずたずたになるであらう杉本がかわいそだとは思わない。惚れを弱みを突いてハツ裂きにしてやるうとする、きっと自分が汚れ

るだらう。はるみを守るため、正義を捨てる。でもその一方ではるみに「健吾はやり方が汚いのね」と軽蔑されるリスクも負っている。

健吾は迷っていた。

手元のアルバムを開くことをためらっていた。

杉本以外の女子には将来も絶対しないだらう。打ち明けられた思は、きちんと誠意を持つて返したい。男として、人間として。でも杉本だけは別だつた。女ではない。「想い」でもつて健吾の大好きな相手をずたずたにした奴だ。ひとりは六年間おびえた顔を写真に残しつづけた。ひとりは教師として学校を追い出されそうになり、結局傷のいえぬまま退職した。

六年間どれだけ、この女の放射するエネルギーによつてはるみと菊乃先生、そして健吾が苦しめられてきたかを思い知らせる番がきている。はるみを健吾から取り上げ、いやといつほどじりどろの感情を健吾に湧き起こさせ、存在を忘れられないくらい押し付けてきたあの女を。

健吾は立ち上がり、杉本を見下ろした。

全く表情の変わらないふたり。特に立村は状況を把握していないのか、きょとんと敵意なしの顔で見上げていた。健吾の怒りを冷静に受け止めるとは、いい度胸である。いつまで続くのか。

「これを見ろ」

一冊、アルバムブックをテーブルに投げ出した。近づくと感染しそうだつた。

テーブルから片手で立村の前に滑らせたが。立村がそのまま杉本に手渡した。杉本がぱらぱらとめぐりすぐに閉じた。

「新井林が撮つた写真を見るのに何の意味があるのでですか」

「よく見比べてみる。一冊目は小学校時代、二冊目は中学時代。中学のものはみな、俺が撮つたものだ」

「変態、悪趣味だわ」

「ああ、惚れた女の写真を撮るのが変態のすることならそう言えれば

いいだ。だがな、小学校の時と中学の時どとのくらい差があるかを見てみる。表情ひとつひとつをよつく眺めてみるよ」

杉本が言い返そうとしたのを無視して、桧山先生が入った。

「悪いが、先に俺が見ていいか。愛のカメラマン新井林の腕をとくと拝見したい」

「別に、いいですよ」

杉本が見るのでうんざりといった風に立村へ返した。そこから斜めに、できるだけ健吾の方を見ないようにして桧山先生へ手渡す立村。数度黒い出席簿もどきに手を伸ばしていただが、度胸がないのだろう。そのまま引っ込んだ。こいついう気の利き過ぎるところがうつとおしい。だから本条先輩を相手に「ホモ説」をさらやかれるのだ。ゆっくりとページをめぐり、一枚に目を留めては健吾の顔を見上げる。何度も規則正しく顔を上げては見、見では上げる。うさんくさい感じがして健吾は目をそらした。決してまずいところでなんて撮つていなかつた。

修道院の前、家の前、公園、美術館前。ポーズは取らせていない。素顔で十分である。

「佐賀もこういう顔、するんだなあ」

「幼稚園の頃、ずっとそうだった」

吐き捨てるようにつぶやいた。人になんか見せたくない。独り占めしたいものばっかりだ。

「愛が詰まっている第一冊目を置いて、さて二冊目か。うーん、雰囲気ががらっと変わるな」

当たり前だ。健吾は答えなかつた。桧山先生には健吾の思惑が見事に通じたらしい。満足だ。正常な男の機能があれば、気付くものばかりだろう。気がかりなのか杉本に小さな声で話し掛けているだれかさんは大違ひだつた。

「どう思つ、先生」

「暗いなあ。雰囲気がこわばつているというか」

一緒に映つてている写真はすべて、はるみのこわばつた頬と目の寄

れた感じが目立っている。とにかく一緒にくつついでいたい、いやくつつかないと何されるかわからない。ほとんどじやちほこばつて、笑み一つこぼしていなかつた。石像の仏様に似ている。

「先生も、そう思つたか」

聞こえるか聞こえないか程度にささやいてみると、
「こ」の差はいつたいなんだつてことだな、新井林

「そういうことだ。じゃあ続けるぜ」

健吾は立ち上がりもう一度「弔のアルバムを広げた。曖昧な顔のふたりによく見えるよう突きつけた。

「この写真の違いはどこだ、答えられるかよ」

「違う写真に決まってるじゃないの」

全く動じない。杉本の口調は棒読みで上下がない。側ではらはらしながら見つめている立村。杉本の手を覗き込み、もう一枚にふれてみてはすぐに話す。一応見比べてはいるらしい。男だつたらきちんと手にとつてじっくり見ろと言いたかつた。

「両方とも佐賀の写真だ」

「下品ね、男の本能丸出しで品がないわ」

「ああ、俺はもともと下品だ。どとかの誰かとは違つて、上品ぶつてにこりともしない写真ばかり残したりはしないんだ。ちゃんと見るべきものを見て、力の抜けた写真だけ、この中には入つてるんだ。良く見る」

はるみのおびえた顔を健吾は上から指差した。

「たぶんそばにはお前がいるんだろうな。杉本、いつも言つてたな。佐賀に向かつて『写真を撮る時笑うと下品な人間になつてしまふから、きちんと口を閉じて、正面を見なさい』つてな。菊乃先生あとで大笑いしてたぜ。写真は笑顔で撮つたものが最高なのに、お前みたいなのは非常に損してるつてな」

「結婚するまえに子どもを作つた人に言われたくないわ」

かなりぎくつときた。女のくせにここまで言つとは杉本梨南、下品もいいところだ。

同じように野郎ふたりも息を呑んでいた。特に立村、あまりなれていないんだろう。清坂先輩、させてくれないだろう。当たり前だ。ここで突きつけるのが健吾の答えだつた。

「じゃあ聞くが杉本、お前これだけ人に好きになつてもらつたことあるのかよ」

杉本以外の女子には決して使わないだらう手。

「佐賀や菊乃先生のように、自分が好きな相手に好きだつて言われたこと、本当にあるのかよ。親以外に、惚れられたこと、あるのかよ」

「この女を憎むからこそ使う切り札。健吾は立ち上がりぐつと杉本を見下ろした。ついでに不安定な顔で全員の顔を覗き込む立村にも。「ばかじゃないの。よく恥ずかしくもなく言えるものね。下品な人間と話すと口が汚れるわ」

「かわいそうに、誰にも好きになつてもらわないで、お前は生きていくつてわけか。佐賀のように笑顔でいられるつてわけか。言つとくがな、他の女子はお前のことを好きでもなんでもないんだぞ。ただ変わつた動物を見てよろこんでいるだけだつて、菊乃先生も言つてたぞ」

桧山先生に習つて柔らかく、幼児相手の言葉で責めた。全く落ち着きを失わない杉本は、眉間に力をこめて言い返してきた。上等だ。「恥を知らない人間と話す必要はないわ。先生、こんなくだらないことで呼び出したわけですか」

「新井林、続ける」

やめろといわれても続けるに決まつてゐる。健吾は鼻の下をこすり、もう一度凝視した。立村だけが首をきょときょとさせている。杉本を覗き込み、健吾を見上げ、繰り返した。こいつの言葉が怖いとは全く思わないけれども、波が上げ潮になりそうな予感がした。「いいか、佐賀はな小学校時代、いつもこんな顔をしてたんだ。俺は何かがおかしいと思つてた。まあ何もしなかつた俺が悪いとはわ

かつてゐる。お前が佐賀を守つてやつていたふりをして、こき使つていたことを見逃していた。傍観していた俺も犯罪者だ。卒業してお前から離れるようになつて初めて、佐賀は俺を見て笑うようになつたんだ。お前と話をしなくなつたとたんにだ」「あんたがはるみにのめりこんでいるのはわかつたわ。でもそれと私と関係ないわ」

杉本は動かない。変わらない。ぶち壊すことにためらいはなかつた。こなごなにしてやりたい。

「俺はただ、佐賀の笑顔を守りたい、それだけだ。佐賀がおびえる何者かをおっぱらいたい、それだけだ。だから他の女子連中については許してやつた。お前が佐賀を傷つけさえしなければ、俺は何一つ手出しさしねえ。勝手に来年評議委員長になつていただいてけつこうだ。だがな、一年B組現在の状況はなんだ？ 佐賀はクラスの馬鹿女子たちからシカトされ、馬鹿女子たちはお前の言いなりだ。あそこは魔女の巣窟だ」

「私は何もしていない。新井林が勝手に捏造してるだけよ」「ああ、そうさ。俺が佐賀にべたべたしすぎるからだつて言つたな。

だがな、もし俺が他の奴みたく、遠くから見ているだけだつたらお前が何しでかすかは想像がつく。また佐賀を自分の手下のようにこき使つて、写真を撮る時は口をゆがめて人をにらみつけるような顔をさせる。下品だ、馬鹿だ、馬鹿男子と付き合つなんて最低だ、とさんざんわめき散らされる。冗談じやねえ」

「はるみが私を裏切つたから無視しているだけなのに、何か文句があるの？」

とうとうこの女の本音を引っ張り出した。結局、はるみに裏切られたと勘違いしているだけなのだろう。本当ははるみが健吾によつて救い出されただけなのに。ここで健吾は人差し指を杉本の顔正面に突き出した。指先のレーザー光線ですべて消えてなくなるよう。「裏切つた、かよ。たまつたもんじゃねえな。俺はただ、佐賀と付き合つたかつただけだ。しゃべりたかつただけだ。それだけできれ

ばあとは十分だ。お前には関係ないだろ。クラスの女子たちに無視させることはないだろ」

「無視させてなんていないわ。みな私に賛成してくれているだけよ。あれだけかばつてあげたのに最後の最後に私を裏切つて、傷つけて、失礼なことをしたはるみに対しては当然じゃないの」

「かばつてあげた、かよ。かばうなんて言葉は大嘘だ。佐賀はずつとおびえていたってことがこの写真で判明しただろ。お前は親を使つて菊乃先生をつぶそうとしたり、俺の友だちをふたり、街から追い出したりやりたい放題してたよな。ああ、死んだ猫を三匹お前の家に投げ込んだのは確かに悪かつたさ。けどな猫と人間の家どちらが大切なんだよ。仕事取り上げて追い出すつてほど許しがたいことか」

「当然の報いよ。馬鹿な人間に對する正義の鉄拳よ。氣付かないでいる人たちがばかなのよ。鶴呑みにしている新井林、あんたが一番馬鹿なのよ」

「そういう馬鹿な相手をどうしてお前は追い掛け回してたんだ？」
さつと引き抜いた切り札。見事に決まった。言葉が止まつたのが何よりもの証拠。

そして、隣りの立村がぽかんと口を開けて杉本を向いたことも。まさかこいつも見抜いていたのかよ。
自分がけのうぬぼれではない。誰もが認める事実だと、健吾が納得した瞬間だつた。

たとえ杉本の顔色が変わらなかつたとしても、健吾の感情センサーがすべてを見抜いている。傷つかないはずのない言葉を、習うともなしに知つていた。鬼が取り付き、悪魔の言葉を唱えさせていく。自分でない、怒りの言葉が勝手に口から飛び出していく。指を力いっぱい鼻の頭に向かつて差しつづけた。

「周りは言うな、俺にお前がほれていたから、くつついている佐賀を引き離そうとしたとかなんとかな。悪いが俺は、女の振り方は十

分マスターしてゐるぜ。佐賀以外の女子からつきあいかけられたらきちんと、俺なりの礼儀でもつてごめんつていうな。ああ、それが普通だ。つきあえねえけど人間嫌いじゃねえつてことだ。だがな杉本、お前のことだけは顔を見た時からへどが出るほど嫌いだつた。いいか、お前みたいな女に好かれるとしたら、俺は気が狂うほど気持ち悪かつたんだ！ うわさが立つだけでも耐えられねえんだ。まあそういうことはありえないと思うがな。それだけでも俺は神経がそそり立つていたんだ！」

健吾が知つてゐる直感の事実。

それが、という風に、

「ちょっと顔が人間らしい造型してゐるからといって何を勘違いしているのかわからぬ。立村先輩よりもましなことがそんなに自慢したいことなかしら」

やはり、そうか。

はるみから聞いていた。七年間、気が付いていたけれど思い出すのもいやだつた。

顔、かよ。こいつ顔以外で男を判断できない奴なんだつてな。好きになつてもらえればそりやあうれしい。今、杉本にも話した通り、健吾は小学校の頃から何度も告白をかまされてきた。はるみのことしか考えられなかつたからきちんと断つてきた。でも嫌いな女子だとは思わなかつた。

でも、杉本だけは別だつた。

あの女に好意をもたれることだけはいやだつた。

好きの裏返しの意地悪なんて、そんないやらしい言葉を聞くだけで吐き気がした。

菊乃先生、わかるだる。あの女に俺は殺されたことだつたんだ。だから今復讐してやるんだ。

おなかの大きな菊乃先生、はるみの笑顔、守りたかつた。

「ああ、お前の好みの顔らしいな。だが俺はお前がこの世で一番憎い。殺してやりたいくらい憎い。抹殺してやりたいくらい憎い。佐

賀をいじめる女が一番憎い」

お化けが背中におぶさつているようだつた。健吾の一番深いところから出でている真実の声。人の片想いを利用するなんて汚いことを絶対にしたくない。他の子にはできない。でも、この女の感情を抹殺するためには手段を選びたくない。

はるみのためになら、健吾は鬼になる。

「一生お前を好きになるようなことは、絶対にないだらう。世の中の男でまともな男は誰一人として」

動かない瞳、答えない口。能面だ。毒を垂らしていく鬼だつた。

「新井林、もう止めてくれ！」

いきなり立ち上がつたのは立村だつた。唇が何度か震えていたのを見ていた。

後ろを振り向くと桧山先生が夢から覚めたように慌てて背筋を伸ばしている。ずっと前かがみになつて健吾と杉本の対決を見据えていたに違ひない。健吾からも鬼が逃げた。

「なんだよ、あんたには関係ねえだろ」

「頼む、もうやめてくれ」

形を崩さず、立村は真つ正面からじつと健吾を見つめた。見据えたというには敵意が感じられない。ひるんだ。次の言葉が本当に立村から出たものとは思えなかつた。

「もう、勝負はついているだろう」

健吾に隙が見えたのだろう。立村は一步歩み寄つた。

「俺も今まで杉本の話を聞いていただけだし、お前らがどういう繋がりでいろいろいがみあつてきたのか一方的にしか知らない。実際に見ていなければ判断もできない。だが、新井林が恨みを持つ理由は理解できるつもりだ」

「口先だけでよく言うぜ」

「杉本が佐賀さんに対してしたことは、あきらかに悪いと思う。たぶん杉本は純粋に善意だったと俺は見てる。でもそう思えない人

だっているのもわかっている。新井林、そういうことだらう?」

穏やかな口調は変わらなかつた。評議委員会で本条先輩を相手に

しているのと同じだつた。

椅子に座つたまま初めて杉本の表情が揺らいだ風に見えた。かすかに横を向き、立村の背中を冷たく見つめるだけだつた。健吾や桧山先生がいくら言葉をぶつけても一切封じ込めていたのに、なぜか立村の言葉には反応する。健吾の呪文から解放されたようだつた。鬼を呼び戻したくて健吾はどもりながら続けた。だらしない。情けない。

「善意であろうがなかろうが、佐賀が六年間ひでえ目にあつてきたのだけは確かだ。あんた、もしこの女のしてきたことが善意で本当に佐賀を守るためだつたとして、許すことができるかよ。なんとかのためだつたら許されて当然だと思っているんだろうな。悪いがそんなん甘つたれた料簡は通用しねえよ。傷ついたのは佐賀なんだ。この女がどんなに土下座したつて佐賀の六年間は戻つてこねえんだ」

「だから杉本は制裁を受けてるだらう?」

語尾が強まつた。片肩を落とし、背の軸を斜めにし、立村は健吾の顔を覗き込んだ。猫のまなざし。捨てられた子猫の顔。怖氣たつた。足を踏ん張つた。

「小学校時代のことは新井林、君の考えが正しいと思つ。だけど、それと今杉本に言つたことは別だらう。新井林が杉本を好きになれないのはわかつた。でも、わかりきつていることをなんで今さらひっぱり出す必要があるんだ」

鬼が逃げる。立村の言葉と一緒に「正義」を唱える声が戻つてくる。耳をふさいでしゃがみこみたい。でも男の意地、できない。あえいだ。

「なあ桧山先生、なんでこいつなんかをつれてきたんだよ。学年違う相手をなんで」

いいかげん立村の言い分に反応するのもおつくになつてきた。言葉が見つからなくなりそつだつた。健吾はもう一步足を引きなが

ら後ろの桧山先生に助け舟を求めた。軟弱でもやはり立村は一年だ。一年の差は健吾が想像していたよりも大きい。怒鳴つたり殴つたりするなら健吾もせてしまふのだろうが、言葉で必死に食い下がつてくる相手を簡単に払いのけることはできなかつた。

桧山先生は健吾にも、杉本にも使わない大人の言葉で答えた。両手で手すりを掴んで、「うつ」と息を止めた声。スタンバイしたのだろう。

「立村くん、ありがとう。新井林も座れ。やはり君は次期評議委員長だな。きちんと一方の意見だけを取り入れず、公正な立場で判断してくれていいな」

「なんでこいつなんかにありがとうだなんて言つんだよ」

「いやな、今日は新井林とふたりで杉本に、一年B組の現状について理解してもらつつもりだつたんだがな。たぶん杉本には理解できない言葉の羅列ではないかと思ってなあ。一番杉本が信頼している立村くんと一緒にしたら、きっと杉本も少しは理解しようと努力してくれるんではないかと、期待していたわけだ。本当の目的は立村くんに俺の卒論を読んでもらいたかった、それだけだがな」

はは、と話言葉のまま笑つた。「理解」言葉のリフレインが健吾の頭にこびりついて離れなかつた。どうしてかわからないけど咽に骨がひつかかつたまま取れない違和感がある。

「杉本、新井林の言い分は言い過ぎだつたかもしれない。小学校時代のことについては今更何も言わない。だが新井林の言うとおり佐賀が苦しんできたことも事実だ。佐賀が杉本によつて『いじめ』られていることも立村くんを始め全ての人が認めているのも確かだ。いいかげんここで、自分の非を認めるることはできないか？自分が何をしてきたか、これだけ話しても理解できないか？」

杉本は軽蔑しきつた風に、一切表情を変えなかつた。まず立村の顔をまじまじと覗き込み、強くにらみつけた。健吾のことは一切眼中にない。鬼がまだ顔に張り付いているのかもしれない。そして最

後に桧山先生と一対一のお見合いをした。

「ばかばかしい。理解するもなにも、新井林の一方的な話を聞かされていいるだけです。こんなくだらないことに付き合わされる暇があったら、家で勉強します」

もういちど、立ち上がったままの立村に向い、「立村先輩、新井林と私との勝負はまだついてません。勘違いしたこと言わないでください」

言い捨てると同時にかばんを抱えた。コートを腕にかけ、ぜんまい人形のお辞儀をした後懇懃に扉を閉めて出て行つた。健吾と杉本梨南との対決は五分五分。立村によつて水入りとなつてしまい現在勝負は預かり。ただし尻尾を丸めて逃げ出したのが杉本梨南の方であるとは、健吾と桧山先生共通の見解ではないだろうか。

立村はしばらくしまつた扉の方を向いていた。ぽかんと口を開けたままだつたが、すぐに桧山先生の方へ向き直つた。座つたままの桧山先生が卒論を手渡そつするが、立村は首を振つた。かなり慌ててている。動搖している。

「すみません。明日、先生の卒論直接職員室に取りに行きます。今日は邪魔してすみませんでした」

同じく頭を下げて飛び出していつた。女狂いの立村のことだ、杉本を追いかけていつたのだろう。また喫茶店に連れ込んで機嫌をとろうとするのだろうか。

一切言葉を発しなかつた桧山先生が、戸の閉まる音と同時に笑い出した。たぶんその声は杉本の耳にも聞こえていたことだつ。

「やつぱりなあ、『理解』できなかつたみたいだなあ。なあ新井林」

「俺ももうこういうことしたくなえよ」

「まだ杉本が人間として話を理解できるかどうか試しだけだ。悪かつたな新井林。しつかしつくづく思うよ」

健吾の肩を叩き、耳もとにささやいた。

「普通の会話が通じない人間と話すのは大変だな。よく新井林もが

んぱつたもんだ。まあ、ジュースでも飲んでけや。俺も少しまとも
な日本語でふつつの会話をしたいぞ。つきあえ」

健吾はほとんど聞いていなかつた。立村が発した縋るよつた瞳だ
けが心のどこかにひつかかつていた。

なんであいつ、『勝負はついているだろ?』なんて言つたん
だ?

まだ先が長いと分かつててるのは健吾の方なの!。

その6 生まれ持つての理由

しばらくは静観していた。いくら桧山先生のお許しがあったとはいえ、杉本梨南に対してぶつけた言葉には罪悪感がなきにしもあらずだった。「正々堂々」とした行動ではないと思えてならなかつた。あの女以外には、俺だつて絶対にしなかつた。

けど、人間としてやつたらまずかつたんじゃねえか。

杉本本人は全く感じることもなかつたようである。健吾の言葉にどこ吹く風といったように。隣りでスタンバイしていた立村だけやたらと慌てていたのが印象的だつた。結局杉本を追いかけてどうなつたのだろう。

唯一変わつたことといえば、次の日以降杉本と立村の間がぎこちなくなつたことか。杉本が一方的に無視しているといったほうが近い。立村がおどおどとした風に「あのさ、杉本、いいか」と話し掛けるのを、短い数語で「結構です」と遮断する。「立村先輩、立村先輩」とひつひつしていた頃をが長いだけに関係悪化は目立つた。

けど、「もう勝負はついてるだろ」つて、なんだよな。

健吾に対しても、下から出た態度を立村は崩さない。やはり顔色うかがつていてるという感じでむかつく。

本条委員長もおかしいと思つてゐるのか、立村の目を盗むようにして質問を突きつけてきた。

「健ちゃん、どうした。なんか一年、面白いことになつてるだろ」「なつてねえつすよ」

詳しい事情を説明するのもなんである。肩を軽く組んで、頭をぐりぐりやられた。

「やめてくださいつて。別になにもねえつすよ」

本条先輩が青大附属を中学卒業と共に退校し、公立を受験すると聞いていた。先生たちの配慮ですべりどめに青大附属への切符は残してくれてはいるようだが、学年トップの成績を保つてゐるこの人の

ことだ。問題なく合格するに違いない。

「いやな。俺の弟分もかなり落ち込んでるみたいだしさあ。杉本のことでまた、健ちゃん大変だつたんじゃねえかなあと、俺は思ったわけだ」

弟分。やっぱり『本条立村木戸説』健在なり。

「本条先輩、今更そんなこと言つたつてしようがねえよ。あの女にかまつてゐる暇があつたら別のことしてえよ」

「別のことといえば、『週刊青鴻大学附属スポーツ』、あれめちゃくちゃ人気だなあ」

鼻が高い。てつくり「評議の仕事を無視して何事だ!」と怒鳴られるのを覚悟していたが、懐の広い本条先輩。あつさりと認めてくれている。毎週月曜日の朝、健吾が情報を体育系部活の連中から集め原稿を書き、昼までにはるみが記事を清書した後、帰りに張り出す。もう二号目に突入した。他クラスからも記者を志願する奴が増えていて、かなり内容も充実してきているよつた気がする。桧山先生からも、

「壁新聞だけではもつたいない。印刷して全校に配るようなものにしような」

と、正々堂々応援の言葉を賜つた。もつぱら公認つて奴だ。

「三年の間でも、運動部の連中は肩身狭かつたみたいだけなあ。あれで少しは安心して自分の部活の証ができるつてよろこんでたや。お前、バスケ部で疲れきつてるつてのに、パワフルだよなあ。さすがだぜ。俺の見込んだ奴だ」

だつたらなんで評議委員長をあの馬鹿男に指名するんだよ。毒ついてもしょうがないので、健吾は領き返した。感謝の意だ。

「本条先輩はなんで運動部入るつとしなかつたんですか。もつたいねえなあ」

「またその話かよ、上下関係の厳しいとこでじこかれたくねえつてだけだつたぜ。上に立つのはいいけどな、ペエペエで納得いかないことには頭を下げるほど、俺も人間できちやいねかつたからさ。球技

大会だけで十分だ

「じ、きなんて、今の一にはねえよなあつて思つけど」

「ああ、あれな」

わかりきつた風に本条先輩は反り返つて答えた。

「今の一はとにかく後輩を可愛がるうつてモットーで活動してるんだと。立村が話してた。ただでさえ運動部は人がいないし、それは不用な体罰とかしきが原因かもしれない。いいか悪いか別として、とにかく自分らは後輩をあたかく迎えようじゃないかと意見が一致したらしい」

そういう馴れ合いがチームを弱くしてること気付かねえのか。馬鹿男。

運動万能、球技大会・体育大会のスターたる本条先輩にはぜひ、バスケ部のキャプテンとして君臨してほしかった。叶うことのない願いだつたけれども、健吾はつづくため息をつきたかつた。結局鼻息になつてしまつたが。

「まあ、もし何かあつたら早めに知らせりよ」

「わかりやした」

健吾の答えを安心気味に飲み込んで、背を向けた本条先輩。一年生たちに任せているのだから、受験勉強にも専念できる。一年生をからかうことにも時間を割く。本条先輩だつたら純粹に尊敬できるのにどうして、あの馬鹿男を来年から見上げなくてはならないのだろう。

その馬鹿男が何をしているか伺うと、無言のまま教室を出て行つたのが見えた。少し落ち込み気味に見えるのは、杉本を間に挟んだ修羅場を知つているからか。懸命にかばうだけかばつて、結局何も出来ずに嫌われている情けない奴だ。杉本も気が付かぬうちにいなくなつていて。眼中にない。フィルターで杉本の存在を遮断するよう最近は心がけている。人間として認識しないように。

ここまで殺してやりたいくらい憎むつてねえよなあ。
まあ、はるみがいなからいいかつてことだつた。

玄関で清坂先輩ともうひとりの一年女子に待ち構えられていた時はさすがに驚いた。だいぶ肩につくくらいの長さで、いつもこめかみにきらきら光るピン止めをつけている。まさか立村がそういうのをプレゼントするほど甲斐性持ちとは思えない。清坂先輩の趣味だろ。側でポケットに手を突っ込んでいるちびっこい女子は、耳もとでそいだ感じのショートカットだった。見た目、女子バレー部にいそくなタイプだと思った。好みのタイプではない。

「新井林くん、ちょっといい？」

「なんですか。おはようございます」

清坂先輩の表情にはからからした笑顔が張り付いていた。何か隠しているのだけれども、それを悟られてはまずいというような。もともと健吾は清坂先輩が嫌いではない。立村を捨てて健吾に告白、なんてパターンを一瞬想像してしまった。

「あのね、ちょっとと聞いたかつたんだけど、昨日、一年B組の帰りの会で、何かあつたか教えてほしいなって思ったの」

可愛い。素直にそう思つ。

はるみが健吾の最頂点に位置してなければアクションを起こしていただろう。立村から奪い取つていた可能性ありだ。

「ちょっとあんた聞いてるの？」

反対のきいきいした声で突つ込んでくる女子。よく見かける。清坂先輩とは仲のいい友だちらしい。立村ともよく馬鹿ネタをましあつているのを聞いたことがある。失礼な言い草だった。

「帰りの会は帰りの会だつたけど」

「その時、また杉本さんのことと一緒に着あつたんでしょう？」

ははあ、そのことか。

ようやく話が繋がつた。

「清坂先輩知つてるだろ。俺があの女徹底して嫌つてること」「人間それ好みがあるもん、いいよそんなこと。けど、桧山先生が何か変なこと言つたんだって？ 杉本さんのことじやなくて、

「桧山先生が何言つたかだけ知りたいの」

玄関ロビーの柱にもたれ、健吾は簡単に説明することにした。どうせあの女がつつかかっているだけのことだ。たいしたことじゃない。気持ちよく桧山先生があしらってくれたのだからどうでもいい。「たいしたことじやねえ。あの女が何を考えたか、いきなり立ち上がりつて本を叩きつけたんだ

「本?」

題名まではわからない。ただ杉本が抑揚のない口調で人差し指を差しながら、

「私の母にこの本を渡して読めと言つたのは何か理由でもあるのですか?」

と攻め立てた。健吾の命令で何も手を出さない代わり、せせら笑いが聞こえた。

「君も読んだかな。自分を自覚するためにはきちんと原因を把握するべきなんだよ。お母さんも納得してくれたからな」

さすが桧山先生。負けない勝負の持ち主だ。容赦しない。偉い。

「しかし、全く根拠の無いことをこのよくな本でもつてあらわにするのはおかしいのではないでしようか。これを読めば私が頭のおかしい人間であると思うのも無理ないでしょ?」

頭のおかしいどうのこうの、とこうとこうでざわめきたつたのは覚えている。大共感していたのは男子と、一部の女子。後ろの方で頷いている女子たちがいたが、怖い不良女の花森ににらまれたので黙つていた。

「君には読解力がないのかな。この本にはね、自分の言動を自覚できない子どもたちの原因と対策が述べられているんだよ。杉本さん。どうすれば自分のしていることを客観的に見ることができるかどうか、それを学ぶためにお母さんと話し合つてほしいと思つたからなんだ。いい本だよ」

「そういう根拠がどこにありますか。さらに、母が言つてましたが

次の言葉はたぶん杉本の大げさな表現だろう。「頭おかしいってほんのことだろ」とささやく奴の声もひとりふたりではない。女子たちも顔を見合わせ唇をゆがませている。

「私を精神病院に連れて行けと言つたそうではないですか」爆笑の渦になつたのは、みなが納得しているからだろう。よく言つたとつぶやく奴もいた。でも桧山先生だつて一応は教師だ。そんな失礼極まりないことを言わないだろう。当然、桧山先生は冷静に対処していた。

「精神病院という言い方はふさわしくない。厳密には精神科・神経科と言つ。きちんと勉強してから文句をつけに来なさい。俺がお母さんに言つたことは、この本をふたりでじっくりと読んで、どういう風にすればお互いクラスに迷惑をかけないで人間関係を作ることができるかを勉強してほしい、もしわからないようだつたら詳しく説明してもらえる機関があるから相談してみたほうがいい、自分で理解できないことだからご両親と相談するべきだつてことくらいだ。君にはその辺も理解できないみたいだね。残念だよ」

「そういうことを平気でよく、親に向かつていえるものですね。言いい方を変えれば私が狂つてているといわんばかりですが」

「精神科や神経科に偏見を持つてはいけない。社会的偏見で精神科を失礼な言い方で罵る人がいるらしいが、それは間違いだ。君の方があきらかに偏見を持っているね。君の大好きなあの先輩も、それなりのところに通院していることを教えてもらわなかつたのかな。それで少しずつこの学校でやつていけるように努力していることを知らなかつたのかな」

たぶん立村のことだらうな。

健吾も精神病院という言葉に反応したひとりだつた。深いこと考えずに悪口の一つとして使つてきたからだつた。でも素直に桧山先生の言葉に頷いた。これからは「おかしいぞ、精神病院行け」と悪口言つのはやめよう。そのくらいの反省である。

「よくわかりました。そういうことですね。よくわかりました」動搖したのか数秒息を止めた後、杉本は皮肉っぽく終わらせた。

「そうかあ、やつぱりね」

清坂先輩はひととおり健吾の話を聞いて納得顔に頷いた。

「個人名は出さなかつたのね」

「けど、あの女が大好きな先輩つたら、ひとりしかいねえし」

「真向かいで派手にくしゃみをするちびっこい先輩。別に精神科とか神経科とかそういう話はどうでもいいけど、なんでもそういう言い方、するかねえ。杉本さんを知つてゐる人はすぐに立派のことだつて氣付くよね。ね、美里、あんた立村がそういうところつて知つてたの？」

「そんなのどうでもいいでしょ」

「否定しないところみると、ある程度は事実らしい。別にねえ、あいつも隠さなくたつていいのにねえ。あ、でもそつか。桧山先生が知つてゐるくらいだからうちの菱本先生も余裕で氣付いてるつてことよね」

「やめなよこずえ」

たしなめるようにして清坂先輩はもつといちど、健吾に両手を合わせた。

「ごめんね、ありがと。やはりこいつことつて、評議の新井林くんに聞くに限るね。ちゃんと公平な目で見てくれるんだもん。あ、そうそう。いつも見にいつてるよ。『週刊青鴻大学附属スポーツ』あれいいよねえ。私も応援してゐるからね！」

恐るべし。次期評議委員長の彼女にまでお墨付きをいただいてしまつた。

「は、はあ、ありがと『さこ』ます」

情けないことだが呆けてしまつた。一階の階段を上がつていくふたりが

「だから、あいつには前科があるからうちらが動いたほうがいいの

よ

「そんな前科だなんて言わないでよ！　「じゃあつたらー。」
大声で話をしているのを聞くともなしに聞いていた。

関係ないことが関係あると気がつくには、まだ寒気を吸い込む必要がある。健吾が練習を終えて体育館を出たとたん、いきなり一年の先輩に腕を掴まれた。

「おい、大変だぞ、新井林」

三年の先輩だ。もちろんしごかれもなにもしない、いい関係の人だ。

「なにっすか」

「今な、職員会議が延々と行われててな、お前の担任が吊るし上げられてるんだ」

「担任つて、桧山さんっすか」

「四時からいままでずっと怒鳴り合いが続いてるんだぜ。まだいるぜ」

担任の吊るし上げは小学校時代にも経験すみだ。健吾はいつも先生を守る側だつた。今回もそうなるのだろうか。正々堂々と男子たちの言い分を認めてくれた桧山先生がなぜ、そういうことになつているんだろう？　この先生、嫌いじゃない。

「わかりました。どこでやつてるっすか」

「三階の会議室だ」

もう真っ暗闇。非常口の赤いランプだけが目立つ程度。健吾はバスケシユーズのまま階段を駆け上がつた。猫目で、黒い中でも足を踏み外さずにするんだ。

会議室の前では、別の一B組連中がたむろつていた。たぶん職員会議の異様な雰囲気をかぎつけたのだろう。全員、男子だつた。図書局、放送局、その他運動部で居残つていた連中だつた。中には他の連中もいないわけではなかつたが。

「健吾、来たか」

「何やつてるんだよ」

図書局員の肩を引っつかんで状況を説明させた。扉から聞こえてくる声が丸きこえだ。生徒がこれだけ集まつてくるのだから相当なものなのだろう。

「桧山先生が他の先生にすぐえ怒鳴られてる」

「つるされてるつてのはわかつてる。原因はなんだよ」

「この前、杉本のことで桧山先生が何か言つただろ。精神病院に行けつて」

「当然のことだろ？ それがどうした」

微妙に二コアンスが異なるが、面倒なのでそのままにしておいた。「菱本先生がいきなりわめき出して、桧山先生も怒鳴り返して、二時間修羅場だぜ」

「なんで菱本先生が？」

ひとりだけの意見では要領を得ないので、もうひとり助つ人を頼んだ。C組の同じく図書局員。健吾が知つたのは以下の事実である。

菱本先生は一年D組の担任である。一年D組とは知る人ぞ知る、次期評議委員長立村上総を擁したクラスである。実際このクラスは学校全体でもかなりまとまりのある運営をされていると聞く。個人的に「清坂先輩のおかげだろ」というつっこみはまず飲み込む。たまたま菱本先生は、一年B組において杉本梨南の激しい抗議とそれに対する桧山先生の返答を耳にしたらしい。どういうルートかはわからない。なんで帰りの会の情報を上の階にいる菱本先生が仕入れたのかは謎中の謎だ。

桧山先生は別に悪いことをしたわけはない、堂々と開き直つたという。当然だ。

しかし、菱本先生は杉本の悪行二昧をさておいて、別の言葉でつこんできたという。

「なんだよその別つて」

「ほら、あのや。有名な話だけどな。一〇の立村先輩のこと」

「ああ、あの馬鹿男か」

「あの人、大学の語学授業を受けてもいってお墨付き受けてるだろ。すげえ語学できるからって。でもその裏には別の理由があつたんだつて。もともと数学の頭がないから、それを補充するために別の授業を受けてもらつて中学の単位をそろえようとかなんとか」

「なんことできるのか？」

「だから、頭がふつうとは違うんだつてことを、病院で診断書書いてもらつて証明してもらつてとかなんとか言つてたぜ」

そういうことか。

「桧山先生の言つたことがやつと飲み込めてきた。繫がりも。「けど、それはトップシークレットだつたんだつてさ。でも桧山先生がたまたま帰りの会でそれっぽいことをちらつと言つてしまつたことが原因で、菱本先生がとさかに血を昇らせたつてことだ」

別に、何も言つてねえよなあ。

確かに杉本を知つてゐる奴だつたら「杉本の大好きな先輩」イコール二〇の立村上総につなげることが難しいことではないだろう。第一九九もろくにいえないまま青大附属に入学してしまつたあいつの自業自得なのだ。それなりの努力をしない限りこの学校ではつていけなかつただろう。病院、行つたかも知れない。精神科か神経科か、そこに通つていたかも知れない。けどそれがそんなに恥ずかしいことなんだろうか。それとも評議委員長として君臨する以上、頭の働かない事実を隠しておきたいのだろうか？ たぶんそうだろう。そういう男だ、あいつは。頭が悪いことそのものの事実が決して恥ずかしくもなんともないことだから、桧山先生は堂々と口にしたに過ぎない。隠しておかなくてはならないように、菱本先生も気遣つっていたのだろうか？ 健吾の知つてゐる菱本先生とは、やたらと熱血で情熱的。スペインでフラメンコのギター弾いている方がいいんじゃないかと思うタイプである。何がどう勘違いしてそういう話になつてしまつたのだろう。

校長、教頭、他の教師たちが憔悴しきつた状態で肩を落として現われた。後半の会話はほとんど聞き取れず、健吾も他の連中から話を聞くのが精一杯だつた。

六時十五分まで待つた。

会議室の扉が開いた。

「桧山先生、なにがあつたんだよ」

駆け寄つた。目が赤い。泣いていたのだろうか。男が涙を流すのはよつぽどの時でないとありえない。一年B組の野郎どもも桧山先生に張り付いていた。菱本先生が脣を結んだまままっすぐ通り過ぎたのだけを闇の向こうに感じた。

桧山先生ははつとした顔で、健吾たちを見下ろした。

「お前ら、ここにいたのか」

「先生、間違つたこと言つてねえよな。何も悪いことしてねえよな。正々堂々としてただけだよな」

「ずっと聞いてたのか」

「当たり前だろ、先生。あの馬鹿女の親にまた何かねじ込まれたのか？ あの女にまた文句言われたのか？」

桧山先生は答えなかつた。図書局の奴の頭を軽く撫でた。健吾の肩を叩いた。作り笑いとすぐわかる、頬のゆがみ。翳つていた。

「早く、帰れよ。風邪引くぞ」

肩を落としたまま桧山先生は階段に吸い込まれていつた。追いかけることもできなかつた。目が闇になれた健吾も、息がつまりそうだつた。

なんでそこまで突つ込まれる必要があるのでう？

夜十時。親の眼を盗んで受話器を取つた。はるみへ言葉を届けるために。

「健吾、夜遅かったのね」

待つていることがわかる。ささやきだ。ビニカをくすぐる。でも

今はめつこめない。慌てて今日の出来事についてしゃべつづけた。

「どうこいつ」と？

「だからなあ。なんでだよ。あの女だぜ。自分が狂ってるかもしけないってばにくって、結局はまた菱本先生に告げ口して、親を利用してつぶそつてたぐらんでいるんだ。菊乃先生の時とおんなじだ」一通り話を聞いてくれた後、はるみはわざやき声で息のこもった事実を告げた。

「違うわ。健吾。私知ってるの」

「なんだよ」

「梨南ちゃんのお母さんは桧山先生に恨みなんて持つてないわ。菊乃先生と違うの。だつて」

体の中に霜が立つた。

「だつて、梨南ちゃんのお母さん、昨日ひびき来てお菓子持つてきたの。うちのお母さんと私について」

「それがなんだよ。つきかえさねなかつたのかよ」

『『うちの娘は生まれつき病んでいるのだと初めて気付きました。はるみちゃんにこんなご迷惑をおかけしていたなんて』』って土下座して謝ったの。本当に玄関先で

「土下座だと？」

鼻をつんと突き上げたような、どこぞの金持ちを氣取つた態度。見るからにあの女の親という感じだつたことを覚えてこむ。

「やう。この寒いのに、正座して」

「でお前の母さん、けりいれて追い返したのかよ」

「つんそんなこと、お母さんも私もしない。お母さん言つたの。

『「はるみはもともと、梨南ちゃんがそういうお子さんだということを知つてお付き合いしてきましたから安心してくださいな。そつこつお子さんだとわかつていたから、腹も立ちませんわ』』って

嗚呼、我がいとしのはるみ。

健吾が万歳三唱したくなつたのはこの瞬間だつた。

親が土下座して頭を下げるなんてことをするくらいだ。桧山先生が何を言つたかは杉本の言葉を辿るしかないが、そうとうきついことだつたに違いない。さらにあの本の内容にもよる。杉本は自分が狂つていると決め付けられたと言い放つたが、家族からしたら図星のものだつたんではないだろうか。

健吾は自分が「ごくごく普通だ」と思つてゐる。普通の人間が感じるものを感じて怒り喜び泣いているだけだと思つてゐる。しかし杉本はその「ふつう」たる概念が全く理解できないらしい。

どの先生も杉本を「おかしい」とは言わなかつた。おかしいものはおかしい、狂つているものは狂つてゐる、異常なものは異常、ごくふつうにそう言つことが許されないと思つていたらしい。だから健吾ははるみを守るために鬼にならざるを得なかつた。大嫌いなやり方だけ、寄せられた想いをどきつゝつき返すやり方しか選べなかつた。

でも、桧山先生はついに一角をつぶすことができたというわけだ。「ごく「普通」の感じ方を「正義」だと。

従わないことは「異常」だと。

杉本梨南の存在は「異常」であることを。

もしこの世界に杉本が存在していいとするならば、俺たちの「普通」に土下座して初めて許されるつてことだよな。桧山先生。「じぐじくあたりまえのことを言い放ち、土下座させるだけのことに、七年もかかるとは。受話器を置いた後、健吾は母から甘酒を要求した。乾杯したかつた。

あれから一週間近く経つ。

桧山先生はしばらく学校にこなくなつた。

「体調を崩されて休んでいらっしゃる」とのことだつた。本当かどうかわからない。また臨時の先生たちが交代で教室をうろつくようになつた。ただ担任を外されているわけではないので、三人目の

先生登場はないよつすだつた。ある程度の噂は広まつてゐるけれども杉本が怖くて誰も口にしないようだつた。あえて健吾も聞かれる時以外、無言を保つた。

「健吾が信じてゐるなら、きっと桧山先生は帰つてくるよな
男子たちの動搖も収まつた。大丈夫。正しいことをした人間が裁
かれるわけがない。と。

評議委員の義務として健吾は桧山先生へ電話をかけることにした。クラスの仕切りは健吾の担当で、杉本には一切手を触れさせない。桧山先生へのホットラインは健吾の言葉のみでないと受け付けないだろう。

「先生、大丈夫かよ」
「新井林か、ありがとうな」

自宅からかけるので、思う存分本音を聞かせてほしかつた。

「あんとき、お前たちが並んでいるのを見た時は、嬉しかつた。たつた三ヶ月しか担任じやなかつたのにな。ごめんな」

「まだ担任じやねえかよ。溝口先生の復活がなされたらともかく、今は桧山先生の一Bじやねえかよ」

男としての規律、完璧な男の勝負ができる奴。たつたひとりだけだ。

「本當になあ。お前たちには本當に世話になつたよな。新井林、お前といつか、ふたりで酒が飲みたいな」

「今からでもいいじやねえか。未成年アルコールやばかつたら、甘酒つて手もあるぜ」

「ありがとよ。つたく、十歳も離れた相手に慰められるなんて先生として失格だ」

お互い様だぜ。

しけつた話ばかりするのもなんなので、健吾はクラスの様子を簡単に説明した後、付け加えた。

「けど、先生のお蔭でいいこともそれなりにあるんだぜ。あの女の

「健吾が信じてゐるなら、きっと桧山先生は帰つてくるよな
男子たちの動搖も収まつた。大丈夫。正しいことをした人間が裁
かれるわけがない。と。

」と/or「

「ひどい田にあつたよ。やはりお前らが苦しむのがよくわかった」曖昧だけれども、相当絞られたということが云はれてくる。「愁傷様だ。

「おとといあたりからな、小学校時代の連中のつてこ、あの女の親がさ、食い物もって土下座して回つてゐんだぜ」

「土下座？」

声が変わつた。健吾としてはためらうことなくビールを一本電話線通して流してやりたいところである。親たちからも聞かされる。近所で物笑いにされて居ることも氣付かずにして居るのかあの女の家族は。

「あの女が『生まれつき』狂つているのは親のせいです。申しわけござりませんつて。デパートで売つてるすぐえうまいクッキー置いて帰つてくらしいんだ。けど安易だろ。謝つて許されるんだつたら警察いらねえよな。さまあみろつてほとんどのうちは玄関越しに追い返すらしいんだ。でしかたなく食いものだけ置いてく。いなくなつたところでそれをもらつてくと。食べ物には罪がないから全部平らげると。そういうわけだ」

「おい、新井林、それはちょっと

「大丈夫だつて、先生」

慌てた様子の桧山先生。そりやあ驚くだろう。健吾もはるみから最初聞かされた時は耳を疑つた。てつきりはるみの家だけかと思っていた。しかし、六年の時同じクラスだつた連中の家、かつて猫事件で追い出した家まで回つているということまで知つて、かなり絶句したもんだつた。ある家では「ちょっと待つてくださいね」と台所へ戻り、調味料入れから食塩を頭からずぼつとかけて追い出してやつたという。おとといいきやあがれ、である。

もともと無視をかまされている杉本梨南の家だ。馬鹿娘の弱みをさらけ出しちゃった以上、田の恨み容赦はしない。償いは、当然してもらわなくてはならない。卒業クラスの親たちはみな、意

見を一致させたという。妙に団結力のあるクラスである。

「親でやられたことは親でやり返したつていいじゃねえか。ま、あの女はぜんぜん傷ついた顔もしてねえし、親に土下座させていることにも罪悪感感じてねえみたいだぜ。そんなのは『生まれつき』感じないみたいだから仕方ねえよな。俺は無視するだけだ。けどな、もし桧山先生がまたあの女がらみで学校辞めさせられるなんてことになつたら安心しろよ。俺たちが親を使ってたつぱりし返してやるからな。先生はちつとも悪いことしてねえよ。普通の奴が普通なんだつてことを、ちゃんと言つただけなんだからな。おかしい奴はおかしい奴同士、見えないとこりで勝手にくすぐつてることを言つただけなんだからな」

「ありがとうな」

短く答えが聞こえた。ぐぐもつていた。動かない声。まるで試合に自分のシユートミスで負けて、周りから責めの視線を受けている時と同じものだった。

杉本梨南は一切、感情を動かさなかつた。

背を伸ばし、髪の毛を一切乱さず、授業を受けていた。はるみも健吾も杉本の親が土下座している事實を一切口にしていない。しかし、噂はあつという間に広まつたらしい。クラスの女子たちが杉本のいなくなつた後に「ねえねえ知つてる?」と情報交換しているとこを見かけた。他クラスでも似たようなものだろう。だからといつてはるみにすぐ話し掛けるような奴はいなかつた。まだ曖昧な情報だからへたに杉本を敵に回したらまずいと思つてゐるのだろう。健吾の聞く限り、すべて正しい話なのにだ。素直にこりう情報は信じろよ、そうつこみたかつた。

しかし、杉本も相当厚い面の皮だ。仮にも親が謝つて歩いていることを知らないわけはないだろう。健吾だつたらとてもだが正氣ではない。泣くか謝るか、それとも本当に土下座するか、そのどちらかをしてほしいもんだと思う。許す気なんてさらさらないけ

れども、この教室で女子たちからの支持をすっぱり失ってくれれば、はるみが楽になる。はるみの笑顔が教室でも出てくるようになれば、健吾は満足だ。あとは勝手にいじめられっ子グループとつるんでいじけてもらえばいい。ふつうの感情を持つて生きている人々の迷惑にならないように。そう、いわば記念写真に載り損ねた、角に貼り付けられた顔写真のような存在としておさまっていればいいのだ。

俺は、あの女が眼中に入らなければ、それ以上のことは望まねえよ。

ふと思い出した。

あの女の親、菊乃先生のところにもざんげにいったのかな。

その7 黙らせる理由

巷ではかなり大げさな情報が流れているきらいがなきにしもあるず。杉本梨南の家庭が崩壊寸前らしいとのことだつた。健吾の知る限り、同情する声はほとんど聞こえてこない。誰も犯罪を犯したわけではなく、ただ「当然」の行為をしているにすぎない。近所の戸端会議でも、せせら笑いと一緒に語られているらしい。

もちろん詳しい状況は健吾の知る限りではない。なんで杉本の母親がクツキーの詰め合わせを持つて謝つているのか、理由もまちまちだつた。桧山先生が杉本の親に対して「精神病院に行つた方がいいのではないか」という発言をしたらしいということ。そして親が素直に納得して……たぶんあの本に書いてあるのがそうだつたんだろう……娘の身代わりに泥を被りにでかけていった。そう考える方が自然だつた。

「やはりね、頭のおかしい子だつてみんな話してたものねえ。学校の成績がよいかからといつて、ねえ」

要するに杉本梨南は「学校の成績では図れないおかしい部分を持つて生まれた子ども」だということが証明されただけのことだ。健吾たちが無意識のうちに嗅ぎ取つていたことを、ようやく親たちも桧山先生のおかげで証明され、堂々と罵る資格を得た。それだけのことだ。

嬉々として電話で杉本一家の悪口をしゃべりまくる母を横目に、健吾はあらためて誓つた。

俺は母ちゃんみたいに、相手の弱みを握つたからつていつて、もう一度とそれを武器になんてするもんか。俺は正々堂々と勝負してつぶすんだ。

もう一度と、したくない。

はるみに誓つて、汚い奴にはなりたくない。

杉本梨南のように大人を利用する奴は、結局大人たちによつてしま

つべ返しを食う。

俺はあの女と同じレベルなんかにはなりたくない、それだけだ。

青大附属が健吾たちの小学校学区に近いこともあり、すでに学校にも噂は流れていた。噂というよりも、眞実そのものだ。薄まつていい事実だつた。

「一年の杉本さんの親は、小学校時代、担任を変えるよう教育委員会に持ちかけたらしく」

「でもそれで顰蹙かつて村八分なんだつて」

「しかもさ、桧山先生に精神病院行けつて言われたらしくよ。当然だよな」

噂は眉唾物というのがお約束だがぴたりと言ひ当つてている。

当然だよな。ざまあみろだ。

心で毒づくものの、健吾としては汚いことをしてしまつた気持ちが残つてゐる。

あの女と同類なんじやないかといふ気持ちがしないでもない。うざつたい。

まあ、とにかく、桧山先生が戻つてくるまでつてどいか。

相変わらずクラスの野郎連中には、杉本を無視する以外の報復を行わないよう申し合わせてある。全く顔色を変えずに教室で同じ空気を吸い、休み時間も不良女の花森なつめとふたりで語り合つてゐる様子。少しずつだが一年B組の女子たちも、遠巻きに眺める気配ありだつた。健吾の方にだんだん風が向いてきているのもまた確かなこと。あとははるみにもう少し、居心地のいい場所ができるといいのだが。

桧山先生の代行は、まだ決まっていないらしい。一週間が経つ。十一月も終りに近づく。

もやつて気持ちを切り替えるため、健吾は毎日体育館でシュート

練習に打ち込んだ。なんとしても、「週刊青大附属スポーツ新聞」を軌道に乗せねば。少しでも、委員会を中心体制から部活動最優先主義への変革を掲げねば。

給食のコッペパンをかじりながら健吾は体育館に向かつた。教室のストーブにあたりながら縮こまつているよりもバスケットボールを追つかけている方が気もせいせいする。すでに一年の連中が固まつてじやれついているけれども、知り合いの先輩が混じつている時は健吾もチームに入れてもらつたりする。運がよければ、だが。

十一月の下旬になると、今度は期末テストの準備で忙しくなる。そのくせ一年生評議連中は、冬休みに製作する予定の演劇ビデオ「奇岩城」準備で忙しいらしく、図書室でたむろつていることが多い。仲のよろしいことだ。立村次期委員長の命で、今回は一年生オオリーの作品にするらしい。一年生としては楽だ。肉体労働でこき使われる程度だろう。そのくらいだったら義務として手伝おうとも思うが、恥ずかしい演技をさせられるのだけはごめんだった。一学期の全校集会でもう懲りた。

率いるのが立村次期評議委員長だ。杉本をおだてて何か手伝わせる可能性もある。また付き合わされるのもたまたもんじゃない。

「新井林、ちょっとといいか」

呼び止められるのは体育館に入る前が一番多かった。

新井林健吾捕獲にはもつとも適した場所だと思われているのだろう。

声の主が主だったので無視して敷居をまたぐと、声も一緒に追いかけてきた。

「悪い、少しだけつきあつてくれないか

しゃあねえなあ、馬鹿男が。

肩をすくめながら健吾は振り返った。予想通り、ネクタイとブレザーを隙なくきつちりと身に付けた立村上総が立っていた。片手を

ズボンのポケットにつつこんでいる。体育館の中ではすでに、一年生連中がバスケットボールと共に燃えていた。

次期評議委員長様はお仲間と混じるつもりがなさそうだった。無視しようとする健吾の後ろを一歩ほど離れてついてきた。バスケのコート真っ正面に向かつて、壁にもたれた。奴も真似しやがった。

手が冷たい。軽く息を吐きかけた。

「なんか用かよ」

「うん、少しだけ、時間もらえるか」

「話したいことがあるならさっさとしゃべれよ。俺だって忙しいんだ」
「こいつにこつては一切先輩と崇めるつもりなし。当然敬語も使わない。他の一年生には、男女問わず一応は、ですます体を使つけれども、立村に對してはそんな白々しいことをしたくなかった。

腰の低い立村は怒らなかつた。かすかに微笑みすら浮かべている。素直な口調で、

「あの、この前のことなんだけれど」

「いきなり切り出した。

「あれそれこれどれなんて使うんじゃねえよ。女々しいぜ」
鼻を思いつきりすすつた。たんが出そつた。風邪引いている。

「あの、桧山先生のことなんだけれど」

「なんでてめえなんぞが一年B組の問題題に顔出すんだよ。関係ねえだろ」

給食で食つたカレーランドを吐きそつた。立村、こいつがいなければ、桧山先生も自宅謹慎みたいなことにはならないですんだのだ。こいつが不需要に杉本をかばおつとしたことが、なによりも発端だろう。しかも今だに杉本からは露骨に避けられている。哀れな奴だ。

「俺もまづかつたと思つただ。あやまる。で、言つ忘れてたんだけどさ」

「あの女にあやまれつてか。冗談じゃねえぜ。てめえもそのくらいのことはわかるだろ」

「あやまれなんて言わない。新井林、お前の言いたいことは、俺もよくわかるつもりなんだ。だから、その点については杉本が悪いと思つんだ」

扉脇の木目にもたれて、健吾はけつとつぶやいた。

「この男、だから優柔不断だつていうんだ。」

隣りあい、健吾に寄り添おうとするのを払いのけたかった。なで肩で髪の毛もじこじのぼつちゃん風だ。目がどうしていつもきょときょとしているんだろう。まるで猫だ。

「あのなあ、俺は別にあんたが杉本をかばいたいのを止めやしねえよ。ただな、なんで俺にそもそも無理やりかまつてくるんだ?」

「かばうつてわけじやないんだ。頼む、聞いてくれ」

言葉と同時に、ショートミスでボールが健吾の真上を直撃した。幸い、外れた。だから一年はどへただというのだ。

「立村、入るか?」

声をかけたのは羽飛先輩だ。

さつさと行つちまえ、と健吾としては言いたい。

立村は片手でいやいやをして、拾つたボールを投げ入れていて。しつこく健吾に付きまといたいらしい。やつぱりこいつ、「木戸説」誰でもオッケーって奴じやないだろうか。別の意味でちょっと怖くなつた。健吾にはその気がない。顎を下げて見下した。

一応上級生でありながら、自分の鼻くらいのところまでしか背がないのは中学一年の男子として、かなり不利だらう。

「じゃあなんか俺に用あるのかよ」

「例の、そのことなんだ。ちょっと外出ないか」

立村はもう一方の手もブレザーのポケットに突つ込み健吾の前を横切つた。軽く肩を上げて、誘つように。態度だけは先輩面している。体育館を出て、外で話したい、そう言いたいのだらう。右反対側のグラウンドへ続く出入口へと足を向けた。

中靴のまま、健吾は立村の後ろをついていくしかなかつた。

体育館真向かい青銅色の扉はグラウンドに繋がつていて。指先で

掛け金をはずし、立村は振り返った。横顔が異様に白かった。

気持ち悪い顔だぜ。つたく男か女かわからねえよな。

杉本に似た表情だった。

雪虫が飛び交っていた。今年一番の寒さだった。紫色の田がついた白い綿がまとわりついている。雪虫というけれど単なるアブラムシの一種だと聞いたことがある。健吾は払いのけながら、唇を尖らせた。

「寒いから早くしろよな」

「ああ、わかつてる」

「コンクリートの踏み台に、立村は田を落とし、健吾に領いてみせた。よくわからないことをする男だ。

「このは邪魔して悪かった」

「だからなんであんた謝るんだよ。あんたには関係ねえだろ

関係なくないか。

桧山先生をどつぼに落としたのは、こいつのネタがきっかけだったのだから。田の前にふるふると雪虫が落ちてくるのを払いのけながら健吾は見据えた。

話をするのも恐る恐る、健吾を怒らせないようじこと様子を伺うまぬけ面。

「桧山先生のこととは別として、新井林、佐賀さんと、杉本との間に何が起きたのかはだいたい調べてわかつている。お前を責める気はない。頼みたいことがあるだけなんだ」

「頼みたい？ やつぱりあの女を許せつてか

ゆるく、首を振った。

「違う。お前が杉本を許せないのは当然だ」

「フ」イントかけられた。びくっと退いている自分がいた。

この男何考えてるんだ？

健吾はしばらくまじまじと立村の田にらみつけてみた。田をそらさなかつたのが意外だった。立村がゆっくりと呼吸を整えながら

言葉を続けた。

「杉本は決して悪意があつたわけじゃないと思う。でも受け取る側としてはむかついて当然のことをされたんだから、嫌つて当然だと俺は思う。許せだなんてことは、絶対に言わないよ」

片方の耳でボールが跳ねる音を、片方の耳で風の吹き付ける音を聴く。

立村の声が、冷たい空氣の中びんと響いた。

「新井林、いつたい杉本がどうすればお前たちの迷惑にならないかそれを教えてほしいんだ」「はあ？ 迷惑にならないか、だと？」

言つてゐる意味がわからず聴き返した。読めない。

「杉本をできるだけお前たちの迷惑にならないようにするよう説得してみるつもりなんだ。必ずしも頷いてくれるとは思わないけれど。けど、お前や佐賀さんや、一年B組の連中をこれ以上傷つけない方法を、なんとか探したいて思つてゐる。一番公正な目で見られる新井林、お前の意見を聞きたいんだ。許せないのにあえて、杉本をいじめさせないよつて命令している、お前ならきっとわかつてくれると思つたんだ」

脣をぎゅっとかみ締めながら。いつのまにか立村はポケットから両手を出して軽く握り締めていた。

田の前で鼻くそをほじつて投げつけてやりたい気持ちだつた。健吾は黙つて立村の言葉を聞いていた。妙に持ち上げる態度が気味悪い。ずっと評議委員会では健吾を冷たい目で見据えて、あえて無視するような態度をとつていたくなせにだ。

先日の杉本VS桧山先生、新井林健吾の対決でもそうだった。

ずっと立村はそれぞの顔を覗き込んでおろおろしていたくなせに、いきなり立ち上がりつて言つた言葉がふざけていく。なあにが「もう、勝負はついているだらう」だ。

だからてめえはついてるかついてないかわかんないオカマ野

郎つていうんだよ。

健吾の目が腐つてなければ、立村は杉本梨南と清坂先輩のふたりを両天秤したくてならないのが見え見えだ。次期評議委員長としての自分を守るために清坂先輩におべつかを使い、男としての本能を丸出しにして杉本のホルスタイン的な胸を触ろうとする。周りの口さがない噂を封じるため、ありとあらゆる手段を使ってみなのご機嫌を取ろうとする。健吾だけだ。騙されてないのは。「ひたむきで一生懸命で、纖細で」誉め言葉を隠れ蓑にして、小学校時代からなる腐った性格を隠そうとしているわけだ。

本当はいじめられたことを口にも出せず、汚い手で相手を突き落とし、しつこく女子を追い掛け回し、自分のことばかり守ろうとしてござとなつたら本当に好きな相手の杉本を守ろうという顔をして、健吾にまとわりつこうとしている。

いや、もうひとつ。気になることがある。

健吾は片足を軸にして、立村の方へ斜に向いた。威圧する時に、よく使う格好だ。

「俺の方からも聞きたいんだが、なんで菱本先生があんたの頭のどうたらこうたらで、うちの担任を怒鳴り散らしたんだ？ その日な、清坂先輩が俺にその話を聞きに来たんだけど、それってめえの魂胆か？」

立村がうつむいた。答えに窮している。当たり前だ。嘘じやない証拠だ。

「杉本と桧山先生のバトル中、たまたま出てきたぜ。確かに。杉本の大好きな先輩も精神病院かどつかに通つてるとかなんとかな。話を聞いてりやあ、そりやあ誰のことは想像つくだろうな。うちのクラスのアホどもがどこまで気がついたか知らねえが。けどな、桧山先生こうも言つてたんだぞ。精神科とか神経科とか、そういうところに通つことで人を馬鹿にすることはいけないってな。悪いがあんたが想像しているほど人を馬鹿にしたネタなんかじゃない。あの女のことは別として、何もあんたがびくびくして秘密ばらされたって焦ることねえじやねえか」

さらにうつむいたまま動かない。身を守りつとすると、大抵おとなしい野郎は身体を石にして凍りつくもの。でもそういうのは言葉のハンマーでぶち壊せば一発だとこう」とも、健吾は経験上知っている。

「しつこいようだが、あんたがそういう病院に通つているかどうかなんて関係ねえよ。俺の友だちだってたくさん、頭の悪い奴とか、ちょっとねじが緩んでるとか、そういう奴一杯いる。人間性をそんなことで貶すような、くそな人間じゃねえ。ただ、本当のことをばらされてあせつて、彼女を利用して桧山先生をぶつぶつとした、その魂胆が許せねえんだ。ほおら、嘘だつたら言い返してみる。けつ、てめえなんぞ、所詮杉本とおんなじ人間なんだな」

言い返されたらどうしよう、と思わないわけでもなかつた。はつたりだつたから。

でも立村は自分の身体を凍らせるようにして黙り続けていた。
結局、言い返せねえでやんの。最低男。

たぶん、健吾の推理が当たつていれば。

こいつ、杉本から例の発言について告げ口されたんだな。思いつきりネタをゆがめられた感じで聞かされて切れたんだな。そりやそうだ。次期評議委員長様が実は、そういう病院に通つているとか噂されたらやだなつて思つてるんだろう。本当は桧山先生がそういう差別しちゃなんねえぞつてこと言つたのを知らないでだ。自分の悪いところをばらされるんじゃねえかつてあせつたんだろうなあ。けど、自分で抗議する度胸もなかつたから、清坂先輩を通して菱本先生へ報告させたつてわけか。それだったら自分は被害者面してられるもんなあ。さすがだぜ。そういう悪知恵は働くぜ。周りは騙されてるに決まつてる。けどな。

健吾はつばを飛ばしてやつた。最大の侮蔑。

「よその先生や一年、三年連中は騙せたかもしけねえな。けど、俺は騙されねえからな」

一步、近づいてやつた。

「嘘じやねえんだろ。本当のことだら、嘘だつたらいいでまつかり言えるはずのこな」

ぎりぎりまで接近して覗き込む、前髪に隠れていたまなざしは静まっていた。答えが聞こえた。

「ああ、本当のことだ。微妙な違いはあるけれど、桧山先生が言ったことは本当だ」

雪虫が頭の上にフケ状の塊になり留まっている。つぶしてやりたかった。アブラムシ。

「じゃあ、なんとかしろよな。桧山先生は今、てめえと杉本の汚いやり方によつて、学校追い出されそうになつてるんだ。本当のことを行をたまたま口滑らせただけだ。あの先生くらいだ。男としてふつうのことしてるのは、それを、あんたが自分の身を守りうとして、自分にみつともないことをばらされたくないからつて言つて、自分の担任を使ってつぶそうとするんだもんな。やり方、こういうのを最低つていうんだぜ。俺より一年早く生まれてゐるくせにな、分かつてねえのかよ」

健吾は畳み掛けた。立村の瞳が伏せ田のまま揺れるのをじつかと見据えた。言い訳あるならなんでも言えばいい。正々堂々、言い訳するのだったら健吾は正面から受け止めてやる。きちんと言つて返す自信を持つていて。

「そのことについては、俺は言つ返すつもりはない」

「ふうん、認めるんだ。本当のことって認めるんだ」

「だけど、それは俺のことだけであつて、杉本とは関係ないだろ」

すうつと顔を上げ、健吾を見上げた。

「噂された通り俺は生まれつきの馬鹿だから、他の人たちと違つて指使わないと計算できないとか、九九を言つのがやつととか、そういうところがあるのもわかっている。それは認める。そういう関係で、専門の施設に通つたことがあるのも本当のことだ。だけど、それは俺自身のことであつて、杉本とは関係ないはずだ。俺について

いろいろ言われるのはもう慣れているからかまわないけれど、それと杉本を重ねるのだけはやめてくれ。杉本をこれ以上、関係ないことに巻き込むのだけはやめてくれ

「じゃあ自分でかたを付けろよ。桧山先生の言つたことが本当のことだから、意味不明の自宅謹慎処分を解いてやつてくれつて、あんたの担任使つて頼み込めよ」

「それは、もちろんする。それは俺が悪いから」

そこでまたうつむいた。なんで肝心要のところで瞳を逸らすのだろう。杉本のことに関してははじつと健吾を見つめるとこに、この差がわからない。

言いたいことあつたら、はつきり言えつていうんだ。ぶつころしてやりたいぜ。

再び田を足下に落とす立村に、だんだん健吾の咽がぶつこわれそうになる。まだ一筋、「こんな奴でも先輩なんだ」と押さえているのに耐えられない自分。片手をぐるんと回し威嚇しなおした。ふつと田を上げた立村に吐きかけてやりたかった。

「過去も同じような汚いやり方で、本品山中学の浜野さんをつぶしてきたそじやねえかよ。女を追いかけまわしたり、清坂先輩と羽飛先輩に取り入つたり、本条先輩にごますつたりつてな。あなたの噂、青大附中内に鳴り響いてるんだけど嘘と言い切れるのか、てめえは。そんな裏で手を回すようなやり方をするのは、人間として最低じゃねえか」

罵りながら、立村のこぶしが握り締められているのに気付き、一步離れた。

思つたとおり立村は、健吾に視線を向けずに、地面を見つめたまま言葉を発した。

「新井林、俺のやらかしたことについては言い訳しない。けど、これだけは言わせてくれ。なんでお前、杉本の気持ちを知つてあんなこと、言つたんだ？ あれは反則だろ」

反撃かよ。か弱い奴だぜ。

余裕を持つてかましくへり、健吾にまお茶の子をこせにだつた。

立村はまだ目を上げない。

「杉本は必死なんだ。信じられないかもしないけど、杉本はお前とふつうに必死に話をしたかっただけなんだと思うんだ。ただ、それがどうしてもうまくいかないというか、言葉が通じなかつただけなんだ。許してやれとは言わない。杉本をこれ以上追い詰めないでくれ。お前や佐賀さんに迷惑をかけないですむどんな方法でも考えるから」

「追い詰めてなんていねえよ。あの女が勝手にひょっかいかけてくるだけだ」

「わかつてゐる。その話はよくわかる。でもあのままだと杉本は自分を追い詰めてしまつかもしない。自分ではどうしようもないって気付いてないんだ。けど、きっとあとで後悔する。どうして自分でそうできなかつたのか気付いて泣くしかないんだ。そういうもんだんだ。だから」

だつたら顔上げて土下座しろよ。

同い年だつたら急所蹴り上げて悶絶させていはすだ。殴りたいのをがまんする。

「じゃあ、聞くけどな。あんた、小学校の頃にいじめられてきた奴らに同じこと言われて、許してやつてくれつて言われたら、許せるのか？」

「許せるつて、なにを」

ようやく顔を上げた。口半開きで、ふつと涙が付いたように健吾の鼻あたりに視線が留まつた。

「あんたが言つてるのはそういうことだ。情け、かけられたのがよ」

「新井林、どういうことだ」

「勝手に自分がいじめられたと思い込んで、犠牲者ずらして、結局努力もしねえでかわいそつがつてゐるなんて最低だな。男としてま

すみとめられねえよ。こつたいあんたのどこが良くて、本条先輩は評議委員長になんか指名したのか、俺には理解できねえよ」

また目を伏せる。小声でつぶやく。

「そうだな、俺も自分でそう思つ

「ふうん、認めるのかよ。俺はな、杉本の頭が生まれつきおかしかつたとしても、それはそれで人の個性だと思つ。勝手にしてろつてんだ。ただ、まともに生きている俺たちに向かつて、よけいなことをしたりするのだけはやめろつて言つてるだけだ。俺や佐賀のように普通のことをして普通に話しをしている奴に対して、異常なやり方でかみついてくるのだけはやめろつてだけだ。それぞれでめえみたいな汚い同類同士でたむろつてろつてんだ」

健吾はゆつくりとつぶやいた。

「だから杉本も必死なんだつて」

「必死ならせめて俺たちとかかわらないようにしてもらえればいいだけのことだ。だから俺はいじめもしない、他の男子たちにも手出しさせないように命令させてるつてんだ。普通の世界ではそれが常識だ。当然のことだ。本当だつたらとにかくんリンチされても仕方ないことをあの女はしているが、それでも俺たちが手を出さないのは『紳士』でありたいからだ。文句あるか。あの女がいじめている事実を桧山先生は認めてくれたしな」

「ああ、わかるよ新井林。だから佐賀さんに対することについては、俺も納得する」

「あんた、そこまで認めるならな」

健吾は怒鳴つた。口から吐き出される息で、一気に雪虫が死滅しそうだつた。

「あの女を黙らせて見ろ」

立村の口に明らかな動搖が走つた。首が不安定に揺れた。

「黙らせるつて、どういうことだ」

「色仕掛けであろうが、殴ろうがそんなの勝手にしろ。それができたら俺はお前のことを先輩として認めてやるぜ。必死にかばおうと

して、相手に振られて、それでいて自分の相手におべつかつたうな
んていい根性だよな。へこへこ頭下げている暇があつたら、あの女
を黙らせろ。どうせそんなことできるわけねえのにな」

しばらく立村は黙っていた。ぱしんとボールをドリブルする音が
足の裏から響いてきた。本当だつたら混ぜてもらいたい。へたなチ
ームでも健吾が入ると一気に動きが激しくなるところをこの男に見
せ付けてやりたい。いつも足を引っ張るのが、この立村であり杉本
なのだ。健吾のやりたいことをすべて邪魔するのが「異常」な連中
なのだ。

「わかった。新井林」

立村は頷いた。静かに横目で健吾を見つめた。

「もし、杉本が一年B組の迷惑にならないようになつたら、のこと
だが」

言葉は震えず、平常のままだつた。

「放課後、茶室の陰でお前を一発殴らせろ」

火がついたのかもしない。肩も震えず、ポケットに手をつつこ
んだまま。ピアノの鍵盤を叩いていてもおかしくない骨ばつた指。
健吾はいままでけんかで負けたことがない。大抵のすのは余裕だつ
た。背丈の差、筋肉のふくらみ、圧倒的な体力の蓄積。すべてにお
いて立村に負けるところはない。一発くらい殴られたところで、た
いしたことはあるまい。

かなりびびつていてるのではと健吾も覗き込む。

「ふうん、一発でいいのかよ。もしも条件みたしたんだったら」
立村の鼻先にゅっくりと、右の拳骨を、親指出した格好で突き出し
てみせた。

「腕力の差もあるし、俺がぶつ倒れるまで殴つてよしだ。できれば
な」

「その言葉、忘れるな」

腕時計を覗き込み、立村は唇の端をかすかに緩ませ戸口を指した。
「もう、五時間目が始まつて二十分経つている。さほるなり教室に戻るなり、勝手にし！」

やべえ、もう休み時間終わつちまつたのかよ！

体育館でばしばし音が鳴つていたのは、女子バレーの練習だつたらしい。慌てて一年の廊下へ駆け込み健吾はもう一度グラウンド戸口を振り返つた。

立村はいなかつた。

健吾の言いたい放題の言葉を、九割立村は否定しなかつた。

上級生として許しがたいであろう言葉を、すべて立村は受け入れて、飲み込んでいた。

だから健吾は思つ存分罵詈暴言を吐いた。ぶちまけた。罵つた。おびえていたのかもしぬないし、事実を突きつけられて追い詰められていたのかもしぬない。けれど、もうひとつ可能性に気が付いて、健吾の背中に氷の柱が刺さつた。

あの女を黙らせる自信、あるのかよ。あの野郎。

健吾が七年の間四苦八苦してきたことを、立村はやり遂げる自信あるのだろうか。

あの女によつてかき回されてきた一年B組を、健吾とはるみの手に取り戻し、杉本は嫌われ者の女として身体を小さくして。でもいじめは決してしない一年B組。桧山先生も戻つてきて、めでたしめでたしになつたとしたら、健吾は立村を次期評議委員長として、いや、男として認めなくてはならなくなる。たとえどんな汚いことをしてきたとしても。

かすかに漂つた立村の余裕めいた匂い。カフスに一匹張り付いていた雪虫をつぶし、健吾は頭を思いつきり振つた。言いたいことを言い放ち天敵立村上総を貶めたはずなのに、なぜか雪虫がまだ身体に引っ付いているかのようだつた。

ああ、あんたがもしあの女を黙らせる」ことができたない。俺はあんたに徹底して叩きのめされてやるや。徹底してあんたのしみになるや。あんたを男として認めてやるや。

つぶやいてみて、少し氣が楽になつた。健吾のモットーは「正々堂々、潔く」なのだから。

ははあ、あの女がいないからだ。

まだ桧山先生のお戻りはない。ただし、健吾が連絡を取り合つているところによると、一学期中には必ず復帰できそうな気配だともいつ。一週間しか経つてないのに、ずいぶん動きが芽生えてくる。

「やたら静かだよな、最近のうちのクラス」

はるみと電話で話をする時、つい本音がぽろつとこぼれてしまつ。学校では徹底して、クールに決めたい。はるみ以外のことでは一切無視の姿勢を取つていて、評議委員会も試験期間中は一切休みだ。

「そう。健吾がしてくれたんじやないの？」

「俺がか？」

あいまいに「まかしておく。はるみが健吾のことを、最近少しづつ頼つてくれていることを感じられるってやつぱり嬉しい。

「だつて、クラスに梨南ちゃんがいる」と、少なくなつたから

佐賀も気が付いてるのか。

鼻息だけで答えることにした。

「休み時間、いつも一年の女子の先輩が廊下で待つてゐるでしょ。梨南ちゃんを呼び出してどこかに連れて行くでしょ。私、心配してたのよ。もしかしたら女子にもいじめられてるんじやないかつて」「お前、あんな女の」と、気にすることねえだ。いなくなつたらラツキーだ、無視しろ」

「ううん、健吾、違うの」

誰か側にいるのだろうか。声を潜めてたやき声で。心臓が膨れ上がりそうになる。

「なんか最近、花森さんも一緒にいて、一年生の人たちと遊んでいるみたいなのよ。梨南ちゃんを中心にして、図書室でおしゃべりしてるみたい。どうしてかな」

一年の女子か。

健吾はカレンダーを確認した。立村との対決から一週間。はたして立村が何を思つて「一発殴らせろ」と捨て台詞を残したのか。かなり杉本を手なづけることに自信ありげのようだつた。

健吾が「一発殴らせてやつてもいい」場合の条件としては、

- 一 杉本梨南をクラスの邪魔にならなによつに黙らせる。
- 二 桧山先生を復帰させる。

「はそれなりに成功していようだ。はるみの言つ通り、杉本を一年生の女子たち……たぶん清坂先輩たちか……に頼み込んで、連れ出してもらつたりして、健吾たちの目に入らないようにしてほしい、つてことだらうか。」「いいか、佐賀」「なあに?」あどけない口調のはるみが電話の向こうにいる。本当はもつと早く、あの女から救い出してやりたかったのに、七年もかかつてしまつた。もう一度と、おびえた表情のはるみを見たくはない。誰よりもお姫様然としていたはるみでいてほしい。

そうしたら健吾も、ふさわしい男でありたいと思うから。

男として、逃げ隠れしない正々堂々たる人間でありたいと思うから。

「なんでもねえよ」

やつぱりうまく言葉が出なくて、じまかすことこした。ひとつの決意も込めて。

次の日はテスト答案の返却、および答え合わせが中心だつた。期末テストが終わるとだいたい授業も落ち着いてくる。公立はどちらか知らないが、青大附中の場合は高校受験対策をする必要がないので、副読本の問題集を解いたり、先生たちの特別授業を受けたりと、のんびりした時間を過ごすことが多かつた。国語の授業中、健吾は先生のひとりごとめいたおしゃべりを聞き流しつつ、杉本梨南まわ

りの動向をつかがっていた。

やつぱりそういうことか。

朝一番から妙な感じはしていた。いつもさぼりの常連たる花森なつめ嬢が一緒にくつついてくるのはいいとしても、休み時間毎回一年の女子たちが覗き込みにくる。顔ぶれはさまざまだつたけれども、中にはあの清坂先輩と連れの女子もいた。健吾も顔を知らないわけではないので軽くすれ違いざまに会釈する。全くこだわりなく笑顔で答えてくれるのは清坂先輩だけなので、健吾としてはちょっと不得をした気分になる。

「新井林くん、今度の試合、また水鳥中学と練習試合するんでしょ」「なんで知ってるつすか」

「来年ね、水鳥中学の生徒会の人、が交流で青大附属に来るらしいんだ。だからちょっと関心ありつてことよ。今度情報教えてね」「短いけれどもさらりと流す。

「俺は評議と関係ないつすから」

「そんなこと、言わないで、ね」

ちょっと長めのおかっぱ髪を今日はヘアバンドで留めている。やはり、いい。

それにしてもな、なんである男、こんな元壁な彼女を持つていながらあの女なんかに。

いつもながらの疑問を感じつつ、振り返るとはるみが微笑んでいた。ひとりで、軽く首をかしげて。

「なんだよ、何見てるんだ」

「ううん、なんでもない」

気にしてるんだつたら気にしてるって言えよ。

清坂先輩がいなくなつた後、もう少しなにかアクションがあるんではないかとはるみをもう一度伺つた。まったくなし。ひとりで本を読んでいた。

「いついう時、いつも気持ちが取り残されてあせるのが健吾だった。

休み時間中杉本がいないだけでもこんなに違うものだらうか。

健吾は靴の紐を結び直しながらシャープの芯を出したりしましたりしていた。

要は杉本がいなくなつただけで、野郎連中はもとより女子たちのからみが一切なくなつていつたというのが、驚くべきことだつた。健吾も想像してなかつたわけではない。昼休み中のバトルや罵りあい、すれ違つた時の罵詈暴言。さまざま言葉が飛び交う中、教室にいるのが苦痛になりそうな空気が漂つ。杉本がいるだけでだつた。それが一切消えていた。

誰もいじめることなく、憎むことなく、それこそ相手にすることなく。

スポーツ飲料を一気飲みした後の、すがすがしさといつんぢろつか。

杉本を相手にしてうんざりして汗をかき、その後体力を補充しようとする時の身体の働き。

「なんか今日は静かだよなあ」

ある先生の言葉が印象に残つた。大人でもわかるのだ。当然だ。

「杉本さん、最近どうしたの？ クラスにいないね」

クラスの女子たちも杉本のいないところでささやいている。一時期の「杉本さんをいじめる馬鹿男子」という意見がここにこのところ一気に減つていて。あの「土下座事件」もさることながら、杉本梨南がクラス女子にかけていた魔法が一気に解けてかぼちゃの馬車になつてしまつたつてことだろ？

杉本が教室から出て行くやいなや、健吾のすぐ脇に女子たちが固まり、

「杉本さんの噂、しつてる？ あのまあ」と、嘘のない情報を交換していた。

「一年の中ではハブにされる恐れがあるから、つて一年の先輩たちがみんなで守つうつて決めたんだつて。そうだよね、ああいうこと

あつたらねえ

「杉本さん可愛いんだけど男子から嫌われるからさ」

「そつそつ、杉本さんは女子の先輩には人気あるんだけどな」

健吾に気が付いてすぐにひそやかな声に落とす。手遅れだつて言いたい。

肝心の杉本梨南に全く変化がないのが、健吾には解せなかつた。親を土下座させて反省させたにも関わらず、本人はつらつとした顔している。

その辺の心理を理解できるのは立村ぐらいだらう。理解できる方がおかしいと健吾は思う。辛いんだつたら泣けばいい、恥ずかしいんだつたら真っ赤になればいい。反省しているんだつたらはるみに手をついて謝ればいいのだ。こちらは許す気などさらつさらないが、はるみのために精一杯努力してくれるんだつたら、一切見てみぬ振りくらいはしてやろう。しかしながらその努力すらかけらもないとなつたら。

いじめてつぶして追い出すことができれば一番楽なんだがな。あえて自分に課したルールが重かつた。はるみのためなのだ。

授業が一段落し、いつものよつに号令をかけた。全く姿かたち変わることなく、すつゝと背を伸ばし、正面だけをじつと見つめる杉本の姿がじやまつけだつた。はるみの後ろから首をしめそうな雰囲気をかもし出していた。三角の白い毛糸ストールをブレザーの上から巻きつけている姿はこつけだつた。

帰りの会は大抵他のクラスの先生を入れ替わり立ち代り担当してくれるのが常だつた。どうせたいしたこと話すわけではないのだから、健吾はすぐに体育館へダッシュできる態勢を整えた。なにせ、来週の試合は強豪水鳥中学との練習試合なのだ。

「よお、みんな、お久しぶりだな！」

聞き慣れていたけど懐かしくなりかけの声が扉開くと同時に響い

た。

「桧山先生？」

扉が開いたとたん、第一声を耳にしたとたん、誰もの手が止まつた。誰もの言葉が消えた。静寂つてこのことかもしれない。思わず立ちあがつた。

「先生、あれ、学校帰つてきたのかよ！」

健吾の叫びを合図に、男子連中が次々に立ち上がり桧山先生に走り寄つた。健吾が動いたのだから問題ないのだ、と確認するかのように。

女子たちのひそひそ話もかなりでかでかと響き渡つた。取り残された中、はるみはあどけない表情のままでいた。杉本梨南は我関せずといった風に、真っ正面の黒板をにらみつけていた。必然的にあの視線は、教壇に立つた桧山先生とかち合うことになるだろつ。

「ああ。新井林ごめんな、みんな心配かけたな」

意味ある言葉を発しない野郎連中をけん制しながらも言葉が溢れるのと押さえられない。ががつと叫びたかつた。

「今日来るつて言つてねかつたじゃねえかよ。どうしていきなりなんだよ。ちゃんと来るつてわかつてたら俺に知らせてくれたつてよかつただろ。俺、これでも一年B組の評議なんだぜ」

「ああ、評議はお前だけだつてわかつてるよ。新井林」

意味ありげに健吾に片目をつぶつて見せた。顔がゆがむのはどうしても上手にワインクができないから。でも意味はよつくわかる。男前の桧山先生は男子たちだけに笑顔を見せ、最後にちらつと女子連中へと視線を向けた。当然重なるのは、あの女に向かつてだろつ。

「明日から、一年B組に復帰するからな、みんな、ありがとうー。」

ほとんどの男子連中が教壇の上まで集まつてきて、

「せんせ、どうしてた？ 一週間大変だつたろ」

「なんかさあ、告げ口つて頭くるよなあ

杉本に当てつけるような言葉を真つ正面から口走っているのも丸聞こえだつた。そのくらいのことは健吾も大目に見ていた。自分の親が土下座していることがばれても何にも感じない杉本に、そのくらい言つても平氣だらう。

「すみません、用がないのでしたら、帰りの会、これで終りでいいですか」

冷たい声が飛んだ。思つたとおり、はるみの後ろの生靈だ。

桧山先生は前髪をかき回し、ふつと鼻の穴を膨らませて見せた。気付かないのか、かちんときた視線がぶつかりあつていた。

「君には用がないから、帰つていよ」

見事、一言のみ。

「わかりました。失礼します」

杉本梨南が立ち上がり、なめきつたまなざしでもつて桧山先生を見返した。それが合図だつた。他の女子たちが群れるように立ち上がり大きくあくびした。未練を残しているのもいくばくか。

その中でまっすぐロッカーに向かいコートを羽織り一切振り返ることなく去つた杉本を見送りつつ、三人くらいの女子がひそひそささやいていた。

のろのろ桧山先生に近づいてきた。どことなくおどおどしている。

「あの、先生」

意を決したよつて、ひとりが口を切つた。

「何か用か」

女子には實に冷たい桧山先生。クールというよりも冷酷だ。

「あの、桧山先生。私たち、あの」

「はつきり言いたまえ。俺は君たちが反省しない限り、人間としての扱いをしたくない」

「反省つていうと」

「佐賀に対して何をしているかを、自覺してないってことだな」

クラスでも居場所がなかなか見つからない顔をしている連中だつ

た。杉本には逆らえず、かといってはるみを無視するのも抵抗がある、結局どつちつかずの偽善者集団。

「どうだ、君たちは反省しているのかしてないのか。してないんだつたらこれ以上話すことはない」

「反省、します」

三人の女子はぱらぱらにゅつくり頭を下げる。反省のポーズか。「そういう顔に見えないな。悪いが、君たちにはこれから職員室にきてもらつ。そこでもうつくりと話を聞かせてもらつ。いいな。この前電話で話したことによつて、念頭においておくんだな」

冷たく言い捨てた。

いつたい三人の女子たちに何が起つたのかは全く健吾も見当がつかない。なによりも、桧山先生が一週間前と同じ自信に満ちた態度であることが驚きだつた。健吾にとつてはひやつほつと叫びたいところなのだが、裏表激しいこの先生。

振り返つた桧山先生の顔はうつて変わってさわやか全開だつた。
「じゃあ、お前らも部活に行ってこい。新井林、水鳥中学との試合、がんばれよ」

「まかしとけ！」

健吾は桧山先生の背中を思いつきり叩いた。おどけるように腰をさする桧山先生にもう一度振り返り、廊下を一気に走り抜けた。すれ違う連中の多くが、桧山先生復帰の情報を口にしていたのも耳にした。いろいろあつたとはいえ、桧山先生は杉本に引導を渡したのだろう。

周りの女子たちがだんだん変わつていくのも、杉本が教室からだんだん居場所を失つていくのも。正々堂々たるやり方を褒め称える証に見えた。

雪虫のかわりに本当の雪がちらつき始めたこの頃。冷えた空気がだんだん澄んでいく。

たとえ期末試験の結果がやつぱり杉本梨南のトップぶつちぎりだつたとしても。健吾なりにはベストを尽くしたのだから。試合がたとえあいかわらずのぼろ負けを食らつたとしても、全くの悔いはなかつた。

「新井林、お前、すごいなあ」

桧山先生も全く変わることはなかつた。ただ杉本に対しても一切眼中にないという態度を強めただけだつた。むしろ変化を遂げていたのは他の女子たちだらう。

いつたい何、命令したんだかな。桧山先生。

例の三人組を職員室に呼び出した後のこと、健吾は知らない。噂にも聞かない。

ただ、妙にはるみに対してもその女子たちが声をかけ始めたのだけは気がついた。

「なんでかしら。私もわからないけど、『佐賀さん、おはよっ』って、わざとらしく言つてくれるの。無視するのは悪いから、返事するけど、それだけ」

はるみも小首をかしげていた。全く無視されていた頃をかんがみる、それだけでも大きな進歩だ。

「どうか、よかつたな」

もうすぐ冬休みだ。健吾は帰り際にもうひとつ額に唇を落とした。「けどな、もし俺に言えないことなんかしたらな」「そんなことしないわ

してくれたつていけどな。

唇の中で肌をつづきたがる舌先がはがゆい。

「健吾、今、何したの」

上目遣いにはるみが見つめ返す。

「いや、おしおきの稽古だ」

もし、唇の中からはみ出す舌をはるみの口に入れられたら。完全に触れ合えたら。だんだん自分の中で目覚めていく欲望の一滴。健吾はたまにこらえきれなくなる。

完全に守りきったわけでもないのに、なぜかはるみに對してのみそつしてしまいたくなる。自分のものにしてしまいたいと思う。こんなないとおしい相手を傷つける相手をつぶしてやりたい。健吾のエネルギー源だった。

でも、自分は本当にふさわしいのだろうか？

はるみにふさわしい、正々堂々たる態度で杉本をつぶしてやり、あの女をギャフンといわせたかった。けれども、今自分がしていることは、もしかしたら裏の裏なのかもしない。

俺は本当に正々堂々としてるんだろうか。

今までのことって、本当に俺の手で佐賀を守つたってことになるんだろうか。

「冬休みこそ、おしおき、するからな」

思い切つてはるみの額を舌先でぺろつとなめてみた。しょっぱさがちびつと舌の先に残っていた。

あの女を黙らせることができたら、一発殴りせろ、かあ。立村の言葉を思い返しながら、健吾は空を見上げた。
まつ黒い空には、冬のオリオン座がくつきりと残っていた。咽の奥にひつかかりそうな冷たい空気を吸い込んだ。肺いっぱいに詰め込んだ。ゆつくじと咽から吐き出した。
やはり、けじめをつけるしかねえか。

暖房を入れた一年B組の教室内で、だんだん健吾の望む展開が繰り広げられているのを感じていた。杉本梨南の立場がだんだん崩れてきて、桧山先生は全くパワーダウンすることなく復帰し、はるみには一部の女子たちが味方の顔をして近づいてきている。たぶん桧山先生の策略もからんでいるのだろう。

もしかしたら自己にいる間に、例の女子たちへ電話して反省させるように仕組んだのかもしれない。杉本の親に、土下座させるような言葉をささやく桧山先生のことだ。そのくらいは平氣だろつ。そ

れを否定はしない。健吾は絶対にやる気ないが。

ただ、下手したら桧山先生は教師として失格のことをしている。思われても否定できないだろう。いわば特定の生徒を逆ひいきするようなものだ。杉本のことがいくら嫌いだからといって、孤立させたり無視させたりするような態度は……気持ちは非常によくわかるが……正義ではない。そのあたりで健吾もいい方法がないか、かなり頭を痛めていたものだつた。いじめではなくて、正々堂々たるやり方で、はるみから杉本を追い払う方法を。

七年間健吾が手を余していたこと。たつた一週間で。

あいつ、見事やつちまつたつてことかよ。

両手を握り締め、健吾はもう一度、口から空気を飲み込んだ。

あんな男か女かわからねえ顔して、女ばっかり追いかけいで、頭悪そうな顔してる奴がな。まさかなあ。

今回ばかりは、俺の負けか。

認めるのが悔しい事実だけど、健吾の腹の中ではとつぐの昔に認めている真実。

杉本の味方でいる一年女子たちを利用して、図書館へ保護してやる。

クラスの女子どもがだんだん桧山先生サイドに動きつつあるのを見込んでか。

はたして杉本がどう考えているのかはわからないが、先生たちに騒ぎ立てないところを観ると気分いいのだろう。一年の女子たちにちやほやされているのだろう。今までほんと学校へ来ることのなかつた花森まで引きずり込んでくる。一年同士、コンビを組ませてまとめて面倒を見るというやり方か。孤立もしないし、先輩後輩の麗しき友愛、とでもいう風にも見えるだろう。

他の連中は、なんで一年女子たちがいきなり杉本にかまい始めたのかわからないだろう。

健吾も、立村とさしで話をしていなかつたら想像できなかつただ
らひ。

「」の状況が「」今まで続くかわからないが、「」のままだと桧山先生は平氣のへいざで杉本を攻め立て反省するまで痛めつけるに違いない。大賛成だ。もつといつなら、今まで味方でいてくれた女子たちをも一氣に引きずり込むつもりだらう。正論だ。はるみに対する無視という名のいじめをやめさせるためなのだ。

しかし、杉本が全く孤立するわけではない。すでに一年女子をはじめとする連中が守つてくれているのだから。といつ言い訳を用意してあるわけだ。

あの女がほんと教室にいなくなつただけで、なんでこいつも
変わるんだ？

あの軟弱男、いつたいどうしてそこまで読めたんだ？

家まで歩く道のり、天を見上げてオリオン座に手を伸ばした。

俺は男だ。けじめはつける。

はるみにふさわしい男であるために。

覚悟を決める一夜が明けた。

ほんの少しだけ、道端の雑草につやつやした氷が張つていた。冷え込んだのだらう。

いつものようにバスケ部の朝連に参加した後、着替えもそこそこに健吾は職員室へ向かつた。ここにいると必ず、誰かかしらに会う。情報をもらひこともできる。廊下の寒々しい窓ガラスを覗き込んだ。まだ自転車置き場に奴の姿はない。

つたぐ、なあにが品山から通つてゐるんだよ。『』くわづな
こつた。

悪態をついてみる。でもいつも迫力に欠けると、自分でも思つた。

「おー、ちょっと逃げんなよ」

どひ声をかけるが、予行演習していただけど、やはり一番効果的な

のはこれ、だろう。

黒いコートを小脇に抱えた立村が職員室から出てきたのを、健吾は待ち構えた。たぶん廊下にたむろっていたら奴のことだ、逃げるだろうと読んでいた。だから一度背中向けて知らん振りをしていたのだ。でてくるところを捕獲、つてわけだ。

目を見開いて立村は立ちすくんだ。

予想だにしてなかつたつて奴だろう。いきなり視線を逸らされた。

「新井林、いつたいなんだ」

「俺が用あるつて言つてるだろ」

「今じゃなくともいいだろ」「う

「あんたが言つたんだぜ、『一発殴らせん』つてな」

立村は黙つた。薄い唇に血の気がなかつた。ただでさえ生白い肌が透けている。

「ちょっと来いよ」

生活委員の連中が廊下で、遅刻者違反カードチェックの真つ最中だ。邪魔にならないように、といつよりも聞かれないようにするため、健吾は顎でしゃくつて廊下を歩き出した。片手に社会の副読本らしきものを抱えた立村がついてくるのを確かめた。

「いつたい、何を言いたいんだ」

声が冷めている。きっとおびえているんだろうとこ「う」とかわかる。勝ち負けはつきりした一発をかます時はいつもそうだった。相手はがたがた震えているもんだ。立村の顔がもともと青ざめているのかどうかわからんが、健吾が本気でこいつを殴つたとしたら鼻の頭がおもいつきりへしゃげてしまうに違いない。

先生たちが通つていないので確認し、健吾はポケットに手をつっこんだ。立村の顔を見上げながらぐるぐると相手の周りをまわった。生徒玄関はもう閉まつている。健吾と立村、あと数人の生徒がうろついているだけだった。

「悪いけど、あんたすげえなつてまづは、けじめをつけたかつたつてことだ」

「けじめ？」

繰り返した立村は、また健吾を田で追いながら立ちすくんでいた。
「そうだよ、けじめって奴だ。俺は男として最低の人間になんぞなりたくないからな。あんたがどうにう手をつかったかわからねえが、一週間前の公約通り、一年B組は見事に静かになつたつてわけだ」

敗北宣言、と言われても仕方ない。一晩悩んだことなんだから。

立村はまだわからなさそうにきょときょと健吾を見つめていた。

「杉本の、ことか」

「そうだ。お見事、さすが本条先輩の命で評議委員長に推薦されるだけのことはあるつて、俺も認めてやるぞ。あの桧山先生だつて、いきなり教室の状況を見てな、『ずいぶん変わつたな。静かになつたなあ』って言つてたぜ。要は、あの女が教室にいることが少ないと、丸く収まるんだつてことが証明されたつてことだな」

ようやく勘付いたらしく、立村はプリント類を持ち直しため息をもらした。息が白い。もちろん健吾はまだ様子見している。

「そうか、だいぶ落ち着いたか」

「清坂先輩とか、二年の女子の先輩を利用して、よくもまあやるよなあ。思いつきりむかつくが、けどあんたのやり方がお見事だつたことも認めてやるぞ。俺が七年間苦労してきたことを、あんたは一週間で片をつけてしまつたんだ。ま、本当はあの女の口を封じてくれれば一番いいんだが、それ以上のことを俺はのぞまねえよ。まあ、桧山先生も復活したことだしな」

そこでだ、と健吾は口の中で、自分に聞こえるようにつぶやいた。
「今日の放課後、茶室で落とし前つけさせてやるよ」

「落とし前？」

「あんた、おうむ返ししかできねえのか。ほんと馬鹿じやねえか。まあいいか、あんたは俺を一発殴りたいって言つてたしな。この件に関しては俺が全面的に悪いございましたつてことで、一発とは言わぬ、三発くらい殴つてよしだ」

「新井林、あれは言葉の綾だ」

なあにあせつていいんだが。いきなり言葉が早口になつてやがる。

「殴らせられて言つてるんじゃねえぜ。俺は殴らせてやるって言つてるんだ。一騎打ちであんたの腕力じやあ俺とは話にならねえだろ」 どうやら言葉の弾みで「一発殴らせろ」と言つてしまつたことを、今さらになつて後悔しているらしい。徹底して責めまくつてやがり。腹の底でふふふと笑う声が聞こえる。

「落ち着け、よく聞け。新井林。確かにあの時俺は、そう言つたよ。けど、今の一 年B組が丸く納まつて いるんだつたら、無理にそんな、殴りつけようだなんてことはしない。暴力で物事がうまくいくなんて、ガキっぽいことを考えてはいなんだ」

「ほお、前言撤回かよ。つたく、やつぱりあんた、度胸ねえんだな。それともなにか？ 俺が騙そ うとしてると疑つてるのか？ 悪いが世の中、あんたみてえなびくびくした馬鹿男だけじゃないんだ。よつべ田の玉おつぴろげて見てみろよ」

自分で蒔いた種が想像以上に成長しているのに驚いているのだろう。立村は完全に硬直していた。唇を血が出そうなほどかみ締め、今にも泣き出しそうな表情を瞬間ちらりと見せた。覗き込む健吾のまなざしを捕らえるのもつらそうだった。

この、今にもしゃがみこんで泣き出しそうな顔してながら、やる」とはすげえよな。実はこいつ、噂されてるよりもはるかに、頭悪くないんじゃねえか？

健吾は自覚している。

どんなに軽蔑していた相手でも、相手の才能や才知が優れていれば、それはそれで素直に尊敬できる性格だと。杉本がらみの「」たごたが起こった時期でも、立村が英語のエキスパートであり、よくわからん文学書をすらすら読んでいて、しかも卓球の才能があるらしいということを認めていた。はつきり言つて、上記三点において

健吾は絶対に勝てないだろう。

誰にでもつかかりたいわけじゃない。今回ばかりは、立村によつて杉本の隔離が行われたから、健吾としては当然、けじめをつけたかっただけのこと。

殴られたら痛いに決まつていて。いくら腕力なしの立村だつて一応は男だ。力いっぱいやつたら健吾の顔にアザができるかもしれない。しかし正々堂々と勝負をかけて、たまたま今回は負けた、だからきちんと反省し受けけるものは受けける。

負けた時の落とし前のつけ方すら知らないで、なにが「一発殴らせろ」なのか。

「じゃあな、放課後、茶室の裏で待つてるぜ」

一切言葉を発しない立村に見切りをつけ、健吾は急ぎ一年B組の教室に向かつた。全く動かないでいたところみると、立村、たぶん、確実に一年D組の朝の会には間に合わなかつただろう。

教室にて杉本は、一心不乱に教科書を読みふけつていて。振り返つたはるみの瞳に、いぶかしげなものを読み取り健吾は、ふいとそっぽを向いた。

あいつは、俺の考えていること、最近わかるみたいだな。まあいいか。もしかしたらその時こそ、脣に、おしおきだつておどしどけ。

試合前に似た気合が蘇つてくる。健吾は野郎連中に埋もれてしばらく高揚する心臓を落ち着けるよう努力した。

今から盛り上がりがつてどうするつていうんだ。人殴つたことないんだろうな。なあに怖がつてんんだよ。そんな奴とマジで勝負なんてするつもりねえよ。

一発目が降りかかってきたらこう言つてやる。せせら笑つてやる。

あんた、本気で勝負したことねえつてことがよくわかつた

ぜ。そのじぶしの作り方だとな。

その9 大人になる理由

呼び出したはいいが、はたして奴は来るのだろうか。

せっかくけじめつけさせてやるつてのにな。きっと返り討ちにされるつてびびつてるんだぜ。あいつ、馬鹿だよな。

思い切つて練習を休むことにした。テスト後ということもあって、本当だつたら気合を入れていかねばならないことだけれども、たまたま風邪気味だつたことと、

「試合前だからな、無理するなよ」

という一年生連中の暖かいお言葉に、今回限り甘えさせていただくことにした。

俺だつたら絶対、そんな甘えた態度とらせないがなあ。

都合のいい時だけ利用するのは気が引けたが仕方あるまい。顔にアザつけて帰つてきたら、かえつてお互い、まずいことになるだろう。

立村は次期評議委員長、かくなる健吾は次期バスケ部キャラプロン見込み。

お互い、青大附属の花形として生きていいくのだから、今の段階で傷をつけたくはない。健吾はかまわなくとも、立村はいやだらう。

まだ三時半を数分過ぎた程度だというのに、茶室の裏手は枯れ木の中に覆われて薄暗くなつていて、わずかに溶けた雪で足下は滑りやすい。石畳の間に垣間見える土が黒々としていた。スニーカーをそのままぼづぼ入れて歩いた。

茶道の時間に使用する程度の茶室。一年の健吾はまだ、大部屋の和室でみな連なつて正座する程度だが、一年になると班ごとに分かれて別棟の茶室にて茶会の練習をするといつ。和菓子が食える事以外にメリットを感じない健吾としてはどうでもいいことだが。屋根は、足マッサージ用の青竹みたいなのを四角く敷き詰めたものだつ

た。ねずみ小僧^{じご}にして、よじ登つてみたい衝動に駆られた。

人はいない。決闘するにはいい場所だ。
さすが一年、場所の選定に狂いはない。

人目につかねえとこで、かつめつた人が通らない場所だもんな。グラウンド近辺だと運動部の連中がたかつてゐるし、学校の中だとどっちにせよ先生どもがわめくだらうしな。かといつて学校を出たら近所のうるさい連中にぎやあぎやあ言われるしな。自分の保身を得意とする、あの男らしいぜ。

本当だつたら一気に叩きのめしてやりたいところだ。残念だ。
健吾は男として、正々堂々を愛する人間なのだから。

掃除当番に当たつていたとしても、だいたい二十分くらい待てばくるだらう。思つていたとおり立村の姿が見えたのは、十五分後だつた。茶室近辺に人影はなく、決闘するにはちょうどいい空気が漂つていた。

「待つてたぜ」

「すまない」

やはり腰の低い奴である。健吾はポケットに手を突っ込んだまま、黒いコートを羽織つた立村の姿をじっくり眺めた。膝下まである分厚そうなコート。大抵の男子だつたら、そんなものを着ようとはしないだらう。ジャンバーが普通だ。

「今なら誰もいねえぜ。さ、好きなように料理しる」

「新井林、そういうんじやないんだ。少し話そつ」
立村は軽く咳き込みながら、左手を差し出した。

「俺も、あの時感情で口走つたことは悪かつたと思っている。でも納まつたつていうんだつたら、もう遺恨なんてない。これから先は長いんだ。だからもう一度あらためて話をしたいんだ」

「けつ、何いきなり尻尾巻いて逃げる氣でいるんだ？ あんた、男だろ。男としての約束を守れないでなあにが」

つばを足下に吐き、健吾は真つ正面から立村を見据えた。まだひくひくとした声だ。

「殴つたつていやな思いするだけだ。それより、これから、新井林と佐賀さんがどうすればいやな思いをしないですむか、それを話したいんだ」

「しつこいぜ。俺たちがすつきりできるのは、あの女が青大附属を出て行くことだ。そうしない限り、どんなことがあつたってすつきりさわやかって気持ちになんてなれねえって、何度も言つただろうが」

無理難題だとはわかつてゐる。でも、健吾はがまんできない。あの汚らしい顔と、ゆがんだ口元、泥水のような髪の毛、どうつとした瞳。杉本梨南の顔形、かもし出す空氣すべてが耐えられない。はるみにしたことすべてをチャラにしたとしても、嫌悪感をぬぐうことがどうじつてもできない。どうじつてかわからないけれど、本能がそう叫ぶ。

「それはできない、けど」

「ははん、あの女を退学させることができるなければ、俺はあの女を許すことなんて永遠にねえだらうし、あんたを認めることがたつてたぶんできねえだらうな。けどな、あんたは俺のできなかつたことをあつさりやつてくれたんだ。クラスの平和があの女のいなつてことだけで保たれるつてことを教えてくれたんだ。悪いがあんたと違つて俺は、間違つていることは堂々と認めるし頭も下げる。恨みだつてあつさり捨てる。評議委員長としてのあんたを認めるぜ。その誠意を見せたくて、今こつして、ほっぺた差し出してやるつてんだ。わ、三発くらこさつあとやつとくれ」

一心太助よろしく、地べたにあぐらをかけて両腕を組んだ。

ふくらはぎに染み入るぬれた感触。足首に直接触れるぬれた土。立村は差し出した手をぶらんとぶら下げたまま立ちすくんでいた。言い返せない奴だ。唇をかみ締めるともう一度小さく首を振つた。一步だけ足を進めた。

「新井林、俺はお前がどうして杉本を嫌うのか、そこまでは想像がつかない。けれど佐賀さんに杉本がしたことを許せないというのだけは共感できる。どんなに杉本がお前たちと友だちになりたくてしたとしても、許せないことは絶対に許せないだろうし、責められなことだと思うんだ」

「つべこべ言うな。繰り返しだぜ」

「頼む聞いてくれ。でも、杉本はどうしてもその気持ちが理解できないんだ。本当はお前や佐賀さんとうまくやりたいと思つていてるのに、どうすれば喜んでもらえるかが想像つかないんだ。言い訳だと思われるかもしれないけれど、かなりの確率で俺はそうだと踏んでいる。桧山先生が俺のことを引き合いに出して病院に行けつて言ったのは、新井林や佐賀さんが杉本のしていることでどれだけ傷ついているか、少しでもいいから理解してくれつてことを言いたい、それだけじゃないかつて」

「はあ？ なに女々しいこと言つてるんだ？」

また一步、スニーカーの足を踏み出した。少し前かがみに健吾の顔を見下ろすように。

「杉本だつてしたくてしてるんじゃないんだ。どうしてもそう思えないから自分のしたいことをするしかないんだ。どうして男子連中がこんなに自分を嫌うのかわからないし、どうすれば嫌がらないですむか想像つかないんだ。俺が今杉本にできるのは、どうすれば周りの人気が嫌がらないですむか、そういう言い方を教えたり、佐賀さんが辛い思いをしないで杉本も傷つかないですむにはどうすればいいか、それを考へることくらいだ。俺だつて頭が悪いしたぶん、新井林よりはうまくできないかもしれない。でも、せめてお前たちがむかつかないようにするために、杉本をクラスから引き離すことができる。俺ができるのはそのくらいなんだ。だから

もう一度、今度はかばんを持ち替えた右手を差し出した。

「頼む、杉本に情けをかけてやってくれ」

健吾はゆつくりと立村のおののき加減な顔をねめつけた。

「情け、かよ」

鼻息で返事した。拒否。当たり前だ。

「御託並べてるんでねえよ。なあにが『杉本だつてしたくてしてるんじやない』んだ?『友だちになりたくて』だ? あのな、ずっと聞いてればあんた、あの女のことを隠れ蓑にして、好き勝手に言いたいことわめきちらしてるだけじゃねえか?」

言葉に詰まつた様子、わずかに背中を引いた。

「『杉本』をあんたの名前に置き換えてみろよ。要するにあんたがどうして清坂先輩や羽飛先輩におべつか使つてているかを言い訳してるだけだ。たまたまあの女がいたから、正義の味方面して俺を開いてにべらべら言いまくつてるだけでな。けつ、やり方汚ねえな。せめてやるなら、精一杯あの女をかばえればいいじゃねえか。本當は惚れまくつてるから、守つてやりたい、守つてやりたいから俺につっかかる。それだけのことじやねえか」

一息で言い放つた。また首をかすかに振るつとするが皿は震えていた。

「俺だつて惚れた女がいる。あんたが杉本をたまらないほど惚れぬいているつていうんだつたら勝手にしろつてんだ。俺とは関係ねえよ。だがな、俺と佐賀はある女のせいで六年間、ひどい目にあわせられてきた。それも事実だ。だから戦うそれだけだ。あの女のせいで町を追い出された奴だつている、悪口言われて学校辞めさせられそうになつた先生だつている。これ以上俺の大切な奴をあの女の餌食になんてされたくないだけだ」

「わかつてるだから

「わかつてねえよ。あんたなあ、自分でどんな顔して言つてるのかわかつてるとかよ。あんたは自分を清坂先輩の彼氏でいるつてことで安全地帯作つて、その上でのそのその女の守ろうとしてるつてわけだ。たとえ俺がここで、あの女を許すつて言えば、ほつとして清坂先輩といちゃつくんだろうな。今あんたが言つたみたいなことを清坂先輩たちに言つて、『情けをかけてやつてくれ』つて訴えて、

仲間に納まるうとするつてわけだ。けつ、汚ねえな。あんたの顔、今にも泣きそうだぜ。じついう顔してたぶん小学校時代もすごしてきたんだろうな。本品山の浜野さんにも同じ顔して訴えてきたんだろうな。俺だつたらあんたを息の根止めるほど殴りつけてやつただろうけど、あえて許してくれた浜野さんの恩も忘れてか。最低だなああんた。けどそれとこれとは関係ねえよ。俺はただ、あんたがあの女を迷惑にならないようにしてくれたから殴つてもいいぜ、って言つただけだ。あんたが男だつたらそのくらいの仁義は持つてるだろ」

じんじん染み入る足首への冷え。動かない立村を早くせかしたい。「そつか、あんたは殴ることすら怖いのか」きつと目が合い、健吾は一切逸らすことなく一点凝視した。

勝負は目をそらした方が負ける。

立村が一度、唇を開き何かを口にしようとした、が次の瞬間ぐつと健吾の襟を引き出すようにしてゆっくりと手を伸ばした。
そ、やつてくれつてんだ。

恐る恐る、こわいわと。

咽仏を触れるようにして、ネクタイだけ引っ張り出した。かがみ込み、目をそらさず。

「本当に殴られるつもりでいるのか」

静かだつた。お互い吐く息が白く漂つた。

「あんた日本語わからねえのか」

「殴られたら痛いんだ、そんなことされたいのか

「気持ちいいんだつたらマゾだろ」

「新井林、お前」

顎が自然と持ち上がる。ふつうだつたら目を閉じるのだろう。でも健吾はさらさらそうす氣なしだ。げんこで顎を支えられた格好で、もう一度にやつと笑つてやつた。

「そこなきやうそだな。あんた、いいかげん大人になれよな」

右手でネクタイを取つてゐるんだから、馬鹿もいいとこ。利き手

を使いたいだろ？。やっぱまともにタイマン張つたことのない奴なのだ。

この勝負、完全に俺の勝ちだ。

殴られようが、蹴られようが。健吾は勝利を確信した。

襟から伝わってくるものが、やがて震える感覚に変わつていった。立村の手先から来る振動だとすぐに気付いた。気持ちが揺れているに違いない。アホだ。

ろくに殴ることもできぬいで、なあにが杉本をわかつてやれ、だ。

おびえる瞳が揺れている。健吾は一切逃げなかつた。立村の目がだんだん迷いに変わり、やがてうるみかけていたように見えた。

「ほおら、やれねえのかよ」

気合をつけてやりたいところだが効果なし。ネクタイを握り締めたまま立村が、片膝ずつ付き、つぶやいた声を拾つた。

「ああ、できないさ」

健吾と同じ位置に奴の顔が下りている。前髪が震えるようだつた。顔を隠すようにして、ネクタイから指を滑らせ、離した。

「お前の勝ちだ。新井林」

そのまままつむき、咽の奥で小さな咳をした。

「最初から勝負はついていたのにな」

か細くつぶやいた。鼻で笑いたい。最初から健吾が言いたいことを、こいつはやつと理解したらしい。自分がいかに弱くて懸命であるかを必死に訴えてきたはいいが、度胸がなくて結局男同士の勝負すら放棄してしまう情けない奴。こんな奴を先輩として認めたくはないが、健吾は大人である以上仕方ないとして許してやろうとしたのにだ。

勝負、ついてたか。そういうことかよ。

桧山先生と杉本梨南との三つ巴対決に割り込んだ時、立村が叫んだ言葉を覚えている。

もう、勝負はついているだろ。あの時はよくわけがわからなかつたから流した。でも今、立村がつぶやいた言葉すべてが通じた。自分がガキだということを、杉本も救いようのないガキだから、許してやってくれたとかばつてゐるに過ぎないといふことを。

たまつたもんじやねえよ。ガキがガキだつたらガキの溜まり場で遊んでれつてことだ。俺たちにかまうんじやねえ。大人のゾーンに割り込むんじやねえ。健吾も、桧山先生も言つたかったのはそのことだ。

よつくわかつたか。ガキのくせに俺たちにちょつかい出さんじゃねえ。

言葉には出さないで、健吾はもう一度鼻を鳴らした。ふがつと、ブタつぽい音だつた。

「よおし、わかつたそこまでだ。立村、新井林」

靴下がびつしょりぬれでいることに気付いたのは、声が聞こえてからすぐだつた。立村が即座に振り返り、腰を浮かせた。

「本条先輩……」

健吾は動かないまま、もう一度口を結び頭を下げた。本条先輩が白いジャンバーを羽織つたまま、茶室をバックにふたりを見つめていた。めがねを外したままだつた。完全なる無表情。石をひとつ蹴飛ばした後、立村に近づき平手で頬を張り飛ばした。

バランスを崩したのか立村は片ひじをつく格好で倒れかけた。そいつを無視してすぐに、本条先輩は健吾の肩を叩いた。打つて変わつて意味ありげな笑みだつた。

「新井林、大丈夫か。しんどかつたなあ

「何でもねえつすよ。たいしたことじやねえ」

殴られたとでも思つてゐるのだろうか。その辺の誤解は解いてやろう。口を開きかけたが本条先輩は目で軽く合図を送つてきた。黙つてゐ、つて奴だろ。大人同士の意思疎通だ。

振り返り立村が立ち上ると同時に、
「いいか立村。お前がこれから何をすべきかは、わかつてんんだろ
うな」

答えなかつた。膝にべつたりついた泥をぬぐつゝともしなかつた。
見下ろすように本条先輩の顔をにらみつけていた。健吾の方は全く
眼中にないと、よくわかつた。

「全く、だからお前はガキだつていうんだ。いつまでも甘つたれる
んじゃねえ。悔しかつたら新井林が納得するように完璧に片をつけ
てみる。それができるまで、俺はお前と一切縁を切る。聞いてるの
か」

「おいおい、ホモ説の相手同士だつてのに、そこまで言つてい
いのかよ、本条先輩。」

立村の視線は次に健吾へと向いた。涙を雪で凍らせたようなまな
ざしだつた。大泣きするのは時間の問題だらう。

「わかりました。失礼します」

小さく一礼をすると、立村は背を向け全速力で茶室から離れてい
つた。脱兎の「」とくとはあのことをいうのだろう。本条先輩と目と
目が合い、健吾はようやく立ち上がることができた。

「ま、新井林、少しあつたかいところに移るか。ごくひつさんだつ
た。あのくらい言わねえと立村の奴、ちつとも答えねえからな。お
前の言う通りだ。ガキはな、自分で自覚するのにどうしようもない
くらい時間かかるんだ。ほんつと、腹立つくらいにな」　わざわ
ざかばんまで持つてきてくれた。恐縮だ。

「今の時間だつたら、茶室、誰もいねえな。ま、入ろうつか」

石畳の色が完全に墨の色と同じ。少し痺れた感覚のある片足を引
きずりながら、健吾は本条先輩の後ろを追つた。初めて入る本式稽
古用の茶室。腰をかがめないと入れないにじり戸を開いて、本条先
輩は尻を突き出したまままず入つた。健吾も続いた。初めて覗き込
む茶室は四畳半で、ちょっと埃臭い匂いがした。畳の上に立つた時、
じわりと足跡が付いたのが分かつた。

「ま、座ろうや」

火の氣の無い部屋の畳はからからに乾いていた。畳の真ん中に小さな炉、黒い炭を四つばかり四角くく並べたままだつた。

「さすがにここじやあストーブ焚けねえしなあ」

本条先輩は両手をさすりながら腰をおろした。炉を挟んで反対側にあぐらをかいた。

「本条先輩、あのですね、今日のことなんだけじさあ」
どこまで今日の一件について聞き及んでいるのかわからないが、一応は立村の顔も立ててやろう。余裕がある。

「あ、そのことか。だいたい見当はついている。最近立村の様子がおかしかつたから、いろいろ見張りつけてたりしたんでな。まあ、お前とだつたら奴の勝ち目はないな。と思っていたから様子見してたんだが。つたく、俺も受験生だつてのに、まだあいつの面倒みなくちゃなんねえのかつて頭痛くなつたぜ」

見張り、かよ。

さすが本条先輩、鋭い。

「けどな、その点新井林、お前は大人だなあ。ほんと、一年だとは思えねえぜ。ちゃんと立村をあしらつて、頭下げさせたんだからな」

□元をやわらかくして笑つた。

「いや、先輩。本当は一発一発殴らせてやらないとつて思つてたんだ」

「そうか。あいつだつたらお前に本氣だされたとたん木つ端微塵だもんな」

本条先輩、すべてをお見通しだ。だから健吾はこの人に勝てないと思うのだ。

顔だけ見たら優男だろうし、下手なアイドル歌手よりもずっと上だろうと思う。青大附中開闢以来の女つたらしという異名だけが先走りしているけれども、本当のすごさをたぶん知つているのは、たぶん健吾かあと、あの立村くらいだろう。

「でもまあ、停学騒ぎにならないですんだ。よかつたよかつた。立村もたぶん、あの顔見てたら何にも言わないだろ? し、自分のやるべきことはさつさと片付けるだろ? うな。新井林、お前もその点は心配しないでいいぞ」 「別に心配なんてしてないつすよ」

なんで、立村をここまで貶した発言をするのだろ? 健吾は少し不気味に感じていた。一応は「本条・立村ホモ説」とささやかれた相手だといつのに。実はカモフラージュだつたのだろ? うか。もともと本条先輩は健吾をひいきしてくれていたし、杉本を絡めた問題についてもなんとなく、健吾よりの立場を保つてくれていた。しかしながら本当のところはどうなのだろ? うか。この人の命令には絶対に逆らえない? とわかつて? いるからこそ、次の言葉に用心したかつた。

「そうだな。お前がいるから次期評議委員会は安泰だ。まあな、杉本のこととかでお前が頭痛くなるのもよおくわかるし、その辺は奴に少し考? えるよ? う? とく。全くガキを相手にするのはほんと、疲れるなあ」

両膝をV字に立てて両手を乗せた。

「で、本条先輩何を言いたいんつすか」

「さすが、匂いをかんでるな」

健吾が身体を? 反り返らせるよ? うにして言葉を待つと、本条先輩はうんと頷いた。

「相談なんだが、お前、ああいうガキをうまく扱つて青大附属の評議委員会を利用するつてのはどうだろ? 今の果し合いを聞いた感じだと、どうみてもお前の方が上だ。立村を委員長にすることができないが、ついてはもう決まつたことだからひつくり返すことができないが、来年以降はお前が影の委員長と言つても過言じやない。あのぼおつとした立村をうまくあやしながらやれるのは、新井林、お前しかいな? い」

「あやす?」

「どこまで本気なんだかわからな? まゆつばで聞くしかない。ぐいとにらみつけた。威嚇のポーズだ。

「そりなんだ。新井林、お前も知つての通り、立村は見た目以上に本当にガキなんだ。まあそういうところが俺は嫌いじゃないし、弟分にしてるところでもあるんだが、だがな。あれじゃあまだねんねのまんまだ。お前の心配してくれている通り、下手したら杉本あたりを次期評議委員長につけようとしたり、かなり肩入れしきてしくじつたりしそうな気がする。ただでさえ青大附属の評議委員会が立場弱い形になつていて、そんなことでぶつこわしたら大変なことになるつてわけだ。まあな、杉本がらみの問題については、俺もあまりかかわりたくない。この辺は、男の本音だ」

「やつと笑う。飲まれないようにしなくては。防御。

「だが、俺なりにあの甘つたのがこれから先ひどい目にあつていくかを考えると、非常に胃の痛い気がするのも確かなんだな。特に杉本あたりに利用されないとも限らない。ということで頼みの綱は、新井林、お前だけなんだ」 「冗談じゃねえ、俺はお情けでいつも許してやつたんだけど」 「いやいや、そういう器を持っているお前だからこそ、あえて頭を下げて頼みたいとこなんだよ。お前は大人だ。ずっと、俺と対はつてしまふことのできる、数少ない後輩だ。あの『青大附属スポーツ新聞』だつて、今は全校に配ろうという方向に進んでいると聞くぜ。俺たちの盲点だったとほんと、思つちくしょう、忘れてたぜ。

「まだに勝ち星を挙げられないバスケ部の実情に思いを馳せた。

「だが、今の段階では委員会最優先主義がまだ続いている。俺が卒業して、立村が仕切り終わるまではたぶんこのままだろう。せつかく委員会が部活の要素を持つていてるんだつたら、どうだ、新井林。

お前この状況を利用してやろうつて気にはならねえか」

「俺は一からこしらえるのが好きですから、そんなのどうでも」

「もちろん仕切りが新井林つてのは決まりだ。ただ、せつかく写真関係とか、新聞関係とか、得意な委員会が存在してゐるんだつたらそこから逸材を引き抜くとか、記事が得意な奴がいたら利用するとか、そういう風にしていくとだいぶ楽になるぞ。やっぱりチームプレイ

も大切だ。俺が思うに

以下、本条先輩の提案。

「来週の終業式前までには立村もそれなりの提案をしてくるだろう。杉本がらみの「ひざつ」たい問題についてはお前の判断に任せることにしておだ。とにかくお前のやりたいこと、委員会主義から部活最優主義にしたいっていうんだつたら、どこのまで立村から有利な条件を引き出せるかを計つてみたらどうだらう?」

「なんすかそれ」

「ねんねでも立村のネットワークはすげえよ。俺も絶句したんだが、あいつは本能的に人を利用するのが得意なんだ。健ちゃん、あんたと女子以外はな」

「女子以外?」

「あいつの弱点は女子受けが悪いってことなんだ。同学年の野郎連中は立村からなんらかの恩義を受けているらしくてさ、あいつの頬みは大抵聞いてもらえるらしい。今回の一件もそうだ。俺が聞き出したところによると、今回の杉本の件、あいつが動く前に清坂が情報を取り入れて、菱本先生に抗議しに行つたらしいんだ。清坂ちゃん、あれでもあいつに惚れ抜いてるからな」

「嘘だろ、つてか、なんすか。清坂先輩が抗議つて」

「ほらあつただろ。立村が病氣だとかなんとかつていう話。あいつがガキの頃から生まれつき数学の頭が弱くて、なんかの施設に通つたことがあるつていうことをさ。本人としたら言われたくなかつたろうな。でもまあ、その代わりといつてはなんだけど大学の講義を受けられる試験を通つてるから、みなとんとんだと思つていいのみたいだが」

すつかり忘れていた。そうだ。きっかけは桧山先生と菱本先生の戦いだ。

「そうすか」

「雑魚どもが騒ぐほど、内緒ごとつてわけじゃない。けど、あま

りおおっぴらに言いたくないことも想像はつくわな。本当に桧山先生が杉本に病院に行け発言をしたかどうかはわからんけれども、そこに自分の彼氏の見られたくないところを引き合いでだされたら、清坂ちゃんのことだ。ぶつちぎれるだろ。お前だつて、彼女には、そつだろ」

はるみの顔を思い浮かべる。大きく頷いた。

「そういえば、清坂先輩、俺にそのこと聞きに来てました」

「そうか。じゃあ完璧だ。つまり立村をかばうために彼女たる清坂がひとりで動いたつてわけだ。菱本先生も熱血だから燃えまくる。桧山先生をいじめるいじめる、で、ああこことになつたつてわけだ」

清坂先輩がかよ。嘘だろ。

どう考へても、立村にあの清坂先輩が惚れぬいているというのが信じられない。何かの間違いかと思つていた。しかし本条先輩の言葉は絶対だ。動かない。

「さすがにそのことに気が付いた立村は悩んでたなあ。もちろん口には出さねえけどな。さつそく菱本先生のところに行つて、『自分のこと』で桧山先生が迷惑をこうむつてはいるのなら、謝るからなんとかしてくれ』みたいなことを言つたらしい。これも清坂ちゃんが話していたことだがな。あいつと菱本先生、一年來のバトルを繰り広げてたみたいだけど、ひたすら頭を下げて謝つて。菱本先生もそれにはだされたかどうか知らんが、まあ桧山先生復活となつたのにはその辺にも理由があるらしい。と、俺はある筋から聞いている」

背筋が寒くなつたのは、部屋が冷えているからではない。

まじかよ。あいつ、そこまでしたのかよ。

ひとつならともかく、ふたつも負けた。

健吾の出来なかつたことを、立村上総はやつてのけているというわけだ。

唇が切れて痛い。健吾はそつと口をぬぐつた。

「だから立村は、使によつてはかなり有能な駒であることも

確かになんだ。俺が想像つかないやり方でもって片をつけることも多かつたが、なによりも、あいつが動く前に周りの連中が喜んで手伝ってくれるだけのオーラを持つてるんだ。なんでだろうな。どんなにあいつがへまやらかしても、周りがうまく治めてくれる、いや、治めないとまことに動いてくれるんだ。俺も無意識のうちに使われた、その口だ

ははん、ホモ説はそこから来てるのかよ。

「だからな、俺としての提案なんだが、新井林がうまくあいつを操つて、評議委員長としての立村を利用したらどうかってことなんだ。残念ながら腕力勝負では役立たずだが、人間関係をうまく操る腕は俺以上だ。俺もあいつを敵に回したらどうなつてたか、今でも恐ろしい。第一、小学校時代あれだけやばいことをやらかしておきながらいまだに、復讐されてないつてところがあいつの怖さだろう。野郎限定大目に見てもらえてしまう能力は、ありやあ天性のものだぜ。使わない手はない。杉本を片付けることについても、新井林、お前の出方によつてはあつさり処理してくれるかもしねない」「はあ、処理だつて」「

「そうだ。まあもしだ。俺が健ちゃんの立場だとしたら、決闘なんてあつさりけりのつくことはしないわな。まず、うまくあいつから交換条件を引き出す。杉本をおとなしくさせるかクラスの邪魔をさせないかさせてつてことか。今回は。そしてそれをやつてくれるんだつたら、立村に協力するといつ讓歩をする。駆け引きつてやつだな」

「俺そういうの正々堂々としてないから、好きじゃねえつすよ。やるならすつきり力でけりつけたいですよ。負けてもいいから」

「いやいや、それだつたら相手を恨ませるだけで、それ以上の進歩がねえだろ。そこんところはな、健ちゃん大人になつて、立村の吐き出せるものを全部吐き出させちまえ。うまく機嫌を取つていけばあいつも、何とかしようなんとかうまくやろうと努力してくれる。あいつは保身に回つてこるよう見えてるけれども、いざとなつたら

退学も辞さない性格だ

本当かよ。

「あ、健ちゃんお前、嘘だと思ってるだろ？ そうだよな。疑うよなあ。でもな、本当なんだ。あいつの伝説パート2知ってるか？ 今年の夏休み宿泊研修の時、立村は何を考えたか菱本先生とバルやらかして、大法螺ついてバスを抜け出すという荒業をやらかしたんだ。本人には理由がちゃんとあつたし、菱本先生もその辺大人だから流したらしいが

「それってほんとっすか」

「ああ、本当だ。俺は事件前日に、あいつから電話で相談受けたからな。やめれって言つて置いたんだが、全く効き目なしだ。いつたん決めたら退学だらうがなんであるうがやることはやる。そういう特攻隊的性格を利用しない手はないだろ」

初耳だつた。あの昼行灯めいた顔をして、マネキン人形と一緒に混じついても見分けつきそうにないあの面が、そこまで悪さしていたとは思えない。

単なるたらしかと思つていたが、本条先輩の話を聞く限りそうでもないらしい。健吾には想像つかない何があるらしい。

「そりなんだよ、立村は怖いんだよ。ガキだから何やらかすか想像つかないんだ。そこでうまくコントロールする大人が必要なんだ。本来だつたら清坂ちゃんあたりが適任なんだが、今回の杉本事件のことを考えると第一のゴバルト爆弾にならないとも限らない。となると、下級生ながら、新井林、お前しかいないんだ。大人になつて、あいつを操れるのは健ちゃんしかいないんだよ。俺の頼み、聞いてもらえないか」

深々と頭を下げる本条先輩。健吾は足の親指をもみながらつぶやいた。

「大人になるつて、どういうことっすか」「今日のことだつて立村のようなガキには相当の打撃を受けたはずなんだ。死にたいと思つてるだろ？ な。悔しくて今ごろ泣きじゃくつてるだろ？ な。そういう

う奴なんだ。けど、そういう時がチャンスだろ？ 健ちゃん、正々堂々だけが勝負じゃないんだ。うまく駆け引きするのもこれからは必要だぞ。特に、立村みたいな奴なガキとやりあつていくには、力勝負だけじゃ あ話が通じないんだ」

正直なところ、むかついた。本条先輩の言い分には納得するところもあるけれど、でもいわば「立村をそれなりにおだてあげる」つてことを言いたいだけなんぢやないだろうか。思いつきりけなしまくつているけれども、その裏でなんとかしてやろうと努力している本条先輩の姿が見え隠れする。自分でもおっしゃっている通り、本条先輩は立村の持つオーラのようなものに操られているだけなんではないだろうか。

「冗談じやねえよ。あんな奴になんて誰が誰が。

健吾がつぶやきつつも、あきらめかけていたのは、むしろ本条先輩のオーラの方だつた。

「繰り返すが、俺は杉本のことについては全く口出しする気はない。やつぱりあれは本音として許しがたいことだろしお前を止める気はない。そつちの問題は立村の出方を待つなり、たたきわるなり好きにしろよ。だが、立村とだけはうまくやつた方がいい。機嫌をうまく取つていけばかならずあいつはお前の味方になるだろう。そうだ、健ちゃん。そこまで疑うんだつたら、一週間大人の目で、立村がどうこうことをしてきたかを洗い出してみたらどうだろう？」

「大人の目？ 僕はずつとそうしてたつすよ。ばかにすんなつてんだ」

「いやいや、新井林、意外とそうでないかもしだねえぞ。あいつはうまく昼行灯の顔で通しているが、やつてきたことの多くは確かにすげえもんだ。よく様子を覗いてみろよ。驚くぞ」

「そうすかねえ」

「最初からガキなんだと思つて見ていたら、結構やることをやる奴かもしだねえぞ。とりあえず来週以降に立村がどういう提案をするか待つてみて、それからあいつをどう扱うか決断してもいいんぢや

ないかつてことだ。新井林、お前は大人なんだ。大人の目でこの問題を処理するなら、どうすればいいかってこと、絶対わかるはずなんだ。俺が保証する」

「ちくしょう、寒すぎ。健ちゃん、場所変えよ。これからバスケか？」

「いや、休むつて言つてあります」

「じゃあ食い物おごるか。俺も暇だ」

公立の試験勉強しねえのかよ。

頭の中で、「お前は大人なんだ」と繰り返す声がする。本条先輩が先にじり戸へ身をかがませた後、健吾は前に突き出されている尻をけとばすかどうか迷つた。結局黙つてついていき、大学の学食でとんかつ定食をおごつてもらうことにしたのは、自分が「大人」であるかどうかを認めたからかもしれなかつた。全く関係のない馬鹿話に移つている中、健吾はひたすら、「大人」の二字にこだわりつづけていた。

俺は「大人」なのか？

あの馬鹿男なんかよりも大人なんだよな。

だつたら、やつぱり本条先輩の言う通り、正々堂々といつやり方だけじゃ、だめなのか？

ネクタイに手のかかつたまま、立村が瞳を揺らしながらつぶやいた言葉が重なつていた。

最初から勝負はついてたつてことか。もう俺の勝ちならば、これからどうすればいいかってことかよ。ガキを相手にするには、どうすればいいか、これから考えねばなんねえのかよ。

唯一、「大人」だと思える本条先輩の話を聞きながら。

その10 驚かされた理由

期末テスト後は授業もかなり手抜きになる。国語の授業では、いきなり臨時のビデオ鑑賞会が行われた。視聴覚教室に移動して、日本名作ドラマ特選集を観ることになった。席にはカセットテープとヘッドホンが付いている。気が散らないように隣りの席が仕切られている。健吾は「二年D組立村上総次期評議委員長」に関する考察に専念することにした。

「大人」として、あの野郎を観察するやいかについてか。

本条先輩に言われた通り、「大人」の視線で今までのことを捕らえ直すことは必要だ。自分でもなんとなくわかつていたけれども、どうしてもできないことばかりだつた。直感と噂との差がこれだけ激しい奴も珍しい。立村上総という男は。

学校ですれ違う立村は、うつむいたまま健吾に目を合わせようとしなかつた。気付かない振りをしているのかそれどころでないってことだらうか。足早に職員室と図書館を往復している。

巷で噂されている立村に関するいくつかの流言。

本条先輩が言うには、ほとんどが大嘘だといつ。

その一、立村と清坂先輩の関係について。

「第一なあ、あいつがまず自分で女子を口説けると思うのか？」健ちゃん

本条先輩は笑い飛ばした。

「あのおどおどした奴が自分から、清坂ちゃんに告白できるかどうか、まず考えてみろよ。いくら保身のためとはいえ、振られたら一生の恥さらしだぜ。そういうリスクの高いこと、奴がするかよ」「ごもっともごもっとも。

「それに、清坂ちゃんとは仲良かつたかもしれないが、自分の親友

と大の仲良しつて子をだ。あいつが玉砕覚悟でぶつかつてしまえる度胸ないだろ「うよ。清坂ちゃんが母性本能を發揮して立村を口説いたつて方が、自然だろ」

言われてみるとそうかもしないと思つ。本条先輩す「」い。
その一、立村ははたして杉浦加奈子先輩をしつこくべき続き追いかけたのか。

健吾のもらつた情報を信じじるに、どう考へても黒だつた。しかし本条先輩はさらに笑い飛ばした。

「ああ、あれもな。女子たち限定のガセネタだつてな。あれはすごいぞ。立村に恨み持つた女子がたまたま、何かの理由で『立村に追い掛け回されてる助けてくれ』って噂を流したつてだけだ。清坂ちゃんのこともそうだけどな、なんとなくあいつの場合、好きとか嫌いとかそういう感覚が鈍いみたいでさ、そこまで熱く燃えることがないんだよ。男としてそういうことに疎いつていうかなあ。そんな立村がだ、いきなり女子を追い掛け回して付き合いを要求するなんて、そんなこたあ、ねえだら」

「こもつともだ。本条先輩。さすがである。

本条先輩はもう一度にやつと笑つて続けた。

「つまりだな、立村の性格が、人の顔色ばかり覗き込んでびくびくしている奴だからこそ、まずありえないネタばかりなんだ。健ちゃんもわかるだろ？ あいつとしゃべった感じから言って素直に出てると思うか？」

健吾もだから、意外だと思った。

「だろだろ。立村はまずどうしようもなくガキなんだ。女子との付き合い方がわからんし、たぶん清坂ちゃんに引きずりまわされてるだけだろ。それに一年連中だつて、自分にメリットのない奴の言うことなんかきかないだろ。新井林、お前、一年連中の男子から、立村についてははどういう話を聞いている？」

悪い奴じやないんだけどな、つて前置きつきで。

「そりだろそりだろ。立村はな、相手にとにかく安心させて、それ

から要求を飲ませるのが天才的にうまいんだ」

けど、やり方が汚ねえんじゃねえの？

「まあな、奴のやらかしてきたことの中には、停学当然つてこともいくつか混じってるし、そりゃあ、あいつだつて自分を守りたいからしたことだつてあるだろう。そうだ聞いてたか。立村が小学校時代やらかした事件つて。あのかわいそうな番長少年なんだが、決闘したところまでは本当らしい。ただ、それについては素直に退いただけつていうのが本当のところだつてな。それをあの彼女つていうか、杉浦つて子が話を大きくしたつていうのが、事実だと聞いた。うん、一年D組のとある筋から」

また本条先輩も騙されてるのかよ。

「いいや違う。俺も騙されるのはやだから全部調べた。本人にも聞き出そうとした。でも、しゃべらねえんだよ。あいつ。しゃべらないで、ただ黙つてるんだ。黙つてることはどういうことだ？それつてほんと、つて意味だろ？ 嘘でも黙つていたいってことだろ？ ひでえ解釈のされかたでもかまわないってことだろ？」

「そうか。今までのことが全部ほんとだと思われてもいいってことか。

一年B組の中もまた、相変わらずだつた。

一年の女子たちが杉本と花森のふたりを休み時間狙つて連れ出すのもお約束。一年女子たちが妙な態度で見送る姿。さらにいうなら、ふたりの消えた後のすつきりした空氣。この差はなんなのだろう。

「佐賀、大丈夫か」 健吾の声にはるみが振り返つた。杉本のい

ない席をちらつと見やつて、

「私はもう大丈夫だから。健吾、私は平氣」 手の込んだ編み込み髪を軽く触れるようにして、微笑んだ。はるみをめぐる状況もだんだん凪いでいるようだつた。桧山先生が女子連中にどんなことを言い渡したのかは読めない。ただ、連中が杉本に対して少しづつ距離をおいてきているのはあからさまだつた。杉本が何かを

発言しようとするとき、桧山先生は即座にシャットアウトする。

「君が礼儀をわきまえるまでは、一切答えることはしない」

見事である。一度は拍手が沸いた。女子たちが静まりかえった。

「杉本、君がきちんと場をわきまえることのできるようになるまではな」

自然と桧山先生に対する女子たちの接し方は、敬語をきちんと使つてゐる。なんか卑屈な態度が目立つ。男子たちとプロレスネタで和み合つてゐるのに比べて、桧山先生は女子たちに対するのみ、礼儀をきつちりと要求してゐる。

「きちんと、目上に礼儀を守る人間であること」　　なんで男子は関係ないのか聞いてみると、

「男子たちはきちんと礼儀をわきまえている。はめを外しても、きちんと新井林の号令で礼をしている。気持ちがきちんと入った言葉遣いをしている」

のだと。杉本と花森以外の女子たちは、何かわからないがそれに従つてゐた。桧山先生の言い分については少々、男尊女卑的においがなくもないが、自分に都合よければそれでいい。健吾は一切かまわずに、シャープを弾いて遊んでいた。

「いつたい何があつたんだろうな。佐賀、桧山先生にいつたい何言われた」

「他の女子はみな、『このままでじめをするようだつたら、学校側で処分の対象になる』みたいなことを、言われたみたいなの」

「そんなことできんのかよ」

はるみを無視した女子たちについては当然のことだと思つが、そんな処分の方法があるだなんて聞いたことがない。

「私も知らなかつたけれど、最悪の場合は退学処分なんですって」

「じゃあ杉本なんてさつさと追い出せるつてわけかよ。

「でも、退学まではしなくとも、罰がこれから増えていくから覚悟しておけつて言われたんですつて。私に話し掛けてくる子たちがそういう言つていたの」

話し掛けてくる子の個人名をはるみは口にしなかった。友だちと思つていなかつた。

「健吾、退学なんて、させることできるの？ 本当に？」 「知るかよ。そつたらこと」 はるみは健吾に寄り添い、ふうっとネクタイの襟元へ息を吹きかけた。

「私、いじめられてたのかしら」

「あたりまえだろ！ 無視は十分そういうもんだ」

「別に、私、そんなの気にしてないのに」

いらいらしてくる。怒鳴りたくなる。

「私、クラスの人たちのことを、かわいそうだと思つてゐるだけなのにね」

「俺だけは違うよな」

反り返つて健吾は尋ねた。答える代わりにはるみは瞬間、健吾の手首を握り締めすぐに離した。

休み時間そろそろ終りか。ちょうど再接近した健吾の側を、杉本がひとりで通り過ぎていった。一瞥のみ投げて自分の席に戻つた。全く、表情を変えないまま。

一時間目の体育が終り、グラウンドから帰つて来た健吾が玄関で靴を履き替えていた時、立村に呼び止められた。

顔色は相変わらず真っ白け。目の周りにはくま。

相当、消耗してゐるに違ひない。ドリンク剤を飲めといいたかった。あえて返事せずに黙つて立ち止まつた。

「あの方、新井林」

「なんか用つすか」

避けていたのは向こうさまなのだから、健吾にはなんの引け目もない。

ただ、本条先輩の「大人として」という言葉に敬意を評し、「でます」体を使うことにした。

「この前は、悪かった」

「別にあやまつても、うりょうなことはないけど」

「もう一度だけ、頼みたいんだ。図書室に来ても、うりえないか」

時計を覗き込んだ。デジタルウォッチの螢光色が緑に光った。

「練習これ以上さぼりたくねえけど」 「昼休みでいい」

茶室の裏で泣きそうな目をしてすがつたあのまなざしとは違う。

なにか、覚悟の上で切り出した、そんな顔だった。

本条先輩に縁切られたのがそうとう答えてるのか。こいつ。

俺は「大人」だ。こいつよりもはるかに。

だつたら、どうする？

咽元から飛び出してきそうになるガキっぽい本音を飲み込んだ。

健吾は五秒数えた後、ゆっくりと答えた。

「わかりました。すぐに図書館で」

「二人がけの椅子で待つていいから」

心なしか、お辞儀をした風に見えた。立村はもう一度健吾を見つめ返して、背を向けた。二階の教室に戻つていったのだろう。階段を駆け足で上がる音が聞こえた。

たぶん本条先輩に「もし新井林の納得する案を出せなければ、縁を切る」と言い渡されてしまつたのが堪えているのだろう。なにせ「本条・立村亦モ説」を謳われるほどの仲良しだったのだから。一方的に振られたようなものだろう。健吾からすると、単なる痴話げんかにしか見えないが。ただそこらへんが立村のガキたるゆえんで、真つ正直に落ち込んだんだろう。影で本条先輩が、懸命にかばつていたのを知らずに。

けつ、だからそういうとこがこいつガキなんだよ。

健吾はポケットに時計を外してしまいこんだ。どうも腕にかかると重たくていらいらする。ドリブルする時に腕がだめになるんでないかと心配だ。

俺は大人だ。あなたの言い分、まずは本条先輩の言つ通り、

「大人」の目と耳で聞いてやるわ。

約束は昼休みだった。給食をさつと腹に押しこんだ。育ち盛りは腹がすぐのだ。はるみにだけ日配せした後、健吾は廊下に出た。「青潟大学附属中学スポーツ新聞」の最新号がすでに公開されている。全部バックナンバーにしようといつ声も上がっているので、とりあえずはるみに持ち帰らせている。

冬休み、それぞれの部活の予定および合宿関係について。冬になるとなかなかネタもなくなるので、健吾の案にて冬休み中の合宿日程をすらっと書き並べた。

結構評判がいいらしい。来年こそは、「青大附中バスケ部勝利!」の知らせを書き込みたいものだ。その時は特別バージョンの用紙を使つことにしてよつと健吾は決めた。

三階の図書館に向かい、すぐに扉を開いた。

図書局員たちがカウンターでなにやらアニメ関係の話題で盛り上がっている。いかにも試験期間終了といった雰囲気だつた。あと一週間もしないうちに冬休みだ。入り口からも氷柱が太く長くぶら下がつているのが見える。健吾は氷柱を背負つた格好で席に付いて立村に近づいた。背中の書籍棚に並んでいるのは、誰も読まないような古臭い道徳児童書みたいなものばかりだつた。暗かつた。

「すまない。無理言つたな」

「なんか」

難しい。やはりいきなり立村に対して「敬語」を使うのはしんどい。

目の前の立村は静かな佇まいのまま立ち上がつた。相変わらず乱れひとつない格好だつた。健吾を見つめる目は、茶室の陰でネクタイを掴んできたあの時よりもおとなしかつた。潤みもない。それ以上ものは見出せなかつた。

「ここでは人がいる。向こうに行こう」

指差したのは、百科事典の居並ぶ一隅だつた。窓側はめいっぱい

光の入る形だが、置かれているのはかなり昔の百科事典一式と、旧かなづかいの背表紙の本だけだった。たぶん、過去三年くらいは誰も棚をいじつてないに違いない。そこには高いところから本を取るための脚立が一台置かれていた。立村は脚立の踏み台に手をかけ、健吾が来るのを待っていた。

大人からみてこいつはどう見えるのかつてか。

淋しそうな奴だ。立村はブレザーのポケットから、黒い手帳を取り出した。下のところに金で型押しされているものだった。かなり使い込まれていてだけあって、光沢が鈍かつた。開いて後、唇をかみ締めるようにして目を落とした。そのままゆっくりと健吾に向き直った。

「今回のことには、俺が一方的に新井林へ迷惑をかけたようなものだ。すまなかつた」

頭を下げず、しつかりと瞳を見つめてきた。

「いくつかのことについてできることはみな片をつけておいた」「片つてなにを」

するんですけど、と丁寧語は使えず、言葉を切つた。立村の声は細かつたけれどはつきり聞こえた。

「たぶん、桧山先生がそのことは、すると思つ。それに任せておけばすべてが終わるだろう。そして新井林、お前が俺について聞いてきたことはすべて本当のことだ。先輩と思えないのも当然だ。だからせめて俺のできることだけ、こちらにまとめておいた。俺がお前に提供できるのはこのくらいだから」

手帳から一ページ、丁寧に破り取り、健吾に差し出した。

受け取つた。ミシン目のところが全く破れていない。毛筆の文字みたいな、上品な筆跡が並んでいた。

――青大附中内の委員会と部活動の関わりについて

評議委員会……演劇関連と学外渉外関連（来年以降の予定）

規律委員会……美術関係および写真関係（青大附中ファッショ

通信の発行など年四回)

音楽委員会……文字通り音楽関係。音楽関連の大学を目指す人向け。

保健委員会……医療関係および病院関係、また医学部を目指す人の溜まり場

体育委員会……体育系部活動関連を一通り網羅。

学習委員会……文芸部と理科系の部活動を兼ねる。

その他、文集委員会、美化委員会、図書局、放送局など。

生徒会は主に渉外活動中心だが、来年以降は評議委員会にも渉外関係の活動を求める予定。

「委員会最優先主義」の内訳が、健吾もわかつてゐるようでわからなかつた。評議委員会の連中がやたらとステージもの好きだとうのは辟易していただけれども、他の委員会も相当深いことをしているとは思わなかつた。特に規律委員会については、次期委員長の南雲先輩がかなり女子人気ありということしか聞いていなかつた。單に制服の違反チェックをする集団ではなかつたらしい。

「これってどういう

ことですか、とはつなげられず、また言葉を切つた。

立村は健吾の手元で揺れている紙を見つめながら続けた。

「現在の青大附中委員会活動の流れみたいなのをまとめておいた。これから参考にしてくれないか」

「これから参考つて、いつたい

いいたいことがわからぬ。

「来年以降は俺が評議委員会を仕切ることになるが、たぶん学校内よりも学校外の活動が中心になると思うんだ。これにも書いたけれど、生徒会と一緒に他の公立中学との交流会を活発に行おうとか、それこそ部活動との兼ね合いも考えようとか、いろいろな案が今出ているところで、俺もちょうど検討してたところなんだ。新井林、今作つている『青大附属スポーツ新聞』のことなんだが、お前ひと

りで続けていくのは正直なところ、かなり困難だと思つ

あんたとは違うぜ、何考てるんだあほんだら。

いかん、大人の意識。引っ張り出す。

「この紙にある通り、体育系の部活動については体育委員会がかなり詳しい。お前が駆けずりまわつて探し廻る情報を、早い段階で手に入れていることが多いらしいんだ。俺も知らないけど。それから写真なども規律委員会にかなりプロはだしの奴がいると聞いた。あそこは実質美術関係についてなら逸材のてんこもりだからかなり面白い面子が揃つているはずだ。それから音楽委員会。合唱コンクールの時くらいしか出番がないと言われているけれど、暇な時にはバンドとかコンサートとか、いろいろ練習していると聞いたことがあるんだ。臨時吹奏楽みたいなこともやりたいと話していたのを聞いたことあるんだ。だから、もし応援などでそういうのが必要だつたら、音楽委員の誰かに声をかけてみるといいかもしない

よどみなく立村は述べ立てた。最後に、

「あとで次期委員長の名前とクラスもこちらで用意して渡すから」「なんで、俺に？」

さつぱりわけがわからない。今聞いた感じだと、立村のしゃべつたことはかなりのトップシークレットなはずだ。そう簡単に、一年坊主にしゃべりまくることではないような気がする。しかも、各委員会の次期委員長関連もとなると。いつたい立村は何を言いたいのだろう？ 一時は殴らせるとまで言い放つた相手に対してだ。

「なんでそんなこと俺に言つんですか？」

立村は手帳を閉じ、もう一度健吾を真面目に見つめた。

「再来年の評議委員長は、新井林、君を指名したいからだ

自分の口がぽかんと開いていくのがわかる。

あんた、今、なんて言った？

立村の表情は変わらない。様子を伺つてゐる風にじつと覗き込んでいる。

「評議委員長、って、君つていつたい」

「今年の中でも評議委員長としてふさわしいのは新井林だけだと判断したってことだ」

「けど、あんたそれでいいのかよ！」「

激するものが確かにある。開いた口を急いで閉めた。もつといちど「ああ？」とつぶやき、健吾は立村に一步近づいた。さすがに図書館、音声は低いけれど、腹からどすは利かせて。

「あんた俺を嫌ってるだろ、あんた俺を殴りたかつたんだろ。俺よりもあのの方を本当は気に入ってるんだろ。なんでだよ、今度はそれでだまし討ちしたいってのかよ」

「違うよ。新井林。俺の判断で、杉本よりも君の方が評議委員長としてふさわしいと思つた、それだけだ」

おびえずかすかなやわらぎとともに立村は答えた。おとなしいまなざしと共に。

後ろの窓から伸びた氷柱に雪が降りかかるのが見えた。立村の表情だけが、それを溶かすかのように温かみをもつてるように見えた。茶室の裏で見たような、凍るまなざしではなかつた。

「まだ俺も正式な評議委員長として任命されてないし、来年果たして評議委員が元のままかどうかもわからない。状況はかなり揺れ動いてる。でも新井林を俺の次にしたいってことははつきりしている。君なら一年連中をまとめるだけの力を持つていて、俺なんかと違って女子受けもいい。新しいことをどんどん切り開いていくだけの能力もあると、俺は思つていてる。それに」

言葉を切つて、健吾の手元にある紙を指差した。

「来年以降、俺としては評議委員会を学内だけではなくて外に出して活動させる方向を取りたいんだ。できれば生徒会とか部活動とかともうまく繋がつていける形にしたい。本条先輩のように強引なくらいひつぱつしていくだけの力が俺にはないから、これまで通りのやり方では評議委員会が持たないと思う。学内関係は部活動と一緒に協力して、人数集めて盛り上がりしていく方がいいんじゃないかなって、

前から思つていた。新井林の企画した「青大附中スポーツ新聞」は、いいタイミングだったし、俺も全面協力したい気持ちはあるなんていきなりひとりで語るんだよ。あんた。

妙だ。立村にしろ本条先輩にしろ、どうしていきなり健吾の「」機嫌を取ろうとするのだろう。いつもの健吾だったら、すぐに噛み付いてやつただろう。でも、あえて大人モードで話を聞いている以上、黙るしかない。抑え抑えて健吾は立村の渡した紙きれを見つめた。

「来年二年に入つてからぜひ、新井林には学内の委員会と部活との繋ぎ役をぜひやってほしいんだ。もちろん部活のからみもあるだろうし、決して無理強いはしない。評議委員会は一の次でかまわない。新井林の代になつたら部活動より評議委員会を下ろしてかまわない。できれば部活動も評議委員会も生徒会も全部取り混ぜた感じで活動したいと思っている。適任だと思う新井林、君にすべてを任せたいんだ」

なんでだよ、なんでだつて。 情けなさ過ぎる。動搖している。頭の中がぱにくつてる。

言葉が出てこなくて唇が震えている。 評議委員長任命の内定は夏休みの評議委員会合宿で行われると聞いたが、まさかこの場所でてくるとは思わなかつた。それに立村のお気に入りたる杉本をなんで外したのか？ 保身なのか、なんなのか。本条先輩の話してい立村の像がいきなり重なつてきて、わけがわからぬ。

いつのまにかこいつに取り込まれるつて、このことかよ。

大人の目で、大人の視線で、大人の考え方。
やつと、大人の言葉が流れ出た。「君」に健吾の「」一人称が変わった段階で。

「最初は杉本を指名するつもりだつたつて、それがどうしてだよ」「半年以上それぞれの性格を考えて、決めたからだ。俺なりに判断したつてところだ」

「俺はあんたに相当ひえこと言つたけど、そんな恨みも捨ててか

よ

「新井林の『うつ』とは、すべて本当のことだ。ただふたつだけ頼みがあるんだ」

健吾は反り返つて立村の言葉を待つた。

「たぶん、このことが判明したら、杉本は冷静ではいられないだろうと思う。俺もかなり気を持たせる言い方ばかりしてきたから、当然だと思つ。もしかしたらまた新井林や佐賀さんに、辛い思いをさせるかもしれない」 「そうだな。確かに。あんた正しいよ」

逆恨みはある女の特許だ。背がぴんと伸びる。

「桧山先生もあの調子だと手加減をしないだろう。先生たちのやり方には口出しえかない。俺も一年のことについては、今のやり方が限界だ。だからせめて、お願ひだ。杉本が一年B組に卒業までいられるよう、せめていじめられないようにしてやつてもらえないか。仲良くしてくれなんて言わない。ただ、男子連中が無視するだけでいい。存在しないものだと思うだけでいい。手出しだけはしないでほしい、それだけなんだ」

「俺たちにそんなことできるってか」

「今、新井林が一年の野郎連中に対して『杉本に一切手を出さない』つていうあれだ。三年間、有効にしてやつてほしい。無視される辛さとか惨めさを味あわせるなとは言わない。ただ、実力行使だけはやめさせてほしいんだ。今、近所では杉本の家を村八分にするような運動が起こつていても聞いている。もう完全に杉本は制裁を受けているんだ。自分がおかしいんだといつうことをいやといつうほど言われつづけているんだ」

「じゃあ反省しろつて書いてえな。第一あんた、どうしてそこまであの女をかばうんだよ」

立村は臆することなく、答えた。

「俺が杉本について言つたことはみな、俺が毎日感じてることばかりなんだ」

すべてが繋がった。ずっと感じていて、でも口にできなかつたことがやつと理解できた。

同じ穴のむじなつてことを認めたつてわけかよ、あんた。

立村は健吾の隣りに並んでいる、埃臭い本棚を指差した。

「今棚に並んでいる本、これを数えてもらえるか？」

「はあ？」

ざつと田で追つて数え終わった。一十冊。

「早いな」

「あたりめえだろ」

次に立村は、指で一冊一冊、題名を抑えながら何かをつぶやき始めた。

「いち、に、さん、し、ええと四、五、六……」

実にまどりつこしかつた。なんとか一十冊まで言つたところで、

「十九冊じゃなかつたよな？」

「何考へてるんだよ。二十冊に決まつてるだろ」

なんと自分で「にじゅう」と言つたのを忘れてる。度忘れか。

もう一度田で追つて確認した。立村もまた指で押さえながら数えていた。今度は無事二十冊にたどり着いたようだつた。埃で灰色になつた指を見つめていた。

「俺はものを数えることが苦手とこより、どうじても普通にできないんだ。途中でかならず数字が違つてしまつ。遠足の時の整列でも、点呼を取る時に一度も数字が合わさつたことがない。だから点呼はいつも、人の肩に手を置いて、どこまで数えたかを忘れないよう口で言いながら数えている」

「それでも自分で言つた数字を忘れるつてなんだよ」

「そういうことなんだ。いくら自分ひとりでやううとしても、うまくいかない。普通に数えて普通にあわせようとしても、どうやればいいかが、俺はわからないまま今まできた。だから杉本が、新井林たちの感じる普通というものがわからぬのも、なんとなく俺には通じるんだ」

「けつ。それが言い訳だつてんだ」

「その通りだと思う。自分がおかしいから、自分の感じ方が普通じゃないからといって言い訳するのは、きちんとした感じ方をする人たちに迷惑だつて俺も思つ。だから、毎日どうすれば、周りの人たちの迷惑にならないか、どうすればいいかを考えてる。勘違いばかりしてるし、毎日数え間違いを繰り返しているけれど、そうしないと受け入れてもらえないとわかっているから、なんとかしようと思つてゐる。けど」

もう一度、立村は指を本棚に置いたまま、背を眺めた。

「きつと杉本も同じなんだつて、思うんだ。どんなに数えても一冊にならない理由がわからないんだ。きつと杉本は、新井林とふつうの話をしてみたかつたんだろう。佐賀さんとずっと友だちでいたかつたんだろう。でも、どうすればいいのかが今だにわからないんだと思う。他の人たちに迷惑をかけている以上、杉本が制裁を受けるのは当然のことだらう。それをするなとは言えない。ただ少しだけでいい、杉本に情けかけてやつてもらえないか？」

「情け？」

「俺のような数え方をする奴と新井林たちとは、勝負付けが終わつてゐるんだから」

向き直り頭を垂れた。動かなかつた。

健吾の中に何かが動いた。

勝負はもうついているだらう。

ずっと立村と言い合ひを続けてきた。殴られて当然のことをぶつけてきた。先輩としてどうして腕力勝負に出ないのかいらいらしていた。いつたいこんな馬鹿野郎のどこがよくて、みんな立村を高い評価するのかがわからなかつた。本条先輩の話でだいぶ見方が変わつたとはいえども、どうしてみんなは立村の言つことを素直に聞くのか理解できなかつた。

退学も辞さない性格、か。

すべての感情を「大人」モードに切り替えてみて、初めて見えたものがある。

立村は今、すべてを失うかわからない足場のもと、物を言つている。

いくら腕力的に劣つてゐるとはいへ、後輩に對して頭を下げ、罵り文句を受け止め、再来年以降の評議委員長の座まで用意しようとする。そこまでしてなぜ、あの女をかばおうとするのだろう。受け入れてもらう努力もしないでずうずうしく迷惑をかけるあの女を。

立村が何度も訴えた言葉が蘇る。

どんなに感じようとしたつて感じられないんだ。どんなに受け入れてもらおうとしても、そのやり方がわからないんだ。普通の人たちがどうすれば喜んでもらえるか、わからうとしたつて、わからないんだ。だから、自分の感じたことを必死に訴えるしかないんだ。

健吾の返した言葉を思い出す。

じゃあ、あんた、普通の人間に迷惑かけるなよ。努力しろよ。けど、あんたは。

立村の目を見た。指の埃を見つめた。

こいつは、努力してるじゃねえか。十分に。

敬語が混じらない。ただけんか腰にならないように気をつけた。立村にあわせて静かに。混乱していたあの言葉をすべて吐き出すかのように。

「あんた、前から言つてたよな。杉本は精一杯なんだつてな。必死に努力して、懸命に俺や佐賀と仲良くしたいから、ああいう嫌がらせをするつてな。俺としたらたまつたもんじゃねえが、やつとわかつたよ。あんたも同じことしてたつてことだよな。がむしゃらに俺たちと近づきたかったってことだよな。本条先輩や清坂先輩や羽飛先輩とうまくやりたかったってことだよな」

立村は黙っていた。そのまま続けるように促すまなざしのまま。

「それがあんたの保身のせいだつて、この前までは思つてた。ああ、俺もガキだつた。噂を鵜呑みにしてたからな。けど、本条先輩から話を聞いて、あらためて今までのことを考えなおしてみて、あんたもまんざら馬鹿じやないし、頭切れるしつて思つた。俺を評議委員長にしたいというのが本心だつたというんなら、俺もあんたを見直したいつて思つてる。少なくともあれだけ俺が言いたいことを言つておいて、うらんでないつていうんならな。けど、俺ももうひとつだけ言わせてもらつてんだ。あんたはな」

横目で人影がないのを確かめた。

「人並み以上に、俺たちに受け入れられようとして、努力してるじやねえか。あの馬鹿女と同じ気持ちを持つてるかもしれないかもしれんけど、本条先輩にも、清坂先輩にも、羽飛先輩にもちやんと受け入れてもらつてるじゃねえか。青大附属の評議委員会にも、一年の連中にも、みんなにさ」

つぶやきながら、立村の後ろに見える氷柱に語りかけた。

「そういう努力をしてくれる女だつたら、俺も杉本を許せたかもしれねえ」

視線を逸らさない立村に、もう一度健吾は言い放つた。

「けど、あの女は一切近寄るうつて努力のかけらも見せねえ。佐賀に謝る気もなければ、さんざん悪口言われて塩かけられている親のこと考えて頭を下げようともしねえ。どんなにあんたが一生懸命杉本のために走り回つても、ほら、一切あんたを無視したままだろ？」

あんたが頭にどういう問題抱えているか知らねえけど、あの女はあんたをかばうどころか自分の武器にして桧山先生を責めたんだぜ。あんた、杉本のどこが気に入つてかばいまくつてるんだよ。あの女の性格が悪いことを、わかつていてなんでだよ。俺が徹底してむかつくのは、自分が他の奴と違うことを正当化して押しまくる奴であつて、受け入れられる努力をしている人間じやあないんだ」

はつと、立村の目に搖れが見えた。

「評議委員長のどつたら、うつたらはまだ先のことだよな。だから、今のは後回しだとく。けど、これだけは言つとく。あんた、自分で思つてゐるほど馬鹿じやねえし、俺が今まで言い放つたような最低馬鹿野郎ではないつてな。立村さん」

ちょうど鐘が鳴つた。健吾は明らかに震え上がつた表情の立村を取り残し、図書室を引き上げた。

勝負は、ついた。

その11 静まり返つた理由

世の中みんなガキばかりつてことだ。健吾が青大附中で得た真理とはそれである。ここは一部の出来た大人を除いては、みんなおしゃぶり加えてばぶばぶ言つているか、水色のスマックを羽織つて走り回つている幼児に過ぎない。その中で一步でも早く、大人になるためには、気付かなくてはだめだつてことだ。ガキがガキでいることのぐだらなさ、情けなさを鏡で見て、きやあと尻尾巻いて逃げだなくてはならないつてことだ。

立村との話し合いが、結局健吾の優勢勝ちで終わつたのをきつかけに、ゆつくりと風車が回り出したような気がする。それまではずっと健吾がひとりで立村を罵りつづけていたのだけれども、あえて自分を「ガキ」と自覚したのか、わざわざ自分から風を起こしてくれるよつになつた、といつのか。

俺が、評議委員長か。

立村ももちろん、平常心ではなかつたに違ひない。健吾があえて「立村さん」と呼びかけた時、明らかに動搖していた。ちょうど鐘が鳴つたから、それ以上の展開はなかつたけれども、でも確かに健吾は立村を見下ろすことができたと思う。軽蔑の気持ちなく、ただ、懸命に涙ながら訴える幼稚園児を見下ろす、保父さんのように蹴りを入れずに見下ろすことは、気持ちいい。

怒鳴らずに、あつさりと許してやることは、楽だ。

図書室を出て行つたと同時に、健吾の周りで別の風車が回り始めたことに気付くのはすぐそこだつた。英語の授業は桧山先生だつた。ほとんど授業はぬるま湯状態だつた。予習も手抜きのままだつた。

「起立、礼、着席」

健吾の号令で、みんなだらだらと一礼をする。視線が健吾に刺さるので、顔を上げてみる。桧山先生がじいっと健吾に笑み含みのまなざしを送っていた。

「なんつすか」

「まあいい。とりあえず、B組は一通り授業も消化しているし、今日は臨時のホーメルームと行こつか。本当は終業式に一発かますかと思つたんだが、やはり一二十四口はみな、予定があるだろうしな」ふたたび健吾に意味ありげな視線を送る。そんなの知らないと言いたい。「自分の方こそ、二十四の男らしく、なにかあるんだろうか。

杉本の方をうかがつと、相変わらず直角に座り、まっすぐ顔を上げていた。

口をしつかと結び、一点を見つめていた。　　今度は杉本を一瞥した後、桧山先生は軽く腕を回し始めた。

「まだ先のことなんだが、来年、四月以降の委員選出方法について、みんなから意見をもらいたいんだ」

切り出した。少しざわめく。健吾もぴんとこない。

「青大附中の伝統として、今まで一年時に決まった委員で三年間通すという方法が、どのクラスも取られていると思う。もちろん三年間持ち上がりなんだからそれも一つの方法だろうな。みんなが同じ目的で一生懸命やるのだったら俺も反対はしない。あくまでも、順調に行つていれば、の話だが」

順調に行つてれば、な。

まだ繋がらない。ちらちらと健吾の気をそらさないよう顔を向ける桧山先生。

「だが、みんなも知つてゐる通り、この一年B組では委員会制度というのが、あまりよい方向に進んではいないのではないか、という気がする。少なくとも、俺がこのクラスを一日見た時から、それを強く感じていた」

背中越しに男子連中の、「一部、だけな」とわざやく声が聞こえ

る。だんだん反応が男子女子共にささやきで流れている。

「その原因はなんなんだろう、と、鬪病中の溝口先生や、他の先生たち、そしてクラスのみんなに少しずつ意見を聞いていったんだ。そしてやっと原因が判明したというわけだ。遅くなってしまったのが本当に申しわけない」

「その、原因とは？」

大向こう、一声掛かる。調子いい男子だ。

歌舞伎役者のように一度両腕を広げ、見得のポーズを取りおどけた。桧山先生は正面に向かい、呼吸を整えるようなしぐさをした。

「杉本、立ちたまえ」

「何か理由があるのですか？」

座つたまま杉本は、姿勢を崩さずに答えた。

「恥ずかしいのかな、僕の言葉を聞くのが」

「恥をさらさせるような話し方でしか対処できない人間と話す必要があるのでしょうか」

「君はまず黙つて僕の話を聞き、その後言いたいことを話す時に立ち上がりたまえ」

静まり返つた教室。呼吸ひとつ、鼻をすする音ひとつ、響きが跳ね返りそうだつた。健吾は悟つた。

勝負をかけたか、桧山先生。

観客になるべく、健吾は耳を清ませた。

「このクラスに、女子中心のいじめがあつたという事実は、男子の諸君から何度も忠告を受けている。ただ、噂だけを信じるわけにはいかないので僕は、毎日のようにみんなの様子を觀察していた。三日ぐらいで原因は杉本が女子を扇動して、佐賀を無視しているということが明らかになつたというわけだ」

そんなにかかったのかよ。先生。

心の中でつつこみを入れる。

「しかし、いじめられている佐賀を呼び出しても、本当のことを言わない。それどころか、口癖のように『杉本さんはかわいそうちら』の一点張りだ。友だち同士の行き違いに口出しをしたくない。よくあることだ。だが、なぜクラスの女子たちまでもが、佐賀に話しかけないのか、それが不思議でならなかつたんだ」

桧山先生は杉本以外の女子たちをじろりと眺めた。男子に向かたものとは違つ、冷たい視線だった。

「女子全員、起立」

恐る恐る動く女子たちの椅子の音。響き渡つた。健吾が見る限り、ひとりだけ座つたままの女子がいる。当然、あの不良女、花森のみ。「何度か女子たちにも集まつてもらい、意見を聞かせてもらつた。やはり、ひとりひとりは佐賀に対してもう一度チャンスを与える。佐賀を無視したことを、反省しているか」

かすかに、「はい」の声が角々から聞こえた。

「声が小さい」

「はい」

ぐぐもつた声と、途中涙声あり。全員とは思えないが、一通り多數決で行くとなんとかなりそうな数だった。

「口先だけなら何でもいえるが、このまま立つたまま聞きたまえ」明らかに信用していない顔で桧山先生は続けた。はるみがなぜか立つていてることに気付いたのか、

「佐賀、君は座つていいよ」

おずおず、椅子を引いて杉本に振り返った。困りきったという顔だった。一切無視して一点集中している杉本は、動かなかった。

「どういう理由があるにせよ、いじめは許されない行為だ。男子一同もその点についてはみな賛同してくれた。一学期から、何度も杉本に対して佐賀をいじめるのをやめるよう抗議をしていたのも知っている。少々荒っぽいやり方だったらしいが、常識が通じないものにはそうそう簡単に言葉を通じさせることはできないのだから」

今度は両手を組んだ。桧山先生、結構役者だ。

「本当だつたら正義感が行き過ぎて、杉本をさらに叩きのめそうとする疎きもあつたと聞く。それをあえて押さえたのが、新井林、君だな」

いきなり当てるなよ。

女子の一部が声を上げて泣き出した。泣けばすむと思つてている奴らだ。

「杉本に反省させようという努力を、新井林は懸命にしていた。男子連中もそれはよく見ていたと思う。もちろん女子も気付かないでいたわけではないだろう。でも心が弱すぎて醜い自分を反省することができなかつた。そういうことだ。そしてまだ、自分を見つめられず反省できない人がいる」

杉本と桧山先生、目が合つた。一切逸らそとしない杉本を、桧山先生はそりかえつたまま見下ろした。

「杉本、君はずつといじめられていたと勘違いしていたようだが、周りは一生懸命に君の間違つた行動をやめさせようとしていただけだ。理由については問わない。しかし、佐賀が懸命に杉本のことを許してやつてほしいと頼んで、君と友だちでいたいと言い続けるのに、一切それを受け入れようとしないのはどうしてだろう。仮に佐賀になんらかの非があつたとしてもだ。頭を下げられたら当然、心の広い人なら許してあげようとするだらう。佐賀のように、君に何をされてもがまんして、小学校時代の仲良しだつた杉本を許そうとしているんだ」

「関係ありません」

一言返しただけだった。

「君はそうされたことがあるか」

「すべての男という生物にされてきたことが答えにはなりませんで
しょうか」

不謹慎にも噴出す奴。気持ちはわかる。

「君はその男子たちに何をしてきたかな。君は男子たちに何を言つ
てきたかな。男子は馬鹿ばかり。男子は頭がおかしい。男子たちは
常識がない。確かに君に悪口を叩いていた男子が多かつたのは事実
だ。しかし、そうするきっかけを作つてしまつたのは、杉本、君の
方がほとんどではないかな」

「私にしたことはいじめではないということを言いたいのですね」「
言葉は一切揺らがない。

「本来、いじめはどういう理由があろうと許されないことだ。だが、
君は自分が感じている以上に男子たちに対し、何を言つてきたかを
考へるべきだ。君のされてきたと思つていてこと以上に、ほかの人
たちは迷惑をかけられているということをだ。ふつう『嫌い』とい
われたら辛いだろう。ふつう『死ね』といわれたら哀しいだろう。
ふつう『不細工』『デブ』とか言われたら気にしている人は絶望す
るだろう。自分がそう言われたら、と想像したことはないのかな」「
想像するまでもなく、そう言われ続けてきたのでよくわかります
が、私はなんとも思いません。言うべき相手に真実を伝えるだけで
あり、人を傷つけてまでする必要はないと思います。事実、女性に
はそういうことを言つ必要のない人ばかりですので、私は一言も言
いません。私を罵る人々がどういう人間かを伝えるために言つだけ
です」

「ふ、子どもだな」

ひとりごとのようにつぶやいた。桧山先生の口元がだんだんほこ
ろびてくる。奇妙な笑みだった。目が笑っていない。鬼のようなま
なざしだった。

「中学に入学する時に、僕は君たちを大人扱いしたいと思つてきた。青大附属の校訓は『紳士であれ、淑女であれ』だからな。どの先生たちも、多少君たちのやんちゃぶりには目をつぶつてでも、大人として扱つてやりたかった。だが、杉本、君はそれを裏切つたんだよ。わかるかな」

「勝手に決め付けられるのは迷惑です」

「そうだな。僕たちは、君がしていることを見て、判断することしかできない。杉本が佐賀にしていることはあきらかに、『いじめ』だ。懸命に仲良くしようとしている佐賀を、クラスの女子たちを利用して無視するという、人間として最も恥すべき行為だ。そして『ゆつくりと前かがみになり、杉本を覗き込んだ』。

「君は現在、評議委員だ。評議委員とは、クラスの代表であると同時に、クラスのみんなをまとめる仕事を任せられている。決して、委員会の中で演劇ごっこをしたり、派手な音楽を鳴らしてうつとりしている『部活』ではないはずだ。本当は、上下関係がはつきりして、部活動をするべきだったのではないかなど、僕はずつと思つていた。どうだろ?」

「評議委員として選ばれたのですから当然のことです。私が立候補したわけではありません」

「そうだね。君は一年の最初、入試成績トップで入学した。成績のいい人は、きっと人望があるだろうという思い込みの信頼を受けて選ばれたはずだ。だが、今の君はいじめの頭取としますましかえつている。君はどうしても『いじめ』だと思えないようだが、ふつうの人たち、一年B組の人たち、先生たち、みな君のしていることを『してはならないこと』だと思っているんだ。わかるかな。やってはいけないこと、なんだ」

「幼稚園児に話しかけるような言葉遣いは失礼です」「そう言わない」と、『理解』できないんだろう?」

初めて杉本の目がきっと見開かれた。

ガキがガキと言わされて反応したつてか。

手ごたえあり。さらに口のしつけ糸をほどきつつ桧山先生は笑顔を振り撒いた。

「杉本、家ではわがままがいくらでも通じたようだけれども、ここは学校だ。そしてここは青大附中だ。ふつうの感じ方をするふつうの人たちがたくさんいるんだ。もちろん君がしていることを『いじめ』だと思えないのだったらそれはしかたない。君がそう感じざるを得ないんだから。でもな、そういう感じ方をする人は、佐賀を始めとしたふつうの感じ方をする人に、どれだけ迷惑をかけているか、あらためて考えなくてはならないんだ」

「ふつうの感じ方？ まるで私が頭がおかしいという言い方をするのですね」

「おかしいとは言つていないよ。ふつうの人は、佐賀が君に無視されてどれだけ辛い思いをしてきたか、想像することができるんだ。しかし、君にはその力がない。そう思うだろうと、考えることすらしない。もちろん普通の感じ方ができるのならば、それは仕方ない。君の問題だ。君がこれからいっぱい怒られて、傷ついて、覚えていかなくてはならないことだ。君が大人になるためにはそれは当然のことだ」

大きく息を吸い、夜叉化した桧山先生は目を吊り上げて笑つた。
「だが、君が普通の人への思いやりをマスターするまで、佐賀がいじめられていい理由はない。そのために杉本、君はもつと人への思いやりを勉強してほしい。人がどう感じて、どう考えるか。そして自分がどれだけ普通ではない感じ方をして、迷惑をかけつづけているか。それを勉強するために、ひとつ提案をしたい」

「提案とは」

ふたたび無表情に戻つた。

「来年、杉本を女子保健委員にしたいと思つ」

ちょっと待てよ桧山先生。評議外れるのは万歳三唱だけどな。

保健委員だつているんだぞ、うちには！」

現在保健委員の男女が顔を合わせ、すぐに女子、男子同士でささやきはじめた。立ちんぼうの女子たちも目を光らせ、いきなり杉本に視線を集中させていた。杉本だけが落ち着いたまま見据えていた。

「では、評議委員は」

「クラスのみんなであらためて、冷静に誰がふさわしいかを考えてもらつ。成績ではなく、人格として誰が一年B組をまとめるのにふさわしいかを、三ヶ月かけてクラス全員に考えてもらいたい。しかし、その際に杉本の選択肢はなしだ。君が学ぶべきは、クラスを率いることではなく、もっと人と触れ合つことだ。怪我をしたり具合が悪くなつた人を連れて行くときに、どうしたらしいのか、どうしたら楽になれるのかを勉強するのに、保健委員は一番ふさわしいものだと思う。自分以上に他人がどう感じているか、自分よりも傷ついている人がたくさんいること学ぶためにもだ。女子保健委員をやつている人には申しわけないけれども、あえてお願ひしたい。杉本を保健委員に回してやつてくれ」

女子保健委員がこつくり頷いた。

保健委員つて、確かに医者か看護婦になりたい人にお勧め「一
スつてやつじやねえか。おいおい、未練ねえのかよ。

健吾が男子保健委員の顔を探すと、露骨におえつと吐き気をこらえる真似をしている。先生も気付いたらしいが、注意しなかつた。

「本来委員は、クラス全員によつて選出されるべきものであり、教師が決め付けることについては何かおかしいのではないか」

「本来ならそうだ。しかし今回は緊急事態だ」

切り捨てた。

「委員会活動というのは、本来教育の一環として、君たちが勉強するきっかけを作る場所であり、部活とは異なることを意識してほしい。今、青大附中の委員会はほとんどが部活動と重なつてしまつてゐる。一度委員が決まつたあと、ずっと同じというデメリットも持つてゐる。今回のように、明らかに委員としてふさわしくない人間が出てきたら、当然それは変更するべきだ。それは、担任として当

りをしている花森を除いて。みながぱたぱたと顔を合わせてくる。

「だつて、梨南ちゃんは小さい頃から、どうしても男子とおしゃべりしてもうまくいかなくて、だから私がいつも間に立つてあげていたんですけど、それでもどうしてもダメだつたんです」

「立て板に水つて奴だ。はるみ、度胸全開だ。健吾は思わずひいた。「どうしてか、私もわからなくつて、梨南ちゃんがかわいそうなので、一生懸命友だちになつてあげたんです。今、青大附中に来て、やつぱり梨南ちゃんは男子たちにいやがられています。桧山先生は私のことを梨南ちゃんがいじめていると思つていてるみたいですが、梨南ちゃんは私と一生懸命仲良くして、つて言つてるんだと思います。ただ、ふつうの人にはそれが、そう見えないんだと思います。だから、私、梨南ちゃんが男子たちとつまくいくよになれるまで、ずっと友だちでいたいんです。かわいそうです」

「そんなこと、言つてないわ。いいかげんにしなさい、はるみ」

「低くつぶやく杉本。いさぎよいのか往生際悪いといふのか。

「だつて、うちのお母さんも言つてたもの。梨南ちゃんは生まれつき、そういうことがわからない人だから、何を言われても許してあげなさいねつて。私も梨南ちゃんがそういう人だとわかつていたから、私が守つてあげなくちゃつて思つたの。そうしないと、私以外だれも、味方がいなくなつちゃうでしょ。私、梨南ちゃんが何をしても、許してあげなくちゃつて思つたの」 女子たちの集団に、不気味な空気が漂う。ちょっとまづいぞ、佐賀。そう言いたい健吾だが、くちばしを挟む勇気はない。改めて思う、佐賀はるみ、ちょっと怖い。「生まれつきそういうことがわからないとは、どうこうことなの。いいなさい」

声が震えてる。杉本を何かが揺らしてくる。

比べてはるみの言葉は、一切揺れなかつた。

「聞いたの。うちのお母さんが話してたのよ。この前梨南ちゃんのお母さんがうちに謝りに来てくれたことがあって、教えてくれたのよ。『梨南ちゃんは生まれつきそういう感じ方しかできないから、

今度病院に連れて行きます』って泣いてらしたんですね。でも、梨南ちゃんが病院に嫌がるのも分かるわ。それなら私、ずっと梨南ちゃんを守ろうと思つたのよ。梨南ちゃんがふつうになるまで、私待つてあげようって決めたの』 静まり返つた。今度は鼻息ひとつ立てやしない。 桧山先生も息を呑んでいる。『それがどうしたの。私はおかしくなんてないわ』

それがすべてだ。

健吾の目には、男子連中はおろか、女子連中の顔がオセロのように一気に白くひっくり返されたように見えた。給食時間までは一切、杉本にたてつこうとしなかつたあの女子たちが、はるみの言葉を境にすべて、納得したように頷いていったのを。女子たちが向ける杉本への視線がずっと鋭く冷たく変わっているのを感じた。

佐賀、良くやつた。

あの次期評議委員長をまは、このことを、知つてたのか？

すべてがつじつま合つ。 健吾にいきなり評議委員長の座を勧めてきたのも、杉本に情けをかけてやってほしいと言い出したのも。桧山先生の出方をすべて読んでいたか、聞き出したか、その辺はわからない。しかし本条先輩から聞いた立村伝説を裏返せば、可能性はなくはない。杉本が来年の評議委員に選ばれないならば自動的に、評議委員長の座を与えることはできないわけだ。そういうことだったら、当然予定変更を強引に行うのも当然のことだ。つまり、杉本のプライドがとことん剥ぎ取られるのを、立村次期評議委員長はすべてお見通しだということだ。

まじかよ。

健吾はあらためて、つぶやいた。あいつはガキかもしれない。けど、怖い。

けど、俺だつて大人だ。

さつき立村と語つた時に見えたものが、すいと立ち上がつた。

けど、このままじゃあ、桧山先生がまた叩かれる。

先生の言つことは正々堂々、当然のことだけど、あの女はガキだ。救いようのないガキなんだ。ガキは何するかわからないんだ。立村について本条先輩がつぶやいた言葉が耳に残っている。

俺は、大人だ。大人だから、するべきことは、わかってる。

手を挙げた。すぐに指された。

「先生、いいですか。俺、評議委員としての提案なんだけど。このままじゃあ泥沼だし、佐賀、お前は座れ」

先生には悪いが、はるみが言つことを聞くのは、健吾の方だと思う。

「新井林、言いたまえ」

「ああ、言います。とりあえずこの審議、来年の四月まで待つてことはできませんかね」

「来年の四月？ 二年に入つてからか」

思わず行動に驚いているのか、桧山先生は早口だった。

「そう、どうせそれまで委員会の改選はまだだらうじ。それに一応評議委員会は部活動みたくなつてるから、他の先輩たちに迷惑をかけるのもなんかまずいかなつてことで」「そうか、まあな。二年、三年に罪はないもんなあ」

ちらりと杉本をにらみ、笑顔で健吾に向かう。

「そして、提案その二なんだけど、いいですか」

「おう、どんどん言つてみる」

女子連中が立つたままでけずつてくるのを跳ね返し、健吾は続けた。背を伸ばし、堂々と。

「今のことでの佐賀をいじめている馬鹿女子どもが反省したかどうかってのは、俺は信じちゃいねえですよ。先生もわかつてるだろ。いじめた奴ってのは、必ず後でしかえしするつて。だから俺が佐賀を命賭けて守る。それは続ける。でもし、一言でも佐賀にいちゃもんつけるようだつたら、その時は俺も黙つちゃいない。残念ながら

腕力勝負は女子相手に不公平なので、いつでもどこでも、先生に行司軍配持つてもらつて、裁いてもらつ。けど、それもうまくいく保証はない。でもうひとつ

健吾はもう一度椅子に低く座つている杉本を見た。
正面から見るのは、これで最後にしたい。

「杉本、お前がとことん腐つていいのはよくわかった。だが、俺は大人だ。紳士でありたい。だから、三ヶ月猶予をやる。三ヶ月、お前が評議委員として認めてやれるかどうかをとつくり、観察してやる。当然俺たち男子はいじめなんて姑息な技を使いはしねえ。暴力行為その他悪口一切、封じてやる。結果、お前が佐賀を始め他の連中に謝る気持ちになつたら、その時はその時で評議になるなり、その他の委員になるなり、判断が下るつてわけだ」

「あんたに言われたくはないわ。命令される筋合いもない」

「ああそうだな。俺はお前とこれから一切口を利く気もない。俺は紳士でありたいけれども、杉本を好きになることだけはどうしてもできない。これだけは理屈抜きでそうだ。ただ、いじめないことだけはできる。どんなにむかつくなれども、半殺しにしてやりたいと思つても、手を下さないようにしようとして、思うことだけはできる。それが俺の仁義であり、情けだ」

反応誰かしろ、と言いたいのだが、誰もしゃべらない。ひとりで盛り上がつて馬鹿みたいだ。健吾は指で鼻をすすつた。肝心要の杉本だけが、壊れんばかりの瞳で健吾をにらみつける以外は。

「情けなんてかけられたくないわ。だから新井林、あんたは馬鹿なのよ」

「俺の話はこれで終りです。桧山先生、ではお裁きを」

健吾は、わざと手を差し出すようにして、そのまま座つた。

「新井林、素晴らしいぞ。お前こそ、評議の鏡だな」

「俺は評議として当然のことをしただけです」

立村次期評議委員長との仁義を守つただけだつての。

前から、後ろから、指先だけで叩く拍手の音が聞こえる。最初ば

たぱたと、そして上から、斜め向こうから。あちらじらから。とうとう手のひらで叩く拍手で一杯になった。健吾が見渡すと、男子連中がオーバーアクション気味に手を挙げている。

健吾、最高だあ！

勝利だ勝利！

ざまあみる、馬鹿女！

「おー、やめる、黙れ」

もう一度健吾は立ち上がり、足をとんと踏み鳴らした。

「いいか、前から俺が言っていることを忘れるな。俺たちはこれら、卒業するまで、勝負に出たんだ。どんなに杉本にむかつくことを言われても、どんなに腹が立つても、暴力や悪口を言わないでがまんするつて言ひ、すっげえきつい勝負だ」

ほんときついんだぜ。七年どれだけ俺が苦しんできたかわかるかよ。

「だから、俺たちは正々堂々、その勝負に勝とう。紳士として、大人として、俺たちの考えが正しいことを証明するんだ。もちろん、杉本を始め、間違っていると謝ってきたら、その時は『大人』として許してやれ。佐賀が今だに杉本をかばうようにだ。すっげえしんどいことばかりだが、俺たちは絶対、やり遂げる。紳士として、大人として。わかつたな。そのことで反目する奴がいたら、その時は俺がぶん殴る」

握りこぶしを立てた。

健吾の筋肉は、中学に入つてからだんだんわり心地よくなつてきている。殴りがいある腕だ。

「杉本、これだけ言つてくれても、気持ちは伝わらないのか」

「あたりまえです。私をだしにしていやがらせをしているだけです」

桧山先生は音の聞こえるため息をついた。

「君はかわいそうな子だね。どんなに思いやりをもつてみんなが心配してくれても、反省することも、自分がどんなことしているか想像することも、できないんだ」

俺は大人だ。そして紳士でありたいんだ。

あらためて健吾は、はるみにふさわしい男でありたいと祈つた。
窓から覗く真っ白い空に願つた。

俺は、あの女を好きになることはできない。けど、佐賀のようにあるの女を許せるようになりたい。佐賀、どうしてなんだ。どうしてあんな女をかわいそうだつて思えるんだ？　あれだけ無視されつづけて、あれだけ顔を奪われて、どうしてなんだ？

女子連中のいじめは陰湿だ。桧山先生がいなくなつたら、すぐに反省したふりの女子が現れて嫌がらせに向かうだろう。杉本がいつ権力を取り戻すかわからないのだから。だいぶ雰囲気的に変わつてきているのが一安心だが、まだまだ危険であることは確かだ。健吾はあらためてはるみを守ることを決意した。

悪の根源たる杉本梨南のプライドをたっぷり傷つけたところを見せ付けられて震え上がつたに違いない。授業が終わつた後、女子の数人がおそるおそる杉本に近づいていつて、「杉本さん、謝つたほうがいいよ。先生、杉本さんになにか罰を与えるかもしれないよ」とアドバイスしていたが、

「謝るくらいなら、退学したほうがまし」

とつぶやき返していたのを聞いた。救いようのない奴である。

心底、腐つてるよな、あの女は。

健吾はあらためて思う。

俺だつて、あの次期評議委員長を「さん」付けで呼ぶことできめたつてのにな。

その12 正々堂々たる理由

杉本に近づく女子も減った。かといってはるみとしらじらしく仲良くすることもなかつたが。みな、桧山先生の言葉ひとつにおびえ、男子連中のけん制にうつむいていた。男尊女卑なクラスの完成だ。いじめ問題についてはあつさりけりがついたように見えるのだろう。いじめの先鋒だった杉本を絞り上げて、立場をなくしてしまつたのだから。叩いていたものが一転、あまされものになつたというわけだ。

もつとも杉本も再起不能のどん底に突き落とされたわけではない。二年の先輩たちは相変わらず杉本を図書室に連れ出しているし、あれ以来サボり不良女の花森なつめがしつかり学校に来るようになり、杉本を陰日なたなく見守っている。

この女の問題まで片付けてしまつたんだから、桧山先生の評価はうなぎのぼりになつて当然だ。

まあこんなもんだろ。先生。

もちろん健吾も、杉本の復讐心がいかに恐ろしいものかを身をもつて知つてゐるから、手を抜く気はない。断言した通りいじめという手段は取らないが、少しでも変わり身を見せたらその時はいかなる手を使つてもぶつぶつ用意がある。ガキが何をするかわからないのは、よくわかっている。

大人の自分が徹底して大人の憲法を貫くに尽くる。

終業式後はクリスマスイブということもあって、かなりプレゼントの話題で盛り上がつていた。ちなみに健吾の場合、新しいスニークを買つてもらつ予定だつた。はるみの家ではおとなしくケーキを食べるだけらしいとのことだが。

「行くだろ」

「うん」

約束していた通り、はるみとふたりで、この日は菊乃先生の家へ遊びに行くことになつていて。公認の恋人同士なのだから、せつかくだし甘いひと時を提供したい、とのお言葉だ。ちなみに赤ちゃんはすでに生まれて一週間くらいのこと。今はお家でねんねしているとのことだつた。

「赤ちゃん、女の子だつたんだつて」

「けつ、つまんねえの」

健吾はかばんを持ち替えて、人目を気にした後、そつとはるみの手を探した。拍子にコートを触る格好となり、どうやらセイがお尻だと気付いて慌てて離した。あたたかかつた。

「わりい、間違つた」

はるみは黙つてその指を握り返してくれた。

「佐賀、どうした」

「髪、ほどいていい？」

学校からだいぶ離れ、近くには誰一人青大附属の連中が見当たらなくなつた。菊乃先生のアパートの前で、立ち止まつた。

「貸せよ」

複雑な手まりをこしらえたようなはるみのお団子髪。中華娘風のこしらえだ。毎日どういうやり方で編み込んでくるんだろう。健吾はピン止めを指先で探し、はるみの黒髪をぱさりと下ろした。肩を握りこぶし程度隠す長さに広がつた。少しパー／マをかけている風にさらさらと揺れた。

待つついてくれた。赤ちゃんの泣き声が響き渡る桃色の部屋で、おなかをぺたんこにした菊乃先生がさつそくふたりを中に入れてくれた。もちろん、旦那はお仕事なので家にいない。まずは赤ちゃんを覗き込み、名前を聞いたり、べろべろばあしたりと遊んでみた。はるみは楽しげに菊乃先生の側で笑いつづけていたが、健吾としては、

「人間、猿から始まつたつてほんとだよな」

といつのが本音である。髪の毛がほんのわずかだつた。

「あらら、健吾くん、来年まで待つてよ。きっと髪長くなつて、私似の美人になつちゃつてるから。今言つたこと、後悔するかもよ」

「赤ん坊にもえるかよ」

ちよんとつつかれて、ふたり炬燵に入つた。申しわけ程度のツリーが窓辺に飾られていた。緑色のランチョンマットに赤のコースター、ワイングラスが用意されている。はるみを窓辺に座らせ、健吾は直角右側であぐらをかいた。鳥のから揚げ、イチゴケーキ、シャンパン、三人では食い切れそうにない量の料理が並んでいた。

「じゃあ、琴が寝てる間に、まず食べちゃいましょう」

おなかが落ち着いたのか、琴ちゃん……赤ちゃんの名前である……はベビーベットの上でおとなしくねんねしている。三人、しーつと指を立てながら、せつそく食べることに専念した。腹すかせてきて、正解だ。

腹がくちくなつたところで、シャンパンを開けた。ひそかに期待していたのだけれども、やっぱり子ども用の甘いノンアルコールだつた。はるみが黙つてすすつてているのを見て、なんか落ち着かなくなつた。

「佐賀、俺に」

「なあに？」

「もうねえんだ」

言われている意味がわからないみたいだ。はるみはきょとんとしたまま菊乃先生を見て助けを求めた。

「やあねえ、亭主関白今からやつてどうすんの。しょうがない。今

日は私がサービスしてあげるから」

今度は軽く拳骨で叩かれた。菊乃先生が注いでくれた。そんな怒られることしていないつもりだ。うちでいつも母が父にしていることを、なんとなく、やつてほしかつただけだ。

「ね、でも、健吾くん、本当に一学期は大変だつたらしいねえ」

「なんとか一件落着しそうな気配だし」

健吾はせつぞくシャンパンを飲み干した。テンションが上がってきた。

「あの女、結局、負けてやんの。やまあみゆってんだ」

「あの女って、杉本さん?」

はるみと田を合わせて頷きあつ。

「桧山先生がや、みんなの前で言い渡したんだ。杉本を来年の評議委員から下りすつてな。評議として選ばれる価値がないからなつてな」

「きやあ、偉い! よく言つた!」

手を叩く菊乃先生、むせこんでいる。

「佐賀を無視したりいじめたりしてゐへせに、評議委員なんてやらすわけいかねえつてな。で、クラスの女子連中にも、もし手を貸す奴がいたら、おしおきするぞつて言い渡した。先生かっこよかつたぜ」

「ほんとよねほんとよね」

「けど、俺としちゃあなんか、一方的過ぎるつてのと、やつぱし大人としても少し冷静にならうと思つてわ」

ちよつときざに決めてみた。

「なによ、気取つてないで教えなさいよ」

肩をゆがぶられ、何度か左右に揺れた。

「来年の三月まで猶予やるつて言つてやつたんだ。お情けでき。もし三ヶ月で佐賀や桧山先生にござんげして許してくれつて言つようだつたら考えるが、もし反省しないんだつたら、桧山先生の言つとおり保健委員に回つてやつてな。けど、保健委員の奴は露骨にいやな顔してたなあ」

「ふうん、保健委員にするつて、でも、そなると、困るねえ
いたずらっぽく菊乃先生がにやつぐ。」

「なに困るんだよ」

「保健委員つて、具合悪くなつた人を連れて行く係でしょ。保健室の当番もあるでしょ」

「よくわからねえよ。青大附属では医者になりたい奴が用達の委員会らしいけど」

今度は膝をぽんと叩かれた。

「みんな、具合悪くなつても保健室いけない人が増えそうね。杉本さんに連れていかれたら、さらに病気悪化しそう」

もつともだ、健吾は爆笑してうつぶした。はるみが困ったようにうつむいている。

「けど、俺なりの考え方としてさ」

あまり下品に走るのも、ガキっぽいので健吾は背を伸ばした。

「あの女はどうしようもなく、ガキだつてことはよくわかった」

「私の言つたとおりでしょ」

菊乃先生も胸を張る。

「俺がそう思つたんだ。絶対」

はるみに横田を使い、健吾は鳥のから揚げをもうひとつ放り込んだ。

「ふつう、あそこまで桧山先生がな、反省しろつて言つたら泣くか謝るかするだろ。ふつうの感覚持つてる奴だつたらそうだよな。なあんも言わねえんだぜ。ただ、にらんでるだけ。ただ、口尖らせているだけ。あいつ、人間の感情つてとともにねえなつて、ほんつと思つたぜ」

「だから言つてるでしょ、普通じゃないのよ、あの子はね」

両肘をついてあむあむとケーキをほおばる菊乃先生。

「六年の時だつていつもそうだつたじゃない。一点しか見つめないで、あの世を見つめているような目で、棒読みでしゃべつてるじゃない」

「俺も本能で思つてた」

「うちのお母さんも、梨南ちゃんは小さい頃からおかしいって言ってたわ」

はるみが口をやつと開いた。

「でしょ、ねえ健吾くん。クラスの女子たちはどうなの？ あれだ

け怒られてまだ、杉本さんの味方つているの？」

「いる、ひとりだけ、すっげえ不良」

「花森さんのことね」

結局花森が、杉本を取り囲む女子たちを一喝して教室から連れ出したのを見た。

「でも、ほとんどの女子は、もつ桧山先生があつかねくて、これ以上杉本の側にいるとやばいってことで、離れてるみたいだ。当然だよな」

「ふうん、桧山先生だつたつけ？ 担任の若い兄ちゃんにも言つておいたのよ。杉本さんの行動に同調している人たちも、まともな神経の人だつたらだんだんあの子がおかしいと気付くはずだから大丈夫ですよってね」

担任の若い兄ちゃんつて、菊乃先生とそつ歳変わらねえはずだぜ。

健吾は声に出そつとして、飲み込んだ。

「先生、ちょっと待つた」

はるみにも目を向け、健吾は尋ねた。

「なんで桧山先生のこと知つてるんだ？」

「だつて会つたもの、ね、はるみちゃん」

完全に事実と認めた顔でうなだれるはるみ。一言も聞いていない。

「健吾くんから話を聞いてね、大切な私の教え子たちが悩んでいるなら一肌脱がなくつちやつてことで、はるみちゃんに頼んであわせてもらつたのよ」

「なんで何も言わなかつたんだ、佐賀。

氷柱が折れたような音が、芯に響いた。

はるみは黙つてうつむいていた。

「前から不思議に思つてたのよ。どうしてあの子が青大附属に受かつたのかなあつて。健吾くんたちから話は聞いていて、先生も大変だろうし、でも私はもう小学校の先生じやないからと思って。それではるみちゃんにお願いして、一度杉本さんのことについてご相談

したいとこうことを話したの」

だからなんで、俺に言わねえんだよ。

あとのおしおきが怖いんだろう。たっぷり、してやる。

「健吾くん、はるみちゃんをいじめちゃダメよ。私が頼んだことなんだから。それで桧山先生と会つて、はるみちゃんを交えていろいろお話を聞いたの。たぶんはるみちゃん、途中からわけわからなかつたと思うんだけど。杉本さんの場合、小学校の頃から問題行動が目立つていたので、そういう人にふさわしい学校に行かせた方がいいんじゃないかしら、ってことまで話したの。ありのままのことを話しただけよ。ちゃんと本も渡してあげたんだから」

本？

わけがわからぬ。菊乃先生は本棚から一冊の教科書みたいな厚みの本を取り出した。

「難しくない本なんだけど、もしかしたら杉本さん、これじゃないのかなあって思つてね」

題名は『ふつうに見えない子どもに教師・親がやらねばならぬこと』

「そのものずばりじゃねえか」

健吾はそれだけ口にした。

「でしょ。健吾くん。この本少し過激なこと書いているんだけど『クラスの和を乱したり、人の言うことを聞けない子どもには、断固とした態度で挑まなくてはなりません。ふつうの感覚を持つ子ども達の迷惑になる以上、教師はその子どもに對して、これ以上は受け入れられない旨の線引きをするべきです』ての。私も先生だった頃はあなあにしちやつててまずかつたなあとは思つんだけどね。でも、杉本さんの家に恨まれてから私、学校辞めさせられたようなもんだからねえ」

はつとした。あかんぼが腹に入つたからじゃないのか。

「本当はね、健吾くん、はるみちゃん。私ももつと先生のお仕事したかったのよ。でもね、教育委員会に思いつきりにらまれて、ちょ

うビタインング悪く琴がおなかにできちゃつたでしょう。先生たちつてねえ、結構性格悪いのよ。のことさえなれば、ちやあんと一年休みを取つて、琴が大きくなつてから小学校に戻るつもりだったのに」

まだ後遺症が残つていたと、初めて知つた。

「今、先生じゃなくなつたから、桧山先生にはお話できたようなものよ。私がうつかり杉本さんの親に言つてごらんなさい。私が水商売して作った子なのよ、とかさんざん噂流されて、青鴎追い出されるかもしれないもの。でも、桧山先生つてしっかりしてゐよね。ちやんと私の話聞いてくれて、納得してくれたの。』わかりました。佐賀さんが苦しんでいるのは気付いてました。僕は佐賀さんとクラスの全員を守るために、戦います』つて言つてくれたのよ。やっぱりねえ、ふつうの人は、気付くのよ」

ふつう、ふつうと連発する菊乃先生に、なぜか胃がおかしくなるようなものを感じていた。から揚げ食いすぎただろうか。健吾は一度トイレを借りることにした。はるみに話し掛ける声だけが聞こえる。

「けどそつよね、はるみちゃん。杉本さんは自分が正しい、自分が素晴らしい信じて、実はみんなから嫌われてることに気付かないのよ」

はるみがか細く答える声もする。耳を澄ませた。

「先生、あの後、梨南ちゃんのお母さんにあの本貸したみたい」

「あら、そうだったの」

「うん。梨南ちゃんのお母さんを学校に呼び出して、証拠の写真とか、録音テープとかビデオとか、そういうのを全部見せたんですつて。私、いじめられた記憶ないのだけど、でも、梨南ちゃんのお母さん泣いちゃつたらしいんです」

「今更自分の娘がしたことに気付いてどうするつてのよ。早く気付けよばか親つて感じよね」

トイレの水を細く流し、健吾はさうにドアへ耳をくつつけた。自分が出て行くと黙りこくるかもしれない。

「これ以上私のことをいじめたり、桧山先生に口答えするようだったら、青大附属を退学にしますよ、って脅して、そのあと優しく言つたんですつて

「なになに？」

「菊乃先生の言つてた本を渡して、『もともと小学校の頃から梨南さんはおかしかつたらしいので病院に行けば直るかもしません』つて言つたんだって。『本人が悪気を持つてやつているのだったら退学してもらつけど、生まれつきの病気とかだつたらしかたないので面倒みます。病院に連れて行つて証明書を出してもらつてください』とかも言われたつて、お母さん言つてた。梨南ちゃんのお母さん、それから三田ぐらいい、小学校時代の人たちの家にお菓子もつて土下座して回つたんですねつて。うちに一番先に来て、私にしたこととを謝つて、許してくださいって」

「はるみちゃんのお母さんは、許したふりしたの」

「『梨南ちゃんは、そういう子だから仕方ありません』って言つたの。そうしたら『うつと、梨南ちゃんのお母さん泣き出して、学校で先生に言われたことをひとりでジャベリ続けてたの。お母さん話聞いてたけど、あとで言つてた。『生まれつきだつたら、どうしようもないですよね』って」

そうこうしたことか。

つながるつながる。頭の中でぶちぶちと切れる音がするようだ。

「実際この本に書いていることは、私からするとどうかな、つてまゆつばものなんだけど。もし琴にこう言つことを言われたら、きっと先生にたんか切つて転校させるわ。つちの娘をばかにすんなつてね。でもあの親にはそのくらい言わないとわからないのよ、あそこのつちは普通じゃないんだから親も娘も」

「梨南ちゃんはまだ病院に行つてないみたい」

「あら、大騒ぎしておいて？」

「梨南ちゃん、学校ではつんとすまして。お母さんに何度も病院に行くよつに言わてるらしいんだけど、『私は狂つてない、私は間違つてない』と言い張つて、お母さんとも最近口を利いてないらしいの。病気でないつてことになつたら梨南ちゃん退学させられるから、お母さんは必死になつて病気なんだつてことにしてよつとしてるんだけど」

「認めるのが怖いのね、赤ちゃんばぶばぶ。つちの琴の方がまだましかしさ。まだ『機嫌いい時はにこにこするもんね』

べろべろばーと、菊乃先生ははしゃいで笑つた。

「やつぱり、単純に信じちやつたのね。半分以上大嘘ばっかりなのに、あまりにも自分の娘のしていることと病気の内容がおんなじだから鶴呑みにしちやつたのねえ。少しはお勉強しなさいって感じよね。ま、あとは杉本さんの家でいろいろ修羅場ぐぐつてもらえればいいのよ。親のしつけのせいだつたら退学だし、病気のせいだつてことになつたら学校にいられる限りそれなりの扱いをされるし。さて、どっちを取るのかしさ。はるみちゃんへのいじめがなくならないようだつたら」

ぐふふ、声を押し殺して。

「青大附属は、私立ですから梨南さんは公立に転校することは簡単なんですよ、つて、桧山先生言つてたの、覚えてる?」

そこまで言つたよ。

もし菊乃先生やはるみの言つことが正しければ。

とうとう桧山先生は、杉本梨南に對して、いや、杉本梨南の親に對して十分すぎるほどとじめを刺したとこつことだ。『クラスの和を乱したり、人の言つことを聞けない子どもには、断固とした態度で挑まなくてはなりません。ふつうの感覚を持つ子ども達の迷惑になる以上、教師はその子どもに對して、これ以上は受け入れられない旨の線引きをするべきです』

杉本がいつぞや本を叩きつけて抗議したことがあつたけれど、ネタはたぶんその本なのだろう。『精神病院』うんぬんという言い方だつたが、はるみの言葉を信じる限り、実際それに近いことを口にしたのだろう。どんなに桧山先生が怒つても、のれんに腕押しだつた現実を見れば。

しかし、菊乃先生がはるみに手引きさせ、桧山先生に話をしたと云うのは初耳だつた。菊乃先生はかなりおながが大きかつたはずだ。そこまでして桧山先生に杉本の悪口を言いに行く意味つて、はるみもなぜ、健吾に一言も言わなかつたのだろう。

今聞いたことが本当だとすれば、健吾はすべてを否定しなくてはならなくなる。健吾の持つ「正義」「正々堂々」がすべて覆されることになる。ずっと守りつとしてきた、ふたりの「正義」が泥にまみれてしまつことになる。

白い雪に泥のしぶきがかかつたような、そんな冷たさに。

桧山先生があの女の親に言つたことは間違つてねえよ。あの女のせいでクラスが大迷惑だつてのは、すげえわかるし、あのままだつたら佐賀が傷つくつてわかつてた。あの女の親が大泣きして土下座して歩いたつてのも、ざまあみろつてのが本音だ。塩かけたつて当然だ。けど。

一週間前までだつたら平氣で罵れたはずなのに。違つ粘着力のある言葉が身体をうごめいた。動けなかつた。

でも、菊乃先生、違うだろ。その本、嘘つぱちだつたつて知つてたんだる。

汚点。

菊乃先生にも、はるみにも見たくなかったもの。

杉本梨南を染めている汚い色。

同じものを健吾は見つけてしまつた。

「あら、遅かつたねえ、おなか大丈夫?」

上機嫌の菊乃先生はまだけらけら笑いながら、シャンパンを手酌

で注いでいた。はるみがちらつと健吾を見上げたが無視した。田で感情を読まれるのが恐ろしかつた。

「菊乃先生」

健吾は正座した。

「なあに、かしこまつちゃつて」

「今のは、全部ほんとかよ」

田をそらさなかつた。健吾の方をきょとんと見つめた菊乃先生は、すぐにまぜつかえすがごとく、

「やだなあ、みんな聞いてたんでしょ。はるみちゃん話してなかつたの？」

「聞いてねえよ！ なんでだよ！」

はるみの方を向いたら何をするかわからない。こうえた。わめきたいのを必死に押し殺した。

「菊乃先生さ、さつきの本、大げさに書かれた本つて言つてたよな

「ずいぶん詳しく聞いてたのね」

「黙れ、話せよ。内容かなり嘘つぱちつてことだよな

戸惑つたように菊乃先生はテーブルクロスをもみもみした。

「そうよ。私、心理学の本つて結構読んでるんだけど、本によつて書いていることつて違うの。大きくなつたら分かると思うけれどもね、本を書いている人によつて、価値観というか、信じるもののが違うっていうのかな？ ある人は杉本さんみたいな人を優しく見守つてあげましょと唱えてるし、またある人はさつさと追い出しましょうつて話してるの。もちろんどちらの方にも言い分があるんだけど、本当だつたら杉本さんを許しましょ、つて言つてあげたほうがいいのはわかるのよ。私だつて人の親だもの。自分の子どもにはそうしたいわ。でもねえ」

はるみと再び田を合わせて意思疎通。ぶつちぎりたかつた。

「そんなこと言つたら、さらにあそこの親、開き直るじゃない？ 自分の娘はがんばつて、一生懸命。だから問題なのは学校なのよ、とか言いかねないじゃない？ 守つてあげない桧山先生が悪い

のよ、いじめられるはるみちゃんが悪いのよ、うちの梨南姫が一番なのよ、って言い出しかねないじやない」

健吾は頷いた。

「問題の解決になんてなんないのよ。嘘でもいいから爆弾を落として、ショックをたっぷり受けて、それからなんとかしてもらつた方がいいと私は思ったの。もちろん杉本さんがおとなしくなつて健吾くんやはるみちゃんの邪魔にならないところに追いやりられれば完璧だけど、まずはたっぷり罰を受けてもらわなくちゃ。いじめをしている張本人として当然よ。どうしたの健吾くん、杉本さんのこと、死ぬほど嫌いだつたでしょ」

「ああ、ゴキブリだと思うぜ、あの女は」「それは変わらないさ。

「けどな、菊乃先生、それって、やり方汚ねえよ」「手が震えた。まずい、また感情が高ぶつてしまつ。

「健吾、どうしたの」

「黙つてろ!」

肩を震わしている隣りのはるみを無視して、健吾は怒鳴った。

「そりやあ、俺はあるの女死ねばいいと思うさ、見るだけで吐きそうになる女なんてこの世であいつだけだ。國家権力で抹殺されてもなんとも思わない女だ。けどな、俺はあんな女と同じやり方で勝つのはいやだつたんだ。先生、知つてるだろ? 俺、ずっと青大附属に行つてから『いじめをしない、正々堂々』と勝負したいつて。あの女の悪事を全部さらけだしして、自分で土下座して謝らせるところまでさせて、最後は他の奴らから軽蔑されて罰せられるのがベストだつて。だから、俺はずつと正々堂々、誰にも文句つけられないやり方をしてきたつもりなんだ。ずっと、そうだったんだ、けど、けど」

「目を腕でこすつた。カフスボタンがひつかかつて痛い。」

「菊乃先生してること、あの女とおんなじじゃねえかよ!」

声が震えて、たんがからみそつだつた。鼻水がじゅるじゅる流れ

た。

「いいや、あの女は何言われても感じないみたいだから、それくらいされるのが当然だと俺も思つ。けど、あの親が土下座して謝つてるので、菊乃先生が言つ、嘘つこき本の内容でショック受けたからだろ？ 嘘の情報読んで、自分の娘が狂つてるんじゃないから泣いてるんだろ」

「全く嘘つてわけでもないのよ。内容がセンセーショナルかなつてことだけ」

「関係ねえよ。菊乃先生、あの女の親を騙したことになつちまうよ。菊乃先生まで、あの女と同じ奴になんてなつてほしくねえよ。俺は菊乃先生もはるみも、あの女と同じレベルにしたくなえんだよ！」

しばらく言葉よりも涙で壊れそうになりながら、健吾はティッシュを何枚か消費した。ごみ箱がだいぶ一杯になつた。雰囲気は湿り、時々琴ちゃんが泣きじゃくるのが聞こえた。健吾の分、何倍も声を出して泣いてくれていた。

あやしながら菊乃先生は、もつ一枚ティッシュを渡した。

「健吾くん、落ち着いた？」

「ばかやう！」

ぐぐもつた声でしばらく健吾はつぶやいた。

「健吾くん、正義感強いのはわかるよ。とっても真っ直ぐだつてわかつてゐるわよ。でもね、正々堂々なだけでは、人を反省せせたり、まともにしたりすることは出来ないのも、わかつてね」

言い訳すんなよ！

涙で目が曇り、隣りのはるみを覗く。すっかりうなだれたままだ。健吾を見るのが怖いのだろう、膝真つ正面でうつむいていた。

「もし、私があの時、杉本さんの親あてに話をしたとして、はたしてうまくいってたと思う？ 正々堂々と、健吾くんの言う通りにそういう本を渡して、杉本さんの親に話をしていたら。反省するわけないでしょ」

「ねえよ、ねえけど」

「そうしたら、かえつて桧山先生は逆恨みされたはずよ。はるみちゃんにいじめられた原因があるんだから、うちの姫に間違いはないわって、開き直られて、どんなに桧山先生が口すつぱく行つても聞く耳持たなかつたはずよ」

わかつてるわかつてる。

耳をふさぎたかった。でも菊乃先生は続ける。

「でも、ちゃんと桧山先生は正しいことをきちんと、冷静に説明してくれたみたいよ。はるみちゃんの話だと。そして、杉本さんのお母さんは素直に反省して、娘をなんとかまともな人間にしようと努力しているみたいよ。自分の娘が親友づきあいしてた子をいじめまくり、クラス全体で無視するなんて、どんなに言い訳しても許せない。その原因がもしかしたらご自分のしつけなのか、それとももともとの性格からなのか、それは調べないとわからないわ。でも私たちふつうの人にはそんなこと関係ないでしょ。はつきりしているのは杉本梨南という子が私たちにとつてゴキブリだつてこと。彼女の両親には、おもいつきりハエたたきで叩いて見せ付けてやらないと、気付かなかつたつてことよ。ゴキブリの生命力ってすごいんだから」

だから許されるつて正当化してどうするんだよ。

「健吾くん、よく聞いて。大人になるつていうのは、正々堂々とすることだけじゃないのよ。もちろん間違つたことをするのはよくないけれども、黙つていたらはるみちゃんが杉本さんの餌食になつてしまつとこだつたのよ。守るためには、鬼にならなくちゃだめなのよ。口で言つてもわからない人には、頭を使って攻撃するのも当然なのよ。知恵者でなくてはならないのよ」

大人になるということ。

混乱してきた。本条先輩の言つ、「大人」の眼が違う。

汚いことを場合によつてはしなくてはならない「大人」。はるみを守るためににはそれをしなくてはならなかつたこともある。杉本と、立村次期評議委員長を間ににしてにらみ合つた時。

かつての想いを刺激するような言葉をたっぷり浴びせた時。でも、決してもうそういう汚い手は使わないと決めていた。はるみのために。はるみにふさわしい男であるがために。

それだけじゃダメなのかよ。

涙は止まらなかつた。

「先生、頼む、聞いてくれよ」

声がひつくり返り、健吾はしゃくりあげながら続けた。

「あの女の親をインチキ本でもつて騙したことだけは謝つてくれよ

「何言つてるの、当然のことをしてあげただけじゃないの」

「謝る必要ないなら、せめてさ」

鼻水を何度もかすすつた。

「これから俺たちのクラスの連中に電話かけて、もういいかげん杉本の家を馬鹿にしあつたりするのはやめようとか言って、治めてくれよ。そうすりや、先生は心の広いすっげえい人なんだつてみんな思つてくれるぜ。あの馬鹿女の親を許してやつたすばらしい人なんだつて思つてくれるぜ。俺にもそう、思わせてくれよ。だつて、俺は」

はるみを見つめて、咽から吐き出すように。

自分の発する言葉が熱すぎて舌が焼けそうだ。

「俺も、今まであの女をはじめ、さんざん馬鹿にしてきた連中にしきたことがいじめだつたとしたら、土下座する覚悟はあるんだ。反省して、涙流して、もうしないって思うことはできるんだ。それに、自分の頭が普通と違うとわかつて、どうしようもないとわかつて、それでも必死に努力する奴だつているんだつて、最近知つたんだ。自分の性格に問題があつたとしても、最後の最後で悪かつたなんとかしたいつて思う奴だつていないわけじゃないんだ。どんなにショートしても決まらなくて苦しんでる奴を物笑いにするなんて、絶対にしたくないんだ。だから杉本が奇跡的に佐賀に向かつて頭を下げるかにかしたら、俺は許してやる。挨拶くらいはかましてや

る。すっげえやだけど、でも、俺は人間になりたいんだ。だからお願ひなんだ、菊乃先生、謝つていろいろ杉本の親を許してやってくれって、他のおばさん連中に頼んでやつてくれよ。ゴキブリを焼き殺すんではなくて、外に投げ捨てる程度にしてやつてくれって言ってくれよ。そうしたら

菊乃先生の瞳は揺れなかつた。六年の時の健吾たちを見つめる、先生のまなざしと一緒にだつた。いくら頼んでも、無理かもれない、そう思つた。

「菊乃先生をあの馬鹿女と一緒にしたくねえんだよー」

すっかり宴がしらけてしまつたので、健吾は立ち上がつた。

「また、落ち着いたら来てね」

答えなかつた。菊乃先生は果たして電話をかけてくれるのだろうか。どこかで健吾はあきらめていた。どんなに泣いても訴えても、菊乃先生は完全に先生の目に戻つてしまつていった。子どもの言つことなんてかまつてられないわという風にだつた。

「あら、はるみちゃんは置いてくの？」

慌てて荷物をまとめているはるみに首を振つた。今日はひとりで帰つたかった。

「「」ちうそをました」

やつとそれだけ口にした後、健吾はゆっくりとアパートのドアを締めた。

菊乃先生の顔は、困つていただけれどもやつたことを後悔しているようなものではなかつた。

勝負はついたぞ、ああ、あの女とは勝負付け終わつたぞ。俺は大人だと思つてあの女に情けかけてやつたんだ。けど、そんな裏工作があつたなんて、しかも佐賀の奴、何にも言わねえで。怒つたつてしかたないと分かつてゐる。でもどこにぶつけたらいのかわからない。健吾は足を何度もこすりつけるようにして雪道

を歩いた。

杉本の親には同情なんてしてやしない。

ただ、健吾のやり方に汚点がついてしまったことが許せなかつただけだ。

なにも土下座して回るというおまけがつかなくとも、健吾は杉本だけを正々堂々たたきのめせたはずだ。頭がおかしいんだよ、という匂わせぶりがなくても、杉本を言葉と態度の一通りでどん底に突き落とせたはずだ。たとえ感情に響かなかつたとしても、クラスの女子たちから支持を失つてゐるのは明白だ。していたことがすべて間違つたと思われてゐるのも確かだつた。頼みの綱である立村次期評議委員長から三行半を突きつけられてゐるのも、知らないだろ？が本当のことだ。保健委員の連中には同情禁じえないが、評議委員から引きずり下ろされたということには変わりない。どうせ来年の一学期以降は、反省の色を濃くしない限り……濃くしたとしてもわからないが……委員そのものに選んでもらえないに違ひない。

それに、桧山先生は、親に向かつてはつきり「退学」も匂わせたといつう。

そうしてくれれば万万歳というのが健吾の本音だ。

でも、それは杉本ひとりの罪であり、親とは関係ないだろ？

少なくとも親は、土下座してあやまり、少しでも娘を真人間にしようどし始めているのだ。

あの立村次期評議委員長が、自分のみつともない過去を反省し、自分のプライドをすたずたにして健吾に頭を下げたよ？！。杉本に情けをかけてやつてくれと、屈辱をもつて耐えていたよ？！。

努力している奴を、いくら馬鹿だと言つたつて、踏みにじる奴になんてなりたかねえよ。

はたして杉本がそれに気が付いているのがどうかはわからない。しかし、親があれだけ泣き伏してい立つたことを考えると、そういう家では修羅場が巻き起こつてゐるに違ひない。

桧山先生ははつたりをかませない人だな。退学をせよつたら、本気でさせるな。絶対に。

杉本が泣いて許しを請つかしない限り。心底悔い改めて、はるみのパシリにならない限りは。現在も街ではさんざん物笑いの種になっているのだ。全校生徒から同じ制裁を加えられて初めて、桧山先生は情けをかけようと思つだらう。それまでは一切、許しはしないだらう。

それは正しい。当然だ。けどさ。

「健吾、待つて」

「わざわざここに切り裂かれた風の中、聞こえていた声。健吾は無視して歩きつづけた。

「健吾、お願ひ、話、聞いて」

背中に飛びつゝ温もりを、健吾は振り払つた。長い髪と一緒に頬を張つた。

顔を覆つて泣きじやぐるはるみがいた。

しゃくじあげるよつて、こいつた風に見えた。

「私、私」

「ばかやううーー！」

泣き顔を見つめる。目がうるみ、こいつた風に見えた。

「なんで俺に言わねかつたんだ！」

「ごめんなさい」

「謝るよりわけだわけ。お前、俺のこと信じてなかつたのかよ」

「健吾、私」

はるみは口に髪の毛をくわえそうになりながら、払いのけ近づいてきた。健吾の熱気に一步たじろいだが、思い切つたようになまた進んできた。

「俺が正々堂々、命かけてお前守つて、あれだけ言つてもわからなかつたのかよ。あの女とおんなじ汚いやり方なんてしねえつて、あれだけ言つてたのに、お前と菊乃先生がしたこと、杉本と同じこと

となんだが、なんでだよ、ばかやう！」

ばかやうと口走りながら、健吾せまるみの肩を揺さぶった。再び涙が込み上げてくる。ふたりで顔をあわせて泣きじやぐるのを、通りすがりの人が奇妙そうに眺めていく。もつ他人様なんてどうでもいい。とうとうふたりは雪道のど真ん中でしゃがみこんでしまった。足に力が入らなかつた。

「健吾、聞いて」

一方的健吾の罵声を聞き終わり、はるみが髪の毛を押えながら健吾を見つめた。だいぶ瞳が落ち着いていた。

「私、健吾が私を守るうとしてくれたこと、知つてた。だから梨南ちゃんとも離れなくちやつて思つてた。私、梨南ちゃんのこと今まで嫌いじやないし、お母さんが言つ通り生まれつきかわいそうな子なんだから、優しくしなくちやつて思つてる。でも、健吾が私のために一生懸命なのに、梨南ちゃんのことを大切に、つて思うのが悪いような気、してならなかつたの」

「いいかげんにしろ。お前あの女に無視されたつて

「ううん、だからこの前話したでしょ。梨南ちゃんは、自分で自分がわかんないかわいそうな子だつて。私、小学校の頃からなんとか、そうなんだつて思つてた。みんなふつうの子と違つて、梨南ちゃんだけ変だと思つてたの。みんなが物笑いにしてるのを自分を警めてくれていてことなんだつて思い込んでたり、健吾の……知つてるよね」

繰り返すな。

肩を力なく揺さぶつたがはるみの口をふさぐことはできなかつた。

「あれね、他の先生が教えてくれたの。小学校に入学した時記念撮影で、健吾が私にずっとくつついていたから、梨南ちゃんが泣きじやくつてしまつてどこかになくなつたつてこと。覚えてないよね」

覚えてるわけねえだろ。

「私もほんの少ししか覚えてないの。梨南ちゃん覚えてないし」

し。でも他の先生はあんなに激しく泣きじやくつた梨南ちゃんを見たのはあれが最初で最後だつて言つてた。梨南ちゃんのお母さんも、同じこと話してたの。確か、あれからだよね。健吾のことを田の仇にするよくなつたの。私をひとりじめしようつとむよくなつたの」

きつかけなんて知らねえよ。俺が覚えているのは、顔を見た時から吐き気がして寄りたくないと思つただけだ。「なんとなく、健吾のことが大好きだつたんだなつて、大きくなつてから思つたの」「けつ、くびが出来るぜ」

「だから、変な虫を靴に入れられてしまつた時、梨南ちゃんを健吾が突き飛ばした時、もう私、梨南ちゃんと嫌われるのはしかたないんだつて思つたの。すぐ淋しかつたけど、私、どうしても梨南ちゃんを選べなかつたの。健吾が大切にしてくれればしてくれるほど、私、どうすればいいかわからなかつたの」

「だから俺を信じろつてあれほど」

「つうん聞いて。でも私、もう梨南ちゃんと友だちにはなれないつてあきらめようつと思つたの。だつて健吾が私のことをあれだけ必死に守つてくれるんだもの。私も、大切なことを、捨てようつて思つたの」

大切な、こと?

初めて健吾ははるみに目をやわらげた。立ち上がり、手を下ろした。髪の毛が一本指にからまつたままだつた。

「健吾のために、私も梨南ちゃんに對して鬼にならうつて決めたの。私、健吾を守りたい」

俺を守りたいつて、おい、佐賀、正氣か。

はるみを何度もじろじろ眺めた。嘘が隠れてないか、必死に探した。でも正真正銘、はるみの声も顔も言葉も、眞実だと体に響いていた。

「健吾、たぶん梨南ちゃんに逆恨みされると思つ。梨南ちゃんの

ことだから、きっと別の方法で歯向かってくことと思つ。梨南ちゃんは、好きってことを嫌がらせることでしか表せない子だつて、健吾のことをまだ想つてゐるのなら、いやがらせもHスカレートすると思つ。菊乃先生もお母さんも、桧山先生も同じ意見よ。だから、私は、梨南ちゃんがふつつの言葉で好きと言えるようになるまで、どんどん私のやり方で責めていくつもり。大丈夫。私は、梨南ちゃんに向かつて何を言われても、かわいそうな子としか思わないから、すすり泣くはるみを、健吾は手のひらでさすつてやつた。さつき思いつきりはたいた場所だつた。

「痛かったか」

「うん」

「反省してゐるか

「何を?」

「俺に嘘を言つてたこと、俺に隠し事してたこと、俺に菊乃先生のたくらみを教えなかつたことを」

威厳を保ちたくて、両腕を組んだ。

はるみは頬にある健吾の手を押えるよつとして、頷いた。

「本当だな、もう一度としないな」

「うん」

「俺に隠し事しないな。俺のこと、信じるな

「うん、信じる。健吾のこと、信じる」

「証拠、見せてみろ」

はるみが戸惑うのを健吾は強引に引き寄せた。人が見てようががまわなかつた。いつものような、額だけに唇をなぞらせるのではなかつた。かつた。

「おしおきだ。覚悟しろよ」

舌を思いつきり唇の中に押し入れた。歯にぶつかつたけれど、じ開けた。息が続くまで、からめたまでいた。

はるみを家まで送り届け、もう一度いつもの額への挨拶を交わし、

健吾はクリスマスプレゼントの待つ自宅へと向かった。

かわいそうな子、か。確かに。

悪いことをしているのにはるみのよつた反省をしない。

それどころかさら逆恨みしてくる。

もつと言つなら、自分のプライドを捨ててまで頭を下げて立村次期評議委員長のことすら、気にかけようとしない。はるみが精一杯、杉本のことを心配しているのに……哀れんでいるのかもしれないが……全く、許すことすらしない。どうしようもなくガキなのだ。

そういう中途半端な杉本梨南が健吾はどうしようもなく不快だった。存在そのものがいやだつた。想いをかけられていること自体が耐えられなかつた。でも、立村次期評議委員長の言つとおり、杉本は周りの連中がどんなに思いやつても、気付くことができないのだろう。頭の中がどいつのこいつのどうのはともかく、変わることすらできないのだろう。大人になるということすら理解できないのだろう。桧山先生がしつこいくらい「君は理解しているのかな?」と繰り返したのも、今ならわかる。

勝負はもつついでいる、か。

反省の色すら見せず、戦いを続けようとする杉本梨南。

大人の振る舞いすら拒否する、哀れな女。

俺がはるみを守るつとすると同じく、あんたが杉本をどうやって変えていくのかをとつくり拝見せてもらおうか。あんたは努力してるよ。ふつうにならうつて涙ぐましいことしてるよ。だから許されてるんだ。杉本に、そこまでさせることができたら、そう思わせることができたら、俺はあの女にやさしくしてやれるかもしれない。そうだよ。俺がこれから、あんたと評議委員会でやつていきたい、そう思つよにな、立村さん。

健吾は家に入る前にもう一度空を見上げた。闇は雲に覆われてに

ごつていた。

俺は、正々堂々、大人になつてみせる。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6767e/>

暁紅を待て～青潟大学附属シリーズ中学編

2010年10月8日15時44分発行